スライムですが、なにか？

転生したい人A

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生に退屈して転生を夢見ていた少女は、とある事故に巻き込まれて転生する。

スライムに転生した彼女は、世界最大のダンジョンの下層で生まれた。

何の説明もなく危険なダンジョンに放り込まれたことを愚痴りながらも夢見ていた転生をしたことで、手探りながらも過酷な異世界を満喫し始める。

そんな生活の中で出会った同じ転生者の蜘蛛と協力して異世界を生き抜く。

目次

プロローグ 1
戦闘と訓練 6
レベル上げと進化 11
魔法と新たなスキルと蜘蛛 17
進化と中層 24
おいしいものあったんだ 31
こいつ、私以上のチートなのか？ 36
誰だ!?こいつに任せたのは!? 43
上層と進化と禁忌 50
R1　悪夢と怪物 56
地龍単独討伐目指して修行!? 64
地龍狩り行くよぉ!? 70
さあ、外に出よう 76
人助けと転生者 82
化け物と人形と進化 87
転生の真実 95
修行をしよう 102
人化と衣食住 107
き、君は・・・・・・ 113
戦争？と最終進化 120
魔王と新しい呼び名 127
暇つぶしの英才教育とスパルタ特訓 134
蜘1　頼もしい味方 140
魔改造って楽しいよねぇ 144

お酒には気を付けようね　151
え？蜘蛛狩り？　159
旅路の摸擬戦　165
荒野の落とし穴　171
古代遺跡って楽しいねぇ　177
ＵＦＯ出現!?　185
ＵＦＯ撃墜作戦　193
ＵＦＯの中に入るぞ!?　202
目的達成!?　209
神の領域へ至った者達　220
弱ってからの日々　227
いろいろ面倒そうだ　233
悟りの正体　238

プロローグ

古文の授業をいつも通り寝て先生に怒られ、いつも通り欠伸をして目をこすりながら黒板に視線を向ける。
いつもと何も変わらない日常にため息をついて窓の外に視線を向ける。
いつもと変わらない風景にもう一度ため息をついて視線を黒板に戻す。
今教室から飛び出しても家に帰って親に怒られるだけで何も変わらない。
本当につまらない世界、もっと楽しい世界に転生したいな。
魔法や剣のファンタジー世界に転生して好き放題やれたら楽しそうなのに・・・・・・。
いつも通りにくだらないことを考えていると、目を眩ませるような光に包まれて意識が途切れた。

どれだけの間意識が途切れていたのか分からないが、気が付いた私の目の前にはいつもと変わらない日常は消えてなくなっていた。
どこか分からない洞窟で目が覚めた私は辺りを見渡すが、人の姿がどこにも見当たらない。
地面が近く見えるから横になってるのか？
ぱちゃ
・・・・・・ん？
立ち上がろうと足に力を入れたら一瞬だけ地面から遠のいたが、すぐに同じ位置に戻った。
そして目の位置が戻った時に地面に水を叩きつけたような音が聞こえたが、何の音だ？
ゆっくりと視線を下に向けると、水色をした半透明の物体が目に入った。
驚いて体を後ろに逸らすが、水色の物体もスライムのようにぐにゃりと伸びる。

・・・・・・ん？
なんでこのスライムみたいなの私についてくるんだ？
体にスライムがついているような感覚はないんだけど・・・・・・
スライムみたいなものを取ろうと手を伸ばすと、視界の左端の方からスライムみたいなものが伸びてくる。
・・・・・・ん？
伸ばした手を上下に軽く振ってみると、横から伸びてきたスライムみたいなものが上下に揺れる。
あれ？これもしかして・・・・・・私の体？
もしかして、私スライムになってる？
思いついたことを確認するために首を精一杯伸ばして体を見ると、異常に縦に伸びた水色の半透明なスライムの体が見えた。
自分の状態を確認できた私は首を戻して少しの間思考が停止した。
思考停止から復活した私は状況を簡単にまとめる。
えっと、意識が途切れる前の最後の記憶は授業中に突然発生したあの光。
そして気が付いたら見たこともない洞窟で、体はファンタジー世界でよく登場するスライム。
つまり、これはあの光が原因で死んで、どこかのファンタジー世界のスライムに転生したということかな？
転生、転生か・・・・・よし、取り合えず、魔物に遭遇しないようにどこかに隠れて色々と試そう。
洞窟ということで危険な魔物に遭遇する可能性があるので、他の魔物が入れないような岩の隙に隠れる。
何か、ステータス画面みたいなものはないかな？
流石に、ゲームじゃなんだからステータス画面なんてないか。
鑑定のスキルとかあれば便利なんだけどな・・・・・・
《現在所持スキルポイントは１０００です。
スキル『鑑定ＬＶ１』をスキルポイント１００使用して取得可能です。
取得しますか？》

おお!?もしかして、この世界私が思っている以上にゲームに近いのかな？
取得可能なら遠慮なく取得しよう。
《『鑑定ＬＶ１』を取得しました。残りスキルポイント９００です。》
よし、早速自分を鑑定しよう。鑑定。
《スライム　名前なし（蓮見葵）》
え？これだけ？
鑑定のレベルが低いから見れる情報が少ないのかな。
しかし、前世の名前もしっかりと出るんだな。
自分の情報でこれだと、この辺の岩とか調べても意味がなさそうだけど、一応鑑定しておこう。
《岩》
よし、鑑定はレベルを地道に上げていくしかないな。
鑑定があるなら他に探知系のスキルないかな？
《現在所持スキルポイント９００です。
スキル『探知ＬＶ１』をスキルポイント１００使用して取得可能です。
取得しますか？》
おお、探知も取得できるのか。
よし、取得。
《『探知ＬＶ１』を取得しました。残りスキルポイント８００です。》
さて、早速試してみよう。
鑑定と同じように念じれば使えるかな。
うぐっ!?
あああああああああああああああ!?
そこかしこから色んなものの情報が大量に流れ込んでくる。
情報量が多すぎてまともに情報を処理できない。
どこが頭かも分からない体だが、頭を殴られたような激痛が襲ってくる。
なんだよこれ!?
い、痛い、けど、情報は取得出来てるし、慣れるしかないのか……

無理!?こんなの無理!?
情報を整理出来ないか、頑張って取得した情報を理解しようとするが、情報量が多すぎてまともに処理できない。
《熟練度が一定に達しました。スキル『探知ＬＶ１』が『探知ＬＶ３』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『演算処理ＬＶ１』を獲得しました。》
滅茶苦茶簡単にスキルレベル上がるんだ。
それに熟練度でもスキルを勝手に取得できるわけね。
けど、この探知のスキルしばらくはまともに使えないな。
よし、残りのスキルポイントでスキルさっさと取ろう。
次は、未来が見えるスキルがあればいいんだけど・・・・・・
《現在所持スキルポイント８００です。
スキル『予見ＬＶ１』をスキルポイント１００使用して取得可能です。
取得しますか？》
流石に、これは大丈夫だよな？
・・・・・・取得。
《『予見ＬＶ１』を取得しました。残りスキルポイント７００です。》
これも念じれば使えるのかな？
・・・・・・何も起きない。
何か条件があるのかな？
仕方ない、他のスキルを取得しよう。
後は・・・・・・何か魔法が欲しいな。
《現在所持スキルポイント７００です。
スキル『影魔法ＬＶ１』をスキルポイント７００使用して取得可能です。
取得しますか？》
おお、魔法もあるのか。
早速取得。
《『影魔法ＬＶ１』を取得しました。残りスキルポイント０です。》

よし、どんな魔法かな？
影ってことは影を操って攻撃できるのかな？
あれ？念じても発動しない。
・・・・・魔法とスキルって発動方法違うの？
魔法ってどうやって発動させればいいの？

・・・・・スキルポイント７００無駄にしちゃった。

戦闘と訓練

はあ、失敗したなあ・・・・・・
取得したスキル全部まともに使えない。
周りの魔物がどれだけ強いかによるけど、生まれたばかりの私がまともに戦えるかなんて分からないし・・・・・・
岩の隙間から体を出して周りを見渡してみるが、特に魔物の姿は見えない。
よし、食料確保に行こう。
軽く見て回って食べれるものが無ければ魔物を倒して安全な場所で食べよう。
食料がなくなれば空腹で死ぬだけ、折角転生したのに餓死なんて嫌だ!?
食料を取りに行くことを決めた私は出来るだけ岩の隙間に隠れながら食料を探す。
洞窟内を探して回るが、食料も出口も見つからない。
食料と出口の代わりに強そうな魔物は何度も見かけた。
食料が無いことも想定してたし、魔物を狩に行こう。
けど、弱そうな魔物を選んで襲わないと、簡単にやられちゃいそうだよね。
見かけた魔物で一番弱そうだった蛙を背後から襲って反撃される前に倒そう。
狙う獲物を決めた私は早速蛙を探す。
ちょうど一匹で行動している蛙を見つけ、岩の隙間に隠れながら背後に周り混んで岩を持ち上げて殴り付ける。
岩で殴られた蛙はそれなりのダメージがあったようで悲鳴を上げて怯んでいる。
よし、今出来るだけ殴っておこう。
二、三回殴ると、蛙がふらふらしながら振り向こうとしてくる。
振り向いて反撃しようとする蛙がブレて二重に見える。
ん?今のが予見かな?

予見のスキルと思われる現象に殴る手を止めた瞬間に蛙が何かを毒々しい液体を吐き出してくる。
ブレて行動が前もって分かっていたため、問題なく回避する。
あ、危ない。
考えるのは後にしてさっさと倒そう。
蛙がもう一度攻撃してくる前に岩で頭を何度も殴り付ける。
蛙が動かなくなったのを確認して蛙の死体を持ち、隠れながら安全な岩の隙間に移動する。
移動の途中で隠密のスキルを獲得したので、スキルを使って安全に移動した。
さて、いただきます。
蛙に口?を掛けてかぶりつく。
歯がないからかかみ切ることは出来なかったが、酸か何かで溶かして飲む形で食べれるようだ。
味は、苦いし美味しくない。
舌があるかも分からないのにしっかりと味は分かるんだなあ。
そんなくだらないことを思いながら食べ続ける。
《熟練度が一定に達しました。スキル『毒耐性ＬＶ１」が『毒耐性ＶＬ２』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『酸耐性ＬＶ１」が『酸耐性ＶＬ２』になりました。》
あら、そんな耐性を最初から持ってたのか。
私が獲得したスキルじゃないから、スライムとして最初から持ってるスキルなのかも。
もしかしたら、他にも良いスキルがあるかもしれないし、期待しておこう。
まあ、確認方法ないんだけどねえ～
くだらないことを考えながらも食べ続け、ようやく蛙を食べ終わった。
お腹もいっぱいになったし、鍛えよう!?
まあ、鍛えるとは言ったけど、この体って筋トレして意味あるのか

な？
魔法の使い方も魔力があるかも分からないし、どう鍛えたらいいのか全然分からないんだよねぇ
まあ、スキルのレベルを上げるかな。
そうと決まれば覚悟と決めて探知発動!?
ぎゃあああああ!?
痛い!?痛い!?痛い!?
けど、我慢だ!?
しばらくの間探知を発動させ続けていると、スキルの取得を告げていた声が聞こえた気がしたが、それどころではない。
そもそもの情報が多いので激痛に耐えながら少しでも情報を整理しようと頑張る。
どれくらい経ったか分からないが、激痛に耐えられなくなり探知を止める。
《熟練度が一定に達しました。スキル『探知ＬＶ５』が『探知ＬＶ６』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『演算処理ＬＶ６』が『演算処理ＬＶ７』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『並列思考ＬＶ３』が『並列思考ＬＶ４』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『外道耐性ＬＶ５』が『外道耐性ＬＶ６』になりました。》
おお、よく分からんがかなりスキルレベルが上がった。
けど、物凄く疲れたからもう寝よう。

無茶なスキルレベルの上げ方をした次の日、目が覚めると物凄くお腹が空いてた。
うぅ、早く食べられる奴探さないと餓死しそう。
昨日と同じように一匹で行動している蛙を見つけて岩で殴り殺す。
予見のおかげで反撃も上手く躱せるし、隠密で不意打ちすれば意外と楽に殺せる。

《経験値が一定に達しました。個体、スモールレッサースライムがＬＶ１からＬＶ２になりました。》
《各種基礎能力値が上昇しました》
《スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『毒耐性ＬＶ２』が『毒耐性ＬＶ３』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『酸耐性ＬＶ２』が『酸耐性ＬＶ３』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『鑑定ＬＶ２』が『鑑定ＬＶ３』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『影魔法ＬＶ１』が『影魔法ＬＶ２』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『探知ＬＶ６』が『探知ＬＶ７』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『演算処理ＬＶ７』が『演算処理ＬＶ８』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『並列思考ＬＶ４』が『並列思考ＬＶ５』になりました。》
《熟練度が一定に達しました。スキル『外道耐性ＬＶ６』が『外道耐性ＬＶ７』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『打撃耐性ＬＶ１』が『打撃耐性ＬＶ２』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『斬撃耐性ＬＶ１』が『斬撃耐性ＬＶ２』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『破壊耐性ＬＶ１』が『破壊耐性ＬＶ２』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『苦痛耐性ＬＶ５』が『苦痛耐性ＬＶ６』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『酸攻撃ＬＶ１』が『酸攻撃ＬＶ２』になりました》
《スキルポイントを入手しました》

うわぁ、なんかレベルが1上がっただけで一気に色々上がったな。
もしかして、魔物狩ってレベル上げた方が効率的かも。

取り合えず、レベルの上がった鑑定で自分を鑑定。
《スモールレッサースライム　名前なし（蓮見葵）》
おお、種族名が詳しく出るようになった。
やっぱり、スキルレベルを上げることで詳しい情報が見れるようになるんだ。
そうと決まればこいつを食べたら狩れるだけ狩って寝る前に探知のレベル上げと鑑定のレベル上げをしよう。
《条件を満たしました。称号『悪食』を獲得しました》
《称号『悪食』の効果により、スキル『毒耐性ＬＶ１』『腐蝕耐性ＬＶ１』を獲得しました》
《『毒耐性ＬＶ１』が『毒耐性ＬＶ３』に統合されました》
この世界、称号まであるのね・・・・・・

レベル上げと進化

さて、称号を取ればスキルも増やせることは分かった。
けど、称号は取得条件が分からないから、近くの魔物を狩りまくってレベル上げと食料の確保だ!?
岩の隙間から体を出して敵を探し始める。
この洞窟で現在私が倒せそうなのは蛙や蜂くらいしかいない。
蜂に関しては飛んでるので倒し辛いから複数いると厳しい。
やっぱり、狙うのは蛙かな。
蜂は余裕がある時に倒そう。
狙う獲物について考えていると、ちょうど二匹で行動している蛙を見つけた。
取り合えず、隠密で隠れながら背後に回り込む。
近くにあった大きめな岩で一匹目の蛙の頭を殴り付ける。
二匹目の蛙が気づいて振り向いて来るタイミングに合わせて振り下ろした岩を顎を狙って振り上げる。
二匹目が倒れたのを確認して立ち上がろうとしている一匹目の蛙にもう一度岩を振り下ろす。
二匹目が立ち上がる前にもう一度蛙に岩を振り下ろすと、一匹目が動かなくなった。
一匹目を倒したのを確認して立ち上がって毒を吐こうとしている二匹目に岩を投げつける。
岩は上手く蛙の頭に当たり倒すことに成功する。
もう一度立ち上がる前に蛙に飛びついて手?で殴り付けて殺す。
よし、蛙なら二匹いても問題ない。
こいつら安全な場所に運んだら次の獲物を探そう。
それから十数匹の蛙と数匹の蜂を倒して岩の隙間に戻るころにはレベルが6に上がっていた。
ふー、頑張って殺し続けたからお腹が減ったな。
お腹いっぱいになるまで食べたら探知のレベル上げをしよう。
蛙を三匹食べて探知を耐えられるだけ発動してまた力尽きて気絶

するように眠る。
次に目が覚めたら確保している蛙と蜂を数匹食べてまた探知を発動して気絶するように眠る。
おそらく四日目に食料が尽きた。
ああ、探知のレベルは１０になったけど、まだ頭が痛い。
最初に比べれば大分ましになったのは、外道耐性が外道大耐性になってレベルがかなり上がったからかな。
演算処理も高速演算になったから、頑張れば少しは扱えるようになってきた。
外道大耐性がカンストしたら探知が普通に使えるようになりそうだけど、まだレベル３何だよねぇ。
地道に頑張るしかないか。
よし、食料確保とレベル上げに行こう!?
鑑定もレベルが３になったことでレベルまで見えるようになったし、鑑定のレベルを上げて行こう。
食料確保に出てすぐ、ずっと気になっていたそこら中の壁にいる黒い虫を鑑定してみる。
《エルローゲーレイシュー　ＬＶ３》
レベルは低いんだ。
こんな危険な洞窟でたくさんいるから強いのかと思ったけど、もしかして強力な毒があるとか？
なら、私毒耐性高いからこいつらいっぱい倒して持って帰ろう。
そこら中にいる黒い虫を手？で叩いて倒して回る。
たくさんいるので簡単に倒せるし、レベルも上がるからかなり効率がいいな。
黒い虫を持てるだけ持って移動し、数十匹ほど確保する。
積まれて出来た黒い虫の山から一匹手？で取り、口を開けてかぶりつく。
そして盛大に吐き出した。
鑑定のレベルが４になって確認できるようになったＨＰが減っているのを確認しつつ黒い虫に視線を戻す。

し、信じられない。
何これ？まずさで食べ物を吐くことって本当にあるんだ。
こいつらがたくさんいるのって毒持った蛙以上にまずいからあんなにたくさんいたんだ。
《熟練度が一定に達しました。スキル『腐食耐性ＬＶ３』が『腐食耐性ＬＶ４』になりました。》
・・・・・腐食って食べ物として最悪ね。
けど、耐性上げは必要・・・・・・よね。
私は震える手？で黒い虫を掴んでもう一度かぶりつく。
まずい・・・・・死ぬほどまずい・・・・・・・。
けど、耐性は必要、耐性は必要、耐性は必要・・・・・・・・・・・・・・
耐性は必要と自分に言い聞かせながら無心で黒い虫を食べ続けた
おかげで腐食耐性がそこそこ上がった。
お腹もいっぱいになったのでまた探知で外道耐性のレベル上げを始める。
何日経ったか分からないが、黒い虫の山がなくなるころには腐食耐性も腐食大耐性に進化し、外道大耐性は外道無効に進化した。
ああ、ようやく、ようやく、あの長く苦しい日々から解放される。
地獄のような日々と探知から入ってくる情報に少しの間感動に浸る。
さて、そろそろ情報の整理に移ろう。
探知で得られた情報に魔力の流れがあった。
この魔力を操れるようになれば使えなかった影魔法が使えるようになるのかも。
そうと決まれば、魔力操作の練習をしながら鑑定のレベルを上げよう。
ずっと居座っている安全地帯から出て魔物を探す。
探知のスキルを使えるようになったおかげで魔物の探索や危険な魔物を避けることがずっとやりやすくなった。
弱そうな奴を狙って鑑定をかけまくり、鑑定のレベル上げを行う。
複数匹で行動している蛙も倒せるようになってきたし、蜂も予見で

行動を先読みしての戦闘に慣れてきたので簡単に倒せるようになった。
魔物を数匹狩っていると、レベルが１０になり進化可能とのことだ。
取り合えず、魔物を持って安全地帯に戻る。
さて、私は何に進化できるのかな？
《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。
レッサースライム
スモールスライム》
ん～、レッサーとスモールの違いか。
レッサーも小さいって意味があるけど、この場合だと劣っているの方が正しそうだな。
今がスモールレッサースライムだから、上位種に進化するか、成長して大きくなるかの二択なんだろう。
だとすると、スモールスライムの方がいいな。
じゃあ、スモールスライムに進化で!?
《個体スモールレッサースライムがスモールスライムに進化します。》
おお、進化がはじ、ま、た・・・・・・
《進化が完了しました》
《種族スモールスライムになりました》
《各種基礎能力値が上昇しました》
《スキル熟練度進化ボーナスを取得しました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『鑑定ＬＶ５』が『鑑定ＬＶ６』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『腐蝕大耐性ＬＶ３』が『腐蝕大耐性ＬＶ４』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『並列思考ＬＶ８』が『並列思考ＬＶ９』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『剛毅ＬＶ１』が『剛毅ＬＶ２』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『天魔ＬＶ１』が『天魔ＬＶ２』

になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『天道ＬＶ１』が『天道ＬＶ２』になりました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『予見ＬＶ８』が『予見ＬＶ９』になりました》
《スキルポイントを入手しました》
え？え!?
・・・・・進化中って意識途切れるのか。
安全な場所で進化してよかった。
下手したら進化中に襲われてたかもしれないし。
それにしても知らないスキルが何個かあったな。
鑑定のレベルも上がったし、鑑定してみるか。
《スモールスライム　ＬＶ１　名前なし（蓮見葵）
ステータス
ＨＰ：９３／９３（緑）
ＭＰ：１／３５２（青）
ＳＰ：７４／７４（黄）
：１／７２（赤）
平均攻撃能力：４１７
平均防御能力：６０
平均魔法能力：３６０
平均抵抗能力：９２
平均速度能力：８７》
おお!?ステータスが見れるようになってる!?
てか、ＭＰとＳＰがほとんど空っぽになってるのは、進化の影響かな？
取り合えず、進化前に狩った魔物でも食べながら考えよ。
進化前に確保した魔物を食べながらステータスを確認する。
私って脳筋だったんだ。
一応魔法も高いけど、全然魔法の使い方分からないしなぁ。
そもそも魔力の操作も出来ないんだけど・・・・・

はあ、食料集めたら魔力の操作練習しよう。
魔力操作の練習をすることを決めて安全地帯を出ると、黒い虫が目に入った。
・・・・・・耐性は必要・・・・・・・・・・・・・だよね。

魔法と新たなスキルと蜘蛛

黒い虫を食べ続けて何日経っただろうか。
漸く腐食耐性が腐食無効にまで上がった。
魔力操作も食料の確保にかける時間が無いため、練習する時間がかなりあったことで魔力操作のスキルを獲得してレベルまで上げられた。
魔力操作のレベルは問題なく上がってくれている。
問題なのは影魔法だ。
全くもって使えないじゃん!?
もっと戦闘向きな魔法無いの!?
まあ、影魔法も使い続けたからそろそろレベルが１０になりそうだし、進化先のスキルに期待するしかないな。
しかし、いいこともあった!?
食料の確保に出かける時とＭＰが空っぽの時に鑑定を使い続けたこともあってレベルが８になった。
《スモールスライム　ＬＶ４　名前なし（蓮見葵）
ステータス
ＨＰ：１０８／１０８（緑）
ＭＰ：４５３／４５３（青）
ＳＰ：９４／９４（黄）
：９２／９２（赤）
平均攻撃能力：５６７
平均防御能力：７３
平均魔法能力：４５１
平均抵抗能力：１１８
平均速度能力：１０２
スキル
『ＨＰ自動回復ＬＶ４』『ＭＰ自動回復ＬＶ４』『ＳＰ回復速度ＬＶ１』『ＳＰ消費緩和ＬＶ１』『集中ＬＶ１０』『猛毒耐性ＬＶ２』『酸大耐性ＬＶ２』『外道無効』『腐食無効』『打撃耐性ＬＶ８』『斬撃耐性ＬＶ８』

『破壊耐性ＬＶ８』『苦痛耐性ＬＶ６』『酸攻撃ＬＶ６』『影魔法ＬＶ８』『魔力操作ＬＶ９』『高速演算ＬＶ３』『並列意思ＬＶ１』『思考加速ＬＶ６』『隠密ＬＶ８』『視覚領域拡張ＬＶ２』『回避ＬＶ３』『投擲ＬＶ５』『命中ＬＶ３』『鑑定ＬＶ８』『予見ＬＶ９』『暗視ＬＶ１０』『視覚強化ＬＶ８』『聴覚強化ＬＶ８』『嗅覚強化ＬＶ７』『味覚強化ＬＶ５』『触覚強化ＬＶ６』『堅牢ＬＶ１』『剛毅ＬＶ２』『天魔ＬＶ２』『天道ＬＶ２』『神性領域拡張ＬＶ３』『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』

スキルポイント：２５０》

気づかないうちに結構なスキルを取ってるな。

けど、分からないのが二つだけあるんだよねぇ。

『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』

この二つが本当に分からない。

『ｎ％Ｉ＝Ｗ：鑑定不能』

『悟り：神へと至らんとするｎ％の力。自身の持つ神性領域を拡張する。取得する経験値と熟練度、各能力成長値が大幅に上昇し、他の支配者スキルが取得不可能になる。また、Ｗのシステムを凌駕し、ＭＡ領域への干渉権を得る。』

『ｎ％Ｉ＝Ｗ』はともかくとして、ステータスやスキルの成長が早かったのは『悟り』のスキルがあったからなんだ。

取得したって言われた覚えがないから、最初から持ってたスキルなんだろうけど・・・・・・

まあ、転生特典って考えておこう。

けど、最初から持ってたスキルで取れないスキルがあるのはどうなんだろう。

そもそも私、前世も今世も悟りなんて開いた覚えないんだけどなぁ。

ステータス画面を見ながら少し考えて思考を切り替える。

あんまり考えても仕方ない。

今は戦闘に使えるスキルの獲得が重要かな。

取得う可能なスキル一覧を見ながら考えよう。

スキルポイントが少ないから表示されるスキルの数も少ない。

スキルの取得で何度も失敗したから慎重に選ばないといけないしなぁ。
ん～、取得できるスキルで戦闘に使えそうなのは蜘蛛糸くらいかなぁ。
攻撃力はあるわけだし、動きさえ止めれば大体の魔物は倒せるようになると思うのよねぇ。
よし、取ろう。
今回も失敗したらそこらへんに居る雑魚へ八つ当たりしよう。
《『蜘蛛糸』を獲得しました。残りスキルポイントは０です。》
さあ、使えるかのテストだ!?
えっと、どうやって出せばいいんだ?
取り合えず、手から出すイメージで、出ろぉ!?
手?から白い蜘蛛糸が出て手?を向けていた先の岩に当たった。
おお!?出た出た!?
これを使いこなせば大体の敵は倒せる。
そうと決まれば早速レベル上げと魔物狩りだぁ!?
安全地帯を出て雑魚の魔物を狩りレベルとスキル上げを続ける。
レベル上げを続けているある日、魔物を狩りに出ると猿の大群が大移動しているのを見かけた。
どうしたんだろう?
この先に何かあるのかな?
バレないようについていってみよっと。
隠密を使用して猿の群れについて行く。
猿について行くと、天井付近に巣を張った蜘蛛を狙ってここまで来たようだ。
あの蜘蛛そんなに強いのか?
鑑定っと。
《スモールタラテクト　ＬＶ４　名前　なし
ステータス
ＨＰ：４０／４０（緑）
ＭＰ：４０／４０（青）

ＳＰ：４０／４０（黄）
：４０／４０（赤）
平均攻撃能力：２２
平均防御能力：２２
平均魔法能力：２０
平均抵抗能力：２０
平均速度能力：３９０
スキル
『ＨＰ自動回復ＬＶ２』『毒牙ＬＶ８』『毒合成ＬＶ１』『蜘蛛糸ＬＶ８』『斬糸ＬＶ３』『操糸ＬＶ６』『投擲ＬＶ２』『集中ＬＶ２』『命中ＬＶ２』『回避ＬＶ１』『鑑定ＬＶ７』『探知ＬＶ４』『隠密ＬＶ５』『外道魔法ＬＶ２』『影魔法ＬＶ１』『毒魔法ＬＶ１』『過食ＬＶ３』『暗視ＬＶ１０』『視覚領域拡張ＬＶ１』『毒耐性ＬＶ７』『麻痺耐性ＬＶ３』『石化耐性ＬＶ２』『酸耐性ＬＶ３』『腐蝕耐性ＬＶ３』『恐怖耐性ＬＶ５』『苦痛無効』『痛覚軽減ＬＶ５』『強力ＬＶ２』『堅固ＬＶ２』『韋駄天ＬＶ２』『禁忌ＬＶ２』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』》

え？弱くない？

スキルと速度は高いけど、それ以外だと猿の方が普通に強い気がするんだが・・・・・・

こいつらあんなに弱い蜘蛛をこの数で殺しに来たの!?

意味わかんないんだけど、あの蜘蛛に何かあるの？

蜘蛛のステータスをもう一度見てみるが、やっぱり弱い。

スキルの量は多いけど、強いとは思えないよねぇ。

ん？

『ｎ％Ｉ＝Ｗ』

これって私も持ってる謎スキルだ。

何体も魔物を鑑定して来たけど、一匹も持って無かったし効果も不明。

私が転生者だから持ってるスキルかと思ったんだけど、違うのかな？

いや、私の転生前の最後の記憶は古文の授業中だった。

もしかして、私と同じ転生者？
だとしたら、クラスメイトの誰かかもしれない。
意識を蜘蛛と猿に戻すと、蜘蛛が壁に大量に張り付いた猿を蜘蛛の糸で無理矢理引きはがして地面に落としていた。
ん～、知能的にもそこらへんの雑魚と比べてかなり高いよねぇ。
転生者ぽいよねぇ。
そんなことを考えていると、猿の上位種が三匹ほど新たにやって来た。
どこからどう見ても普通の猿より強い。
つまり、あの蜘蛛よりはるかに格上だろう。
助けた方がいいのかなぁ。
ん～、死なれたら確認できないし、助けよう。
助けることを決めて私は大きい猿が投げた岩より大きい岩に糸を大量に巻き付ける。
糸を巻き付けて糸が千切れないように強度を出来るだけ上げる。
よし、準備ＯＫ。
今助けるからもう少し待って、え!?もう大きい猿一体倒したの!?
急がないと、助ける前に戦い終わりそう。
岩を持ち上げて二体目を毒で倒した蜘蛛を背後から襲おうとしている大きい猿目掛けて投げつける。
大きい猿に大ダメージを与えた後は、岩に巻き付けた糸を引いて振り回し下にいる猿どもにぶつけて倒していく。
猿を大量に倒したことでレベルが１０になって進化可能になったが、今は置いておこう。
辺りを見渡して動ける猿がいないことを確認すると、蜘蛛に視線を向ける。
蜘蛛はかなり警戒しているようで隠密で隠れてしまった。
探知があるから無駄なんだけどなぁ。
話しかけようにも声でないし、どうしようかなぁ。
・・・・・・そうだ!?
思いついたことを実践するために私はそこらに転がっている猿の

死体を端の方に放り投げる。
スペースを確保して糸を使って文字を書いていく。
書き終えたら気づいてもらうために岩で地面を数回叩く。
けど、転生者じゃなかったらどうしよう？
まあ、殺せばいいよね。

蜘蛛子視点
何なのあいつ!?
《スモールスライム　ＬＶ１０　名前なし（蓮見葵）
ステータス
ＨＰ：１２０／１２０（緑）
ＭＰ：５９８／５９８（青）
ＳＰ：１０５／１０５（黄）
：１０４／１０４（赤）
平均攻撃能力：６６７
平均防御能力：９０
平均魔法能力：６１０
平均抵抗能力：１３０
平均速度能力：１２１
スキル
『ＨＰ自動回復ＬＶ５』『ＭＰ自動回復ＬＶ５』『ＳＰ回復速度ＬＶ２』『ＳＰ消費緩和ＬＶ２』『集中ＬＶ１０』『猛毒耐性ＬＶ２』『酸大耐性ＬＶ２』『外道無効』『腐食無効』『打撃耐性ＬＶ９』『斬撃耐性ＬＶ９』『破壊耐性ＬＶ９』『苦痛耐性ＬＶ６』『酸攻撃ＬＶ７』『影魔法ＬＶ１０』『闇魔法ＬＶ４』『魔力操作ＬＶ９』『高速演算ＬＶ３』『並列意思ＬＶ１』『思考加速ＬＶ６』『隠密ＬＶ８』『視覚領域拡張ＬＶ２』『鑑定ＬＶ８』『回避ＬＶ３』『投擲ＬＶ５』『命中ＬＶ３』『予見ＬＶ９』『暗視ＬＶ１０』『視覚強化ＬＶ８』『聴覚強化ＬＶ８』『嗅覚強化ＬＶ７』『味覚強化ＬＶ５』『触覚強化ＬＶ６』『堅牢ＬＶ２』『剛毅ＬＶ２』『天魔ＬＶ２』『天道ＬＶ２』『神性領域拡張ＬＶ３』『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』》
何なのよ!?

全体的にステータス高いくせに、攻撃と魔法が極端に高すぎない!?
名前無いのか蓮見葵なのかはっきりしてよ!?
一生懸命に気づかれないように隠れていると、岩を地面に叩きつける音が何度か聞こえてきた。
ゆっくりと顔を出して下の様子を見てみると、地面に糸で何か文字が書かれてた。
『あなたも転生者?はい、なら降りてきて』
!?
あなたもってことはもしかしてあいつも!?
降りたら殺されるなんてことはない、よね?
ど、どうしよう・・・・・・転生者だし、降りた方がいいのかな?
あれ?なんかさっき振り回してた岩を持ち上げ始めた。
ちょ、ちょっと待って!?今降りるから、待って!?
慌てて降りていくと、岩を下ろしてくれた。
私が降りるとまた何か糸で書きだした。
『転生者同士協力しない?』
おお、ここで一人で生きていくのは大変だし、こんなに強い人?スライム?が仲間になってくれるのはとてもありがたい。
喋れないので全力で頷いておこう。
反応をしなかったら殺されそうだし。
私が頷いたのを見てスライムが近づいてきて手?を差し出してくる。
私も手を出して握手をすると、また糸で何か書き始めた。
『まずは、念話の取得を目指そうか』
まあ、協力するならコミュニケーションは必要だしねぇ。
・・・・・・大丈夫かな、私?

進化と中層

どうやら本当に転生者だったようだ。
それにこの洞窟からの脱出に協力してくれるらしい。
蜘蛛さんの呼び方とかは後で考えよう。
取り合えず、蜘蛛さんも進化出来るようだし、先に進化してもらおうかな。
『先に進化していいよ』
糸で文字を書いて伝えると、分かったと言うように頷いて戻っていった。
蜘蛛さんが進化を始めたのを見て私も進化先の確認をしながら猿の死体を集めて積み上げ山を作る。
《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。
スライム
スモールメタルスライム》
ふむふむ、前に進化した時と同じような選択肢だなぁ。
成長して成体になるか、幼体のまま上位種に進化する。
となると、進化先はスモールメタルスライムで決定かな。
スモールメタルスライムについて鑑定っと。
《スモールメタルスライム：スライム種と呼ばれる粘液状の魔物の希少種の幼体。液体金属の体を持ち、高い防御力を持つ》
おお、防御力は一番低かったから何とかして上げたかったんだよねぇ。
防御力が上がってくれるならモーマンタイ!?
ステータスは全体的に高い方がいいもんねぇ。
後は進化ボーナスでスキルが上がってくれることとスキルポイントを大量に獲得できれば文句なし。
進化のことを考えながら猿の死体を積み上げ終わると、蜘蛛さんの進化が終わったようだ。
進化が終わって近づいて来たので、糸で地面に文字を書く。
『じゃあ、私も進化してくるから、猿食べておいていいよ』

蜘蛛さんが頷いて猿の山に向かうのを見ながら私は壁際に移動して進化を開始する。
進化が開始すると、眠くなり目が覚めると蜘蛛さんがこちらを見て来た。
私も自分の体を確認してみると、体の色が半透明の水色から金属光沢のある灰色に変わっていた。
おお、本当に液体金属に変わったんだ。
ステータスはどんな感じかな。
《スモールメタルスライム　ＬＶ１　名前なし（蓮見葵）
ステータス
ＨＰ：１４５／１４５（緑）
ＭＰ：１／７５１（青）
ＳＰ：１３０／１３０（黄）
：１／１２５（赤）
平均攻撃能力：８１２
平均防御能力：１６０
平均魔法能力：７７０
平均抵抗能力：１４３
平均速度能力：１３５
スキル
『ＨＰ自動回復ＬＶ７』『ＭＰ自動回復ＬＶ７』『ＳＰ回復速度ＬＶ４』『ＳＰ消費緩和ＬＶ４』『集中ＬＶ１０』『猛毒耐性ＬＶ４』『酸大耐性ＬＶ４』『外道無効』『腐食無効』『打撃大耐性ＬＶ１』『斬撃大耐性ＬＶ１』『破壊大耐性ＬＶ１』『苦痛耐性ＬＶ８』『酸攻撃ＬＶ９』『蜘蛛糸ＬＶ７』『外道魔法ＬＶ４』『影魔法ＬＶ１０』『闇魔法ＬＶ６』『魔力精密操作ＬＶ１』『高速演算ＬＶ５』『並列意思ＬＶ２』『思考加速ＬＶ８』『隠密ＬＶ１０』『迷彩ＬＶ１』『視覚領域拡張ＬＶ３』『鑑定ＬＶ９』『回避ＬＶ５』『投擲ＬＶ７』『命中ＬＶ５』『未来視ＬＶ１』『暗視ＬＶ１０』『望遠ＬＶ１』『五感強化ＬＶ１』『知覚領域拡張ＬＶ１』『金属生成ＬＶ１』『堅牢ＬＶ４』『剛毅ＬＶ３』『天魔ＬＶ３』『天道ＬＶ３』『神性領域拡張ＬＶ４』『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』

スキルポイント：２００
称号
『悪食』『暗殺者』『魔物殺し』『無慈悲』『魔物の殺戮者』『悟りの支配者』》
おお、すごい!?
スキルが前に進化した時より一気に上がった。
それに称号まで見れるようになってる。
ん？これは？
『悟りの支配者・取得スキル『剛毅ＬＶ１』『天魔ＬＶ１』『天道ＬＶ１』：取得条件：『悟り』の獲得：効果：進化・レベルアップの回数に比例して各種基礎能力値の上昇値、熟練度ボーナスの増加。支配者階級特権を獲得：説明：悟りを支配せしものに贈られる称号』
え？つまり、進化とレベルアップで上がるステータスとスキルレベルが進化とレベルアップする事に増えるってこと？
なにそれチートじゃん。
これだけチートだと逆になんかえげつないデメリットがありそうで怖いわぁ。
まあ、そんなこと考えても分かんないし、猿食べながら念話が取れるかかくにんしよっと。
猿の山に近づいて私も猿を食べながら念話が取得可能か確認する。
スキルポイント１００で念話が取得可能なのを確認して念話を取得する。
『蜘蛛さん。念話取れた？』
私が念話で話しかけると、蜘蛛さんはビクッとなってこちらを向くと、念話で返してくれた。
『と、取れました』
なんだろう、かなりぎこちない口調で帰って来た。
もしかして、人と話すの苦手なのかな？
ん～、これから協力してくわけだし、慣れてもらうしかないかぁ。
『取り合えず、呼び方決めよっか。前世の名前で呼んだ方がいい？』
『えっと、一度死んだわけだし、私のことは、蜘蛛子って呼んでください』

『そんな敬語とか使わなくていいよ。私のことは好きに呼んでいいよ』
『じゃあ、スラちゃんで』
『うん、これからよろしくね、蜘蛛子ちゃん』
『よ、よろしく、スラちゃん』
ん～、かなりぎこちないし、なんか心の距離を感じるけど、これから仲良くなっていくしかないかぁ。
まあ、今はお腹を満たすことに集中しよう。
進化してステータスが上がるのはいいけど、お腹が減るのは何とかならないものかねぇ。
蜘蛛子ちゃんと一緒に猿を食べてお腹がいっぱいになると、これからどうするか話し合う。
『取り合えず、この洞窟から出たいんだけど、出口分かる？』
『出口は、分からないけど、中層への道は多分あそこ』
蜘蛛子ちゃんが指刺した方に視線を向けると、中層に上る道があった。
中層がどんなところか分からないけど、行ってみるかぁ。
『じゃあ、行こっか』
私がそういうと蜘蛛子ちゃんは頷いてついてきてくれた。
ん～、速度がかなり違うから私の速度に合わせてるんだろうなぁ。
『もしかして、私を抱えた方が移動速い？』
『た、多分』
私の問いにかなり言いづらそうに顔を逸らして返してくる。
これは、抱えて貰った方がいいのかなぁ。
『速い方がいいなら移動中は私のこと抱えてくれていいよ』
『じゃ、じゃあ遠慮なく』
蜘蛛子ちゃんは私が許可を出すと、私を持ち上げて背中に乗せて糸で固定する。
固定が終わると、私を乗せたまま移動し始めた。
私を乗せている分スピードは少し落ちているだろうけど、それでも格段に速くなった。

私も速度のステータス上げないとなぁ。
お、探知に中層の情報が引っかかったな。
ん？これは・・・・・大丈夫かなぁ？
私が中層の地形を心配している間に、中層にたどり着いた。
マグマが一面に広がる灼熱の大地。
うわぁ、こんなか私達進まないといけないの？
あっつ!?
熱でダメージが入るんだけど、なにこれ!?
え？本当にここ進むの？
蜘蛛子ちゃんも熱でダメージ受けてるけど、大丈夫なの？
あれ？私を固定してる蜘蛛糸が燃え始めてる!?
熱い!?熱い!?
『蜘蛛子ちゃん!?一旦戻ろう!?』
『う、うん』
私の言葉を聞いて蜘蛛子ちゃんが急いで来た道を引き返す。
さて、どうしよう。
自動回復があるのにダメージが入るってどうなの？
蜘蛛子ちゃんも大分ダメージ受けてるし、火耐性が無いとだめそうだなぁ。
けど、スキルポイント２００の時に獲得できるスキルの中に火耐性なんて無かったよねぇ。
スキルポイントってあんまり溜まらないのに、２００以上必要ってどうすればいいのよ。
『どうする蜘蛛子ちゃん？』
『修行』
ものすごくシンプルな単語が帰って来た。
『具体的には？』
『中層に行って危なくなったら帰る。を繰り返して熟練度を稼ぐ』
『なるほど』
『ＨＰ回復中に他のスキルのレベルも上げる』
『おお、すごい蜘蛛子ちゃん。じゃあ、中層でＨＰが減らなくなるまで

はここで過ごすってことでＯＫ？』
蜘蛛子ちゃんは私の問いに頷くと、壁を上って天井付近に巣を作り始める。
私も見ているだけだと悪いので、蜘蛛子ちゃんの指示に従いながら蜘蛛糸で作るのを手伝う。
ついでにスキルポイントを使って操糸を獲得しておく。
火耐性取れないんじゃ、取りたいスキル他にないしねぇ。
魔法があれば取るんだけど、無かったから仕方がない。
巣が完成すると蜘蛛子ちゃんと一緒に中層に行ってダメージを受けて来る。
ＨＰ自動回復レベル高いのにダメージ受けるって私火に弱いんだなぁ。

蜘蛛子ちゃんと一緒に修行を始めて私が先に火耐性を取得した。
火耐性を獲得できた私は少しでも移動速度を上げようと全力で走り回って下層にいる雑魚を大量に狩って戻るを繰り返した。
それなりに速度は上がったが、蜘蛛子ちゃんの半分にも満たない。
雑魚を大量に狩って運んだことで攻撃力はかなり上がったし、蜘蛛子ちゃんに教えられた過食を取得することでＳＰに余裕も出来るようになった。
新しく手に入った金属生成も乱用しまくり、レベルアップの合わさってあっという間に幻想金属生成に進化した。
蜘蛛糸も斬糸のスキルを手に入れてレベル上げまでしっかりと行い、蜘蛛子ちゃんと同レベルで糸を使えるようになった。
問題は私の異常な成長速度に蜘蛛子ちゃんが恨めしそうな視線を向けて来ることくらいだ。
ちゃんと守ってあげるからそんな目で見ないで欲しい。
まあ、蜘蛛子ちゃんが自傷行為をしてまでスキルレベルを上げるのはかなり驚いたけど、スキルレベルの上げ方の参考になった。
今度からは私も自傷行為で上げられそうなものは上げて行こう。
そして今日、蜘蛛子ちゃんが巣を引き払って中層に行こうと言い出

した。
理由は分からなかったけど、反対する理由も無かったので蜘蛛子ちゃんに抱えて貰って巣から出ると、巣が爆散した。
何事かと探知を使って探ると、最悪な存在がそこにいた。
地龍カグナ
龍、今の私でもどうにも出来ないやばい奴。
『逃げろー』
私が言う前から走り出してる蜘蛛子ちゃんに全力で叫んだ。
蜘蛛子ちゃんは全力で中層への坂道を上がっていく。
あんなやばい奴がいきなり現れるなんてどういうこと!?
もう下層には引き返せない。
これからは中層で頑張って生きながら上層を目指すしかないんだなぁ。
熱いのやだなぁ。

おいしいものあったんだ

地龍のせいで強制的に始まった中層攻略。
中層の熱で糸が燃えるので現在は自力で歩いて移動している。
蜘蛛子ちゃんには悪いけど、私の速度に合わせて貰ってる。
そんなことを考えていると、探知に引っかかった魔物がマグマから出て来る。
タツノオトシゴがマグマから出てきて、マグマの中から火の玉を吐き出してくる。
未来視が使えて速度を頑張ってあげた私と速度がかなり高い蜘蛛子ちゃんは余裕で回避できる。
タツノオトシゴはあっという間にＭＰを使い果たしてマグマから出てきた。
よし、殺そう。
私がタツノオトシゴを殴り殺そうと近づく前に、蜘蛛子ちゃんが毒攻撃で殺してしまった。
タツノオトシゴの体が熱かったせいでダメージを受けているが、問題はなさそうだ。
というか、私いらなくない？
確かに蜘蛛子ちゃんでも倒せるくらいの雑魚だったけど、少しは私のこと頼ってもいいんだよ。
『スラちゃん、こいつ食べちゃおう』
『そうだね』
何もしてないので分けてもらうのは少し申し訳ないが、少しでもＳＰは少しでもあった方がいいから遠慮なくいただこう。
タツノオトシゴを食べ終わるころに、近くをナマズみたいな魔物が通りすがった。
ナマズのステータスを確認したのか、蜘蛛子ちゃんは私の近くに寄って来た。
おお、やっと頼られた!?
蜘蛛子ちゃんに頼られたことを私が喜んでいると、ナマズが私達を

見つけてマグマから出てきた。
あ、足あるの!?
どうでもいいことを考えていると、ナマズが近づいて来たので蜘蛛子ちゃんを後ろに隠すようにしてナマズに近づいていく。
私がナマズに近づいていくと、蜘蛛子ちゃんの背後から違うナマズが出てきた。
『蜘蛛子ちゃん、後ろからナマズがもう一匹出てきたから気を付けて!?』
『え!?もう一匹!?』
蜘蛛子ちゃんに念話で伝えたので、大丈夫だろう。
蜘蛛子ちゃんの心配をしていると、目の前にいたナマズが私に向かって口を大きく開けて襲い掛かってくる。
幻想金属生成で火に強い金属の円柱を生成し、口を開けて飛び掛かってくるナマズの頭に振り下ろす。
攻撃力が異常に高い私に一撃を受けてナマズはＨＰの大半を一気に削られて動かなくなる。
ＨＰがまだ残っているのでもう一度叩いて完全にＨＰを削り切り、蜘蛛子ちゃんの方に視線を向ける。
蜘蛛子ちゃんも毒でナマズを倒したようでとどめをさすところだった。
『なんだ、倒せるんじゃない』
『スラちゃんみたいに余裕があるわけじゃないけどね』
修行中に少しづつ話しかけ、取って来た食べ物を分けて上げ続けたこともあって大分普通に話してくれるようになった。
最初の頃はかなりぎこちなかったから仲良くなれるか心配だったけど、何とかなりそうだなぁ。
『ナマズ、一匹ずつ食べようか』
『そうだね』
私はナマズの死体に近づいてかぶりつく。
体が液体金属になったからか、攻撃力が上がったから分からないがかみ切れるようになった私はナマズの体の一部を噛み千切る。

酸によって溶かされて口の中に広がるナマズの味に私は感動して涙を流す。
うっまーい!?
なにこれ、最高!?
この世界にもこんな美味しいものあったんだ!?
下層でくそまずい虫を食ってた地獄の日々を思い出すと泣けてくる。
ああ、中層に来て良かったぁ。
美味しい魔物がいるってだけで幸せだよねぇ。
あれだけ大きかったナマズをあっという間に食べ終わった私と蜘蛛子ちゃんは顔を見合わせる。
『蜘蛛子ちゃん』
『スラちゃん』
『『ナマズを狩りに行こう!?』』
蜘蛛子ちゃんと一緒にナマズを探して狩りに行くことが決定した。
ナマズを見つけるのは私の探知でいくらでも出来るので、探知で見つけたナマズを陸地に誘き寄せて狩る。
何匹かナマズを狩って食べていると、ナマズではなく鰻がマグマから出てきた。
探知で気づいてはいたが、こいつも美味しいのだろうか?
ステータス的に蜘蛛子ちゃんだと戦闘が厳しそうだなぁ。
私も攻撃を貰ったらやばそうだけど、逃げ切れる気がしないから倒すしかないか。
未来視のスキルで鰻が放つ火球の軌道を見て回避する。
未来視があるからギリギリ回避できるけど、これは本当にやばいなぁ。
鰻が火球を蜘蛛子ちゃんの方に吐く瞬間を狙って金属の球体を作り出して鰻の顔面に投げつけてやる。
攻撃力は私の方が高いからダメージは問題なく入るが、私に攻撃を集中されると反撃が出来なくなる。
厄介な相手だなぁ。

次に反撃するときに一気にＨＰけずりきるしかないかぁ。
『蜘蛛子ちゃん、鰻の意識を一瞬だけ私から逸らしてくれない』
『任せて、スラちゃん』
私のお願いを聞いてくれた蜘蛛子ちゃんが、鰻の頭に糸を巻き付けて少しの間攻撃を止めてくれる。
その一瞬の隙を狙って私は気力を付与した糸を鰻の頭に絡ませて力任せに振り回す。
鰻を無理矢理マグマから引き上げて地面に叩きつけ、金属の円柱を作り出してタコ殴りにする。
そうすると、すぐに鰻のＨＰがゼロになる。
ふー、無事に倒せたっと。
鰻を倒したと思ったら、起き上がってＨＰが回復し始める。
『生命変遷：ＳＰを消費してＨＰを回復する』
そんなスキルがあったのか、確認しておけば良かった。
私がそんなこと考えながら円柱を振り上げようとすると、鰻に向かって蜘蛛子ちゃんが大量の毒を投げつけ回復したＨＰを削り切る。
『ありがとう、蜘蛛子ちゃん』
『どういたしまして』
鰻を倒したことでレベルが上がり進化が可能になった。
おお、もう進化が可能になったのか。
『蜘蛛子ちゃん、進化出来そう？』
『うん、スラちゃんも？』
『出来るよ。どっちが先に進化する？』
『この鰻の死体を使えば同時に進化出来そうじゃない？』
『？どうやって』
蜘蛛子ちゃんの意見に首？を傾げて問いかけると、蜘蛛子ちゃんが鰻の頭を持って蜷局を巻いた蛇のような形にする。
なるほど、あの中に入れば他の魔物に襲われないってことか。
『蜘蛛子ちゃん、頭いいねぇ』
『ふふーん、生き抜く知恵はスラちゃんより高いのだよ』
『おお、数々の修羅場を乗り越えてきただけはありますなぁ』

『それほどでもあるかなぁ』
蜘蛛子ちゃんを褒めると、胸を張ったようなポーズを取る。
本当に蜘蛛子ちゃんはぶっ飛んだ発想がポンポン出てきて面白いわぁ。

こいつ、私以上のチートなのか？

蜘蛛子ちゃんが作ってくれた鰻のシェルターに入り、私は進化先の確認を始めた。

《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。

メタルスライム

ミスリルスライム》

あら、進化先から幼体がなくなった。

メタルとミスリルだとミスリルの方が上位種なんだろうけど、どう違うのかな？

『ミスリルスライム・進化条件：一定以上のステータスを持つスモールメタルスライム、スキル『幻想金属生成』・説明・強い魔力を纏った液体金属の体を持ち、状態異常に高い耐性を持つ』

ふむふむ、状態異常に高い耐性は助かるなぁ。

私、毒には耐性あるけど、他には耐性なかったからなぁ。

よし、ミスリルスライムに進化で!?

相変わらず、突然眠くなるなぁ。

進化中に眠くなるのはどうにかならないかなぁ。

まあ、今はステータスの確認っと。

《ミスリルスライム　ＬＶ１　名前なし（蓮見葵）

ステータス

ＨＰ：３８９／３８９（緑）

ＭＰ：３０／２１５０（青）

ＳＰ：２４０／２４０（黄）

：１９５／２３５（赤）

平均攻撃能力：２８９０

平均防御能力：１０２０

平均魔法能力：２５２０

平均抵抗能力：７２０

平均速度能力：５６０

スキル
『ＨＰ高速回復ＬＶ５』・・・・・・『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』
スキルポイント：５００
称号
『悪食』『暗殺者』『魔物殺し』『無慈悲』『魔物の殺戮者』『悟りの支配者』》
うわぁ、ステータスの成長率やべぇ。
これ次に進化する頃には龍と戦えるレベルまで上がるんじゃない？
ん～、やっぱり、ＨＰと速度が問題だなぁ。
速度が龍と並ぶ頃には攻撃力万超えてそうだわぁ。
まあ、取り合えずは鰻食べますかねぇ。
進化して鎌みたいになった前足で鰻の鱗をはがす蜘蛛子ちゃんに視線を向ける。
鎌で器用に鱗を？がしている蜘蛛子ちゃんを見て自分の手？に視線を向ける。
進化前より一回り大きくなった体は金属光沢のある灰色に薄っすらと青色系統の色のグラデーションが入っている。
何か変化は地味だなぁ。
人の動きや形にとらわれないでもっとスライムならではの動きを身に着けた方がいいのかなぁ。
こう、蜘蛛子ちゃんの前足みたいに鎌みたいに変形させて固定する感じで。
手？の片方を鎌のように変形させて固めることで鎌を作る。
おお、出来た出来た。
まあ、斬れるか分からんけどなぁ。
取り合えず、もう片方も鎌にして鱗はぐの手伝おう。
蜘蛛子ちゃんの真似をして両手を鎌にし、鰻の鱗をはいでいく。
はぎ終わると、蜘蛛子ちゃんと半分に分けて鰻の肉を鎌で斬り口に入れる。
おお、うまい!?

この鰻もうまいぞ!?
あまりの美味しさに我を忘れて食べ続けると、あっという間に鰻がなくなってしまった。
よし、今度見つけたら絶対に狩ろう。
進化してステータスがかなり上がったから、次からは余裕で狩れる。
いやぁ、熱いのを除けば美味しい魔物がそこそこいて最高だわぁ、中層。
さあて、スキルポイントも溜まったしスキルの確認しようっと。
スキルポイント１００で取得できるスキルに魔闘法というものがあったので取得した。
それ以外では欲しいものがすぐには見つからなかったので、これから先で必要になった時取得できるように残しておこう。
『蜘蛛子ちゃん、スキル取った？』
『取ったよー』
『何取ったの？』
『忍耐ってスキル』
『忍耐？鑑定してみていい？』
『いいよ』
蜘蛛子ちゃんの許可が出たので蜘蛛子ちゃんが新しく取った忍耐というスキルを確認する。
『忍耐（５００）：神へと至らんとするｎ％の力。自身の持つ神性領域を拡張する。ＭＰの続く限りどんなダメージを受けてもＨＰ１で生き残る。また、Ｗのシステムを凌駕し、ＭＡ領域への干渉権を得る』
『忍耐の支配者：取得スキル『外道無効』『断罪』：取得条件：『忍耐』の獲得：効果：防御、抵抗の各能力上昇。邪眼系スキル解禁。耐性系スキルの熟練度に＋補正。支配者階級特権を獲得：説明：忍耐を支配せしものに贈られる称号』
え？外道無効・・・・・・
私があれだけ苦労して手に入れた外道無効がおまけ？
何それ、ずるくない!?

しかも支配者スキルって私が取得できないスキルじゃん!?
酷すぎるよ!?
私の苦労は何だったの!?
『ど、どうしたの？スラちゃん』
『外道無効がおまけでついて来るなんて反則だ!?チートだ!?』
『そんなこと言われても・・・・・・』
『そんなチートスキルを複数個取れるなんておかしいよ!?』
『いや、スラちゃんの悟りもかなりぶっ壊れたチートだからね』
『それは、そうだけど、外道無効がおまけ扱いは酷すぎるよ!?私は何日も苦痛に耐えてやっと手に入れたのに!?』
『それに対しては何も言えないかなぁ』
蜘蛛子ちゃんは顔を私から逸らして返してくる。
確かに、蜘蛛子ちゃんが悪いわけではない。
それは分かっている。
分かっているが、何とも言えないモヤモヤが消えないので魔闘法で強化したうえで地面を全力で殴り付ける。
地面を全力で殴ったことでクレーターが出来てマグマが流れ込んで来たので慌てて逃げる。
取り合えず、全力で地面を殴ったおかげでスッキリしたので良しとしよう。
なぜか、蜘蛛子ちゃんが震えながら岩陰に隠れてしまった。
『色々吹っ切れたから行こうか』
蜘蛛子ちゃんに話しかけると、物凄い高速で頷いて震えながら近づいて来た。
『そんなに怯えなくても殴ったりしないよ』
『ほ、本当に？』
『別に蜘蛛子ちゃんが悪いわけじゃないからね』
『そ、そうだよね』
『そうそう』
未だに念話の声が空元気な気がするが、まあいいか。
『それで探知は使ってみた？』

『うん、レベル上げのために今も使ってる』
『まあ、探知は便利だからね』
『後は、スキルポイントを貯めて邪眼系のスキル獲得かなぁ』
『厨二が喜びそうなスキルだねぇ』
『本当にねぇ、早く獲得したなぁ』
『おお、厨二病患者でしたか』
『そんなこと言ってスラちゃん、羨ましいんでしょう』
『本当に、羨ましいなぁ』
『私が獲得したら間近で見せてあげるよ』
『くぅ、軽くしばくくらいなら死なないよねぇ』
私が手？上げて蜘蛛ちゃんを見ると、すごいスピードで私から距離を取った。
『冗談だから、お願いだからしばかないで!?本当に死んじゃうから!?』
『大丈夫だよ。忍耐があるじゃない』
『ＨＰ全損確定なの!?ごめんって謝るから!?』
『全く、あんまりからかうと本当に小突くからね』
『小突かれただけでも死にそうだから勘弁してぇ』
なんだかんだ蜘蛛子ちゃんと楽しく談笑して見つけた魔物を狩りながら中層を進み続けた。
しばらく二人で魔物を狩っていると、蜘蛛子ちゃんのスキルポイントが溜まり邪眼のスキルを獲得できるようになったようだ。
『何取るの？』
『やっぱり、最初は呪いの邪眼でしょ』
『呪いねぇ、そんな状態異常もあるんだねぇ』
『じゃあ、早速取得っと』
どうやら無事に呪いの邪眼を取得できたようだ。
この近くに敵っていたかなぁ。
あ、ちょうど蛙が近くにいるね。
『あそこに蛙がいるから使ってみたら』
『ナイス、スラちゃん。早速、邪眼のお披露目だよ!?』
いつも以上にテンションの高い蜘蛛子ちゃんが蛙に向かって呪い

の邪眼を発動させる。
　鑑定で蛙のステータスを見ていると、ＨＰ、ＭＰ、ＳＰがゆっくりと減っていく。
『おお、聞いてるねぇ。効果は微妙だけど』
『まだレベル1だからねぇ』
『まあ、地道にレベルを上げて行こう』
『おう!?』
　また蜘蛛子ちゃんと一緒に中層の魔物を狩りながらレベル上げをしていると、蜘蛛子ちゃんの様子が変わった。
　スキルのレベルが上がって何かに進化したのか分からないが、いつもと何か様子が違う。
『どうかしたの蜘蛛子ちゃん?』
『えっと、何ていうか。上位管理者Ｄが私の愚痴を聞いて鑑定と探知を統合して叡智ってスキルを作ったみたい』
『?ちょっと鑑定してみてもいい?』
『ああ、うん。いいよ』
　蜘蛛子ちゃんの様子が少しおかしいが取り合えず、鑑定してみよう。
『叡智：神へと至らんとするｎ%の力。自身の知覚範囲内に存在するものすべての閲覧レベル1までの情報を取得可能にする。また、Ｗのシステムを凌駕し、ＭＡ領域への干渉権を得る』
『叡智の支配者：取得スキル『魔導の極み』『星魔』：取得条件：『叡智』の獲得：効果：ＭＰ、魔法、抵抗の各能力上昇。魔法系スキルの熟練度に＋補正。支配者階級特権を獲得：説明：叡智を支配せしものに贈られる称号』
『魔導の極み：システム内における魔力制御補助、及び術式展開各種能力値が最大となる。また、ＭＰの回復速度が最速となり、消費が最低となる』
『星魔：ＭＰ、魔法、抵抗の各種ステータスに１０００のプラス補正が掛かる。また、レベルアップ時に１００の成長補正が掛かる』
　これはまたえげつないスキルを貰ったなぁ。

星魔は私の天道のレベル１０と同じだろうけど、魔導の極みがかなりえげつない。
叡智の効果がどんなものか分からないけど、おまけでついて来た魔導の極みだけで十分にやばい。
おそらく魔法面に関して私は蜘蛛子ちゃんに勝てないだろう。
しかし、蜘蛛子ちゃん・・・・・支配者スキル複数持ちな上にこんなスキル獲得するって。
蜘蛛子ちゃん、確実に私よりチートだよねぇ。

誰だ!?こいつに任せたのは!?

叡智を獲得してから蜘蛛子ちゃんが異常に強くなり始めた。
最初は苦戦していた鰻も今では簡単に狩れていることを考えると、本当に強くなったのが分かる。
中層で出会った火竜も二人で協力すれば余裕で倒せたし、中層なら負けることはなさそうだ。
しかし、私達はあれに出くわした。
上層から下層まで繋がっているだろう縦穴をそいつは移動していた。
蜘蛛子ちゃんとは比べ物にならない大きさの巨大な蜘蛛の魔物。
下層で過ごして日々を入れても目の前の巨大な蜘蛛以上に強い魔物は見たことがない。
鑑定するまでもなく下層の地龍よりはるかに強いだろう化け物。
私も蜘蛛子ちゃんも巨大な蜘蛛が去るの何もせずに見ていた。
しかし、そんな化け物に喧嘩を売った奴らがいた。
中層に住む火龍と火龍が率いる無数の魔物が巨大な蜘蛛に挑んでいく。
しかし、巨大な蜘蛛の一撃で火龍が率いる魔物の軍勢は消し飛び、私と蜘蛛子ちゃんも衝撃波で吹き飛ばされる。
私と蜘蛛子ちゃんが戻ると、巨大なクレーターにマグマが流れ込んでいた。
そして新たに出来たマグマの海から先ほど巨大な蜘蛛に挑んでいった火龍が姿を現した。
先ほどの一撃でかなりのダメージを受けているようだが、動くことは出来るようだ。
そして怒り狂った火龍の矛先は私達に向けられていた。
私達関係ないと思うんだけどなぁ。
自分から勝負仕掛けて負けて雑魚に八つ当たりってどうなの?
取り合えず、やるしかないかぁ。
『蜘蛛子ちゃん、スピード的に私かなり危ないんだけど、私を抱えて戦

える？』
『出来なくはないけど、糸が燃えちゃうから固定が出来ないよ？』
『固定は私に考えがあるから大丈夫』
『分かった。じゃあ、乗って』
私は蜘蛛子ちゃんの体に乗ると、動きを阻害しないように気を付けて体の一部を伸ばして蜘蛛子ちゃんにしがみつく。
あんまり強い力でしがみつくと、蜘蛛子ちゃんにダメージが入るから力加減を並列意思に任せて魔闘法と竜力を発動させる。
蜘蛛子ちゃんは邪眼、魔闘法、気闘法と竜力を発動させる。
強力な魔法阻害効果があるせいで魔法の効き目が悪いなら、違うことに使うまで。
『蜘蛛子ちゃん、回避お願いね!?』
『任せて、スラちゃん!?』
回避を蜘蛛子ちゃんに任せ、私は幻想金属生成で強度と火炎耐性を最大まで上げて槍のような形をした金属を作り出す。
作り出した槍を火龍と互角の攻撃力に魔闘法と竜力で上乗せされた力で投げつける。
未来視のスキルで動きを読み、命中と確率大補正のスキルで命中率はかなり高いが、防御力も高いため削り切れない。
蜘蛛子ちゃんは火龍の攻撃を何とか避けてくれている。
しかし、火龍の貫通耐性が低いからそれなりのダメージが入っているが、レベルが上がったら私の攻撃も効かなくなるだろう。
レベルが上がる前に削り切らないといけないけど、そう簡単に削らせてくれるほど優しい相手ではないよねぇ。
『げぇ!?蜘蛛子ちゃん、ブレスが来る!?』
『え!?』
未来視で見えたことを蜘蛛子ちゃんに伝えると、火龍がブレスを撃つ体制に入った。
範囲的に避け切れるかどうか、分からない。
避けれるか心配している私と違って蜘蛛子ちゃんは膨大な量の毒液の球体を作り始めた。

なるほど、防ぐわけね。
蜘蛛子ちゃんが作り出した毒液の球体と火龍の間に私は強度と火炎耐性を最大まで上げた金属の壁を作り出す。
金属の壁はブレスにより吹き飛び、蜘蛛子ちゃんの毒液も蒸発させる。
しかし、何とか私達はブレスを防ぎ切った。
その代わりに足場が無くなったので蜘蛛子ちゃんの糸で天井に移動する。
移動の途中でも火龍は火球で攻撃してくるので、金属の槍を投げ返してやる。
生成してから手?で投げているので圧倒的に手数で負けるのはどうしようもない。
『スラちゃん、火龍の攻撃を少しの間止められる?』
『ん?止めるだけでいいなら出来るよ』
『じゃあ、お願い。強力な魔法ぶっ放すから』
『了解!?』
蜘蛛子ちゃんに了解の返事を出すと、蜘蛛子ちゃんは地面に降りる。
それに合わせて私も蜘蛛子ちゃんから飛び降りて幻想金属生成を全力で行う。
作り出すのは私の体の何倍もある巨大な球体状の金属。
それもわざと強度と火耐性を落として粘度を増した球体を火龍に投げつける。
球体は火龍に叩きつけられると、火龍の纏っている火炎の熱によって球体はドロドロに溶けて火龍の体に纏わりつく。
それも粘度がかなり高いせいでなかなか取れず、火龍の動きを大幅に鈍らせる。
火球やブレスを吐かせないために頭にも投げつけて口を無理矢理塞ぐ。
『ＯＫ!?これで少しの間は安全だよ』
『うわぁ、えげつねぇ』

『そんなことより、魔法は?』
『そんなことって・・・・・・もう撃てるからスラちゃんは巻き込まれないように下がってて』
『分かった』
蜘蛛子ちゃんに言われた通りに巻き込まれないように全速力でその場を離れる。
私が離れたのを確認して蜘蛛子ちゃんが魔法を放った。
深淵魔法　地獄門
闇の最上位魔法で魂ごと破壊出来る魔法
あれに巻き込まれたら即アウトだろうなぁ。
移動を補う方法考えとかないと、これから先生きてけないかも・・・・・・
地獄門の効力が消えたのを確認して私が近づくと、瀕死の火龍が私達に体当たりしてくる。
しかし、残念ながら私がいる以上それは成功しない。
今まで一番大きく細長い槍を真っ直ぐ突っ込んでくる火龍の頭に突き立てる。
真っ直ぐに突っ込んでくるだけの火龍なんて的と変わらないね。
私が投げた槍が火龍の体力を削り切ると、蜘蛛子ちゃんが拍手してくれた。
蜘蛛子ちゃんの拍手を聞いていると、レベルアップを告げる天の声（仮）が聞こえて来た。
進化まで後1レベルのところでレベルアップが止まってしまった。
そして蜘蛛子ちゃんの地獄魔法の影響で地盤が沈みマグマが押し寄せて来る。
取り合えず、私は火龍の死体を持ち上げて安全な場所まで避難する。
『さて、鱗をはいで食べますか』
『おう!?』
私と蜘蛛子ちゃんで火龍の鱗をはいでいくが、ステータスの差か蜘蛛子ちゃんは鱗をはぐのに苦戦しているようだ。

攻撃力が高いと便利だねぇ。
ん？空間の歪み？
何かが来る？
私が空間の歪みに視線を向けると、空間が裂けて長身の男が出てきた。
黒い鎧に黒い髪、浅黒い肌と黒で統一された男。
唯一その鋭い眼光だけは異様に赤い。
そして力の次元が違う。
生物としての格が違う。
敵意は感じないけど、絶対に敵に回してはいけない相手だ。
「■■■■■■■■■■■■■■■」
？
どうしよう、何を言ってるのか全然分からない。
隣で蜘蛛子ちゃんが身振り手振りで分からないことを伝えようとしている。
しかし、全く伝わっていないようだ。
挙句の果てに三人揃って首を傾げる始末だ。
さて、どうしたものか？
私達が困っていると、カラっと音を立ててスマホが地面に落ちて来た。
ん？スマホ!?なんで!?
『■■■■■■■■■もしもし、管理者Dです』
管理者D!?
Dって確か蜘蛛子ちゃんに叡智をあげた上位管理者だよねぇ。
つまり、こいつもDと関わりがあるってことか。
だとしたら、わざわざこんな場所に出て来る辺りDより下の管理者ってところかな？
私が考えている間に話は終わったようで、黒い男はスマホを置いて帰っていった。
『お待たせしました。蜘蛛さん、スライムさん』
こっちも考え事をしてたから待ってはないんだけどね。

『彼には話しておきましたので、今後あなた達に自ら関わることはないでしょう』
　もっと早く話して置けばそもそも遭遇することも無かったんじゃあ。
『そうですね。私も彼に話すのを完全に忘れていました』
　それでいいのか、管理者。
『いいんですよ。私はその世界から見れば部外者ですから』
　というか普通に心読まないでよ。
『普段はあなた達の心までは読みません』
『普段、それって私達の行動を監視してるってこと？』
『監視という言葉は好ましくありません。観戦の方がしっくりきますね』
『何が目的で私達を監視してるわけ？』
『ただの娯楽ですよ。それ以上の意味や目的何てありません。なにせ、私は世界最悪の邪神ですから』
　おい、誰よ!?
　世界最悪の邪神に世界の管理任せた奴!?
　任せる相手他にいなかったの!?
『本物ですよ。邪神だからこそ人のもがき苦しむ様を見るのが楽しみなのです』
『じゃあ、この世界はあんたの娯楽のために作られたの？』
『それは違いますねぇ。先ほども言いましたが、私はその世界から見れば部外者です』
『どういう意味』
『ここから先は教えられません。教えてしまったらつまらなくなりますから』
『つまらないってそんな理由で!?』
『これからもせいぜいあがいて私を楽しませてください。その先にあなた達の求める答えがあるかもしれませんよ』
　求める答え、ねぇ。
『何好き勝手なこと言って』

『では、またぁ』
スマホが蜘蛛子ちゃんの言葉を遮るように消えてしまった。
そのせいで蜘蛛子ちゃんが何とも言えない顔をしている。
『取り合えず、蜘蛛子ちゃん。火龍食べよっか』
『そうだね』
難しいことを悩んでいた蜘蛛子ちゃんと一緒に火龍を食べる。
世界を滅ぼそうとしてないなら私にはどうでもいいことだしねぇ。
それより、火龍美味いわぁ。
これだけ美味しいものを食べ続けると、調味料が欲しくなるなぁ。

上層と進化と禁忌

管理者Dと話した後から蜘蛛子ちゃんの様子がおかしい。
何か悩んでいるようだが、何をそんなに悩んでいるのだろうか？
まあ、しばらく様子を見て悩み続けてるようなら聞いてみよう。
そんなことよりも私は蜘蛛子ちゃんの違うことが気になっている。
火龍を倒した後から蜘蛛子ちゃんは新しくとった重の邪眼を自分にかけ続けているようだ。
今までゲーム感覚だったから気づかなかったけど、この世界ゲームじゃないから自分に攻撃出来るんじゃん。
まあ、それを思いついたからと言って重の邪眼を自分にかけて熟練度と物理ステータス上げようとするってどうなの？
しかし、とても参考になったので私も重魔法を取得して真似することにしました!?
いやぁ、魔法で勝てない上に物理ステータスまで追いつかれたら存在価値がなくなって泣きそうだもの。
そしてもう一つ蜘蛛子ちゃんの新しいスキル空間機動が羨ましかったので私は早くレベルを上げて進化したい。
空中に見えない足場を作れるなんて羨ましい。
立体機動は一応持っているのでレベルアップボーナスでさっさとカンストさせたい。
火竜がもう一、二匹出て来てくれればレベルアップ出来そうなのになぁ。
空間魔法と治療魔法も取得した。
やっぱり、空間転移があれば移動に便利だもんねぇ。
最近、魔物が私達から逃げるようになっちゃったから、足の遅い私は食べ物の確保が本当に大変だ。
そして治療魔法はダメージを負った時に回復する手段が自動回復しかないと死にかねないので取ることにした。
何より、魔法を自分に打ち込んで耐性と熟練度をあげている蜘蛛子ちゃんのやり方を真似するとあった方がいいに決まっている。

まあ、基本的に魔法のスキルレベル上げは並列意思に任せているので私がやることはないのだけどね。
最後に蜘蛛子ちゃんがゾア・エレになってから使えるようになった腐食攻撃を獲得した。
重魔法に空間魔法、腐食攻撃、この三つで私が貯めたスキルポイントが結構減ったが取りたいものが他にないので良しとしよう。
最近取得したスキルのことなどを考えている間に蜘蛛子ちゃんが吹っ切れたようでいつも通りに戻っている。
物事深く考えるだけ無駄なのだから気楽に考えて生きて行こう。
ほら、気楽に考えてたら上層への道が見えて来たよ。
『蜘蛛子ちゃん、上層への道が見えて来たよ』
『おお、上層よ。私は帰って来た』
『わーい、私上層初めてだぁ』

私と蜘蛛子ちゃんは上層に着くと中層に近い場所に巣を作った。
どうやら蜘蛛子ちゃんはここでゆっくりと火耐性のレベル上げを行いながら他のスキルも上げていくつもりのようだ。
私はすでに火炎耐性に進化してレベルもそこそこ上がったので問題ないが、蜘蛛子ちゃんの方はかなり苦戦している様子だ。
まあ、適性が無い属性だと耐性もつきにくいようだ。
仕方がないので、蜘蛛子ちゃんが中層で火耐性を上げている間に私は空間魔法のレベル上げを行いながら中層と上層で魔物を狩り続けていた。
理由は進化に向けて大量の食糧を確保しておきたいからだ。
飽食があるからＳＰのストックもありはするが、それでも食べれるものは多い方がいい。
しかし、上層は弱い魔物が大半だなぁ。
地竜が居たので最近鍛え始めたスキルなども駆使して戦ったらボコボコにしてしまった。
龍と竜じゃ強さが結構違うんだなぁ。
それから地竜の死体を糸で囲って蜘蛛子ちゃんを呼んで帰ってく

ると、人がたくさんいた。
話そうかとも思ったが、そもそもこの世界の言葉が分からないのでどうしようかと悩んでいると逃げて行った。
騎士団のようだったけど、何しにこんな場所に来たのだろうか？
襲ってくるなら皆殺しにして食べたけど、即逃げ出すようだし放置でいいかな。
そんなことより、地竜を食べよう。
あんまり美味しくないなぁ。
色々考えた結果、私は蜘蛛子ちゃんに長距離転移で下層に行ってくることを伝えて下層に戻って来た。
理由はレベルアップのための経験値と食料の確保だ。
地龍に気を付けていれば下層で私に勝てる魔物は私が知る限りではいない。
上層では強い蛇もここでは雑魚だ。
そして蛇クラスの魔物が大量にいるのだから簡単にレベルアップ出来た。
大量に狩った魔物を空納にしまって上層に戻る。
蜘蛛子ちゃんもレベルアップ出来たようで進化可能になっていた。
『蜘蛛子ちゃん、それどうしたの？』
『蛇に襲われてた人達を助けた時に落ちてたのを拾って来たの』
『人助けなんてしてたんだ』
コミュ障だから人に関わるの嫌がってたのに意外だなぁ。
何かあったのかな？
まあ、蜘蛛子ちゃんなりの理由があるんだろう。
『スラちゃんも一緒に食べよ』
『え？いいの？数そんなにないけど？』
『いいのいいの。進化のお祝いってことで二人で一緒に食べよ』
『蜘蛛子ちゃんがいいなら、ありがたく貰おうかな。けど、その前に進化しよっか』
『そうだね。どっちが先に進化する？』
『私達に近づいて来る魔物なんていないから同時で良くない？』

『ん～、それもそっか』
『よし、進化しますかぁ』
『おーう!?』
　同時に進化することを決めて私達は進化先の確認を始めた。
《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。
　スピリチュアル・スライム
　キングスライム》
　キングってそろそろ最終進化が近いのかなぁ。
『キングスライム：進化条件：一定以上のステータスを持つ粘液状の魔物：説明：高いステータスを持ち、粘液状の魔物を束ねる魔物の王』
　おい、私以外にスライム系モンスター見たことないぞ!?
　そもそも私は自分がどう生まれたのかすら分かってないんだぞ。
　スライムって分裂で増えるの？産卵するの？
　というか、私の親どこにいるんだろう？
　ん～、まあ、考えても仕方がないか。
　もう一つの方の確認っと。
『スピリチュアル・スライム：進化条件：一定以上のステータスを持つ粘液状の魔物、魔法系スキル所持：説明：高密度の魔力を纏った粘液状の体を持ち、物理と全属性に高い耐性を持つ』
　おお、つまり弱点属性がなくなるってことかな？
　物理にも耐性がついてくれるし、こっちで決まりだね。
　スピリチュアル・スライムに進化で!?
　おはようございます!?
　さあ、蜘蛛子ちゃんがまだ起きてないから先にステータスの確認をしよう!?
《スピリチュアル・スライム　ＬＶ１　名前なし（蓮見葵）
　ステータス
　ＨＰ：２５６０／２５６０（緑）
　ＭＰ：６５０／８６５０（青）
　ＳＰ：１２４０／１２４０（黄）
　：１０３０／１２４０（赤）

平均攻撃能力：８７５０
平均防御能力：３１００
平均魔法能力：８３２０
平均抵抗能力：５６４０
平均速度能力：１０５０
スキル
『ＨＰ超速回復ＬＶ５』・・・・・『天命ＬＶ４』『天動ＬＶ２』『富天ＬＶ２』『城塞ＬＶ３』『剛毅ＬＶ１０』『天魔ＬＶ１０』『天道ＬＶ１０』『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』
スキルポイント：２０００
称号
『悪食』『暗殺者』『糸使い』『魔物殺し』『無慈悲』『魔物の殺戮者』『悟りの支配者』『竜殺し』『恐怖を齎す者』『龍殺し』『魔物の天災』》
速度以外なら下層の地龍にも負けないね!?
問題は速度だよなぁ。
基本的に未来視を使って最小限の回避をするか、蜘蛛子ちゃんの背中に乗せてもらうか以外で鍛えてないのが悪いのかな。
これはしばらく下層で走り込みしながら魔物を狩るかぁ。
スキルの方はどうかなぁ。
お!?幻想金属生成が進化して神金生成になってる。
立体機動も空間機動に進化してる。
これで二段ジャンプが出来るぞ!?
さて、他に目立ったスキルはなさそうだね。
では、進化で体がどう変化したか確認しよう!?
体に視線を向けると、ミスリルスライムだった時のような金属みたいな体ではなくなっていた。
最初のスライムだったころのように半透明の水色で青や紫などの青系統の色で薄っすらとグラデーションがかかっている以外は最初のころと変わらないな。
ああ、体は少し大きくなってるか。
まあ、それでも蜘蛛子ちゃんより小さいんだけねぇ。

おや？蜘蛛子ちゃんが目を覚ましたようだ。
ん？やけに暗い顔をしてるがどうしたのだろうか？
『蜘蛛子ちゃん、大丈夫？顔色すごく悪いけど』
『スラちゃん・・・・・・えっとね・・・・・・』
『ん？どうしたの？』
蜘蛛子ちゃんは少し言いづらそうにしていたが、しっかりと説明してくれた。
禁忌というスキルがカンストしたこと、禁忌の内容を聞いて私は納得してしまった。
どうしてあの世界最悪の邪神と自称するようなやばい神にこの世界の管理をかませたのか。
あの邪神以外にこの世界を救える奴がいなかったのだろう。
それほど酷い状態だったということか。
『その話を聞いて目指すものが決まったね』
『目指すもの？』
『システムに囚われてる限り滅びは避けられないでしょ。なら、システム外の存在まで上り詰めればいいんだよ』
『それって・・・・・』
『星の滅びに怯えて過ごすくらいなら、邪神の手の上で踊ってでも生き延びてやろうじゃない』
私の言葉を蜘蛛子ちゃんは黙って聞いている。
そんな蜘蛛子ちゃんを見て私は口角を吊り上げて笑いながら続ける。
『この星をどうするとかは神になってからゆっくり考えよっか』

R1　悪夢と怪物

　エルロー大迷宮の上層、発行する鉱物の僅かな光源しかない洞窟をランタンや松明を持った集団が進んでいた。
「ブイリムス、ちょっと休まんかぁ」
「さっき休憩したばかりではありませんか」
　迷宮の異変に対処するために帝国から派遣された儂らを率いるブイリムスに提案するが、却下される。
「もう1時間前じゃ」
「たった1時間前です」
「あいたたたぁ。昨日痛めた右足がぁ」
　儂の言葉にブイリムスは呆れた顔でため息をついて返してくる。
「昨日は左足を痛めたと言っておられましたが？」
「え!?」
「行きますよ」
　前を向いて進み始めたブイリムスに説得を続ける。
「そんな急がなくてもいいだろうに、やっぱあれか？早く帰って生まれたばかりの我が子の顔がみたいんか？」
「そういうわけでは」
「あ、それにあれか、かみさんにも会いたいか？」
「ロナント様!?」
　儂の言葉に周りの兵士や案内人は声を潜めて笑っている。
　兵士達の前で身内の話をされたからか、我慢が出来ずに怒鳴ってくる。
「そう怒るでないわい」
「もう少し緊張感をお持ちください！我々に命じられたのはただの探索ではありません！」
　ブイリムスは鋭い目つきで語気を強めて続ける。
「最近、このエルロー大迷宮内の多くの魔物がその生息域を離れ、出入り口に押し寄せてきているため大陸の危険度が増している。原因はおそらく、いくつかの冒険者のパーティの報告にある蜘蛛の魔物と謎

の不定形の怪物。その危険度はＡもしくは最悪のＳランク」
事前にブイリムスから聞いた説明を思い返す。
一目見ただけで全滅を覚悟しなければならないほどの脅威を感じたという幼体と大して変わらぬ大きさの蜘蛛の魔物と液状の金属のような体をした不定形の怪物。
二匹は敵対するでもなく一緒に行動するところを目撃されているが、常に一緒というわけではないようで別行動する時も多いようだ。
不定形の怪物は目撃情報が少なく、その異様な見た目以外の情報がない。
それに対して蜘蛛の魔物は奇妙な噂が流れていた。
エルロー大迷宮には人を助ける蜘蛛の魔物がいる。
もし、その噂が本当ならその蜘蛛の魔物は相当に賢いと言えよう。
不定形の怪物との関係は分からんが、儂ならどんな魔物が相手でも問題ないじゃろう。
「わかっとる、わかっとる。それを討伐しろと言うんじゃろ。儂がいれば安泰よ。大船に乗ったつもりで構えておれ」
「ロナント様」
「だから、ちょっとは休まんか？」
「だめです」
また、即答で却下されブイリムスは案内人と先に進んでいく。
「ケチじゃのう」

しばらく、歩いて目撃情報があったという場所にたどり着いた。
「その目撃情報があったのはここで間違いないのか？」
「そのはずです」
目撃情報があったという場所には何も見当たらなかった。
「巣を他に移したようですね」
「この近くに中層へと続く道があります。そちらに移動したのでは？」
「中層？だが、蜘蛛の魔物なら火には弱いはず、その線は薄いのでは？」

案内人の言葉にブイリムスが返していると、兵士の一人が悲鳴を上げて不自然な格好で固まる。
「どうした？」
「わ、わかりません。進もうとしたら、か、体が!?」
「何!?」
「待て！」
ブイリムスが兵士の様子を見るために近づこうとするのを肩を掴んで止める。
「光を当ててよーく見よ」
儂の言葉に従い、兵士の方に光を当ててよく見る。
非常に見えにくいが、糸が張り巡らされており、兵士はそれに引っかかっていた。
「糸？」
「当たりを引いたのかもしれんの」
ブイリムスが剣を持って蜘蛛の糸を斬ろうとするが、剣は蜘蛛の糸に絡まるだけで斬ることが出来なかった。
「斬れぬか。よし、焼き斬るぞ」
「え!?」
「ちと熱いが動くなよ」
「あ、は、はい」
「ちょっと、ま!?」
ブイリムスが何か言おうとするのを無視して蜘蛛の糸を燃やす。
しかし、蜘蛛の糸は燃えなかった。
「ん？なかなか燃えんな。よし、火力を上げるぞ!?」
火の魔法の火力を上げると、火力を上げすぎ通路の奥まで火炎で埋め尽くす。
火炎で糸が焼き斬れると、洞窟の奥から良く通る金属同士をぶつけたような音が鳴り響いた。
その音は洞窟内を反響していく。
「あちゃあ、強くし過ぎたわ」
「もー、勘弁してくださいよ」

「やってしまったの」
「ええ、先ほどの音を家主が聞いたら戻ってくるでしょうね」
「確かにの。しかし、あの金属音はいったい・・・・・・」
「分かりません。巣の中を確認してみないことには何とも」
「そうじゃの」
儂らは戦闘態勢を整えて巣の中の探索を開始する。
探索を開始してすぐに、先ほどの金属音の正体が見つかった。
「これは?本当に魔物か?」
大きい金属の板に小さな金属の板を三枚括り付けたものが、蜘蛛の糸に何個も結び付けられていた。
その金属板は異常に綺麗に加工されており、魔物が加工したものとはとても思えない代物だった。
隣にいたブイリムスが懐から鑑定石を取り出した。
「ほう。鑑定石か」
「ええ、ロナント様も鑑定を?」
「そうじゃ、レベルは8じゃな」
『神珍鉄・魔力伝導性に極めて優れ、強度は極めて高いが高密度の魔力を流すことで形を自在に変えられる金属。生成できる者が少なく入手は困難を極める』
なんじゃ、これは!?
このような金属をこれほど大量に・・・・・・
異常じゃ、これほどの金属を糸に何かが引っかかったことを知らせる鈴代わりに使うなど。
兵士達に金属板を回収するように命令を出して、周囲の警戒を強める。
仮に、これほどの金属で作られた武器や防具で武装した魔物が現れれば兵士達の攻撃は一切通じないじゃろう。
儂の魔法も威力の弱いものは全て効かんと考えた方が良さそうじゃな。
兵士達が集めた金属板を空納にしまった時、家主が転移して帰って来た。

「ブイリムス・・・・・・家主のおかえりじゃ」
　儂の言葉に全員がそいつに視線を向ける。
　全体的に白い印象で背中にはまるで髑髏のような黒い模様がある蜘蛛の魔物。
「ありえぬ・・・・・・なんだ、これは？」
「ロナント様？」
「あの魔物、あの自然体でとんでもない量のスキルを常時多重発動させておる。ありえぬ!?」
　魔物は何か言いたげに鳴きながら逃げ道を塞ぐように地面に降りて来る。
　鑑定。
　ゾア・エレ・・・・・・・
　この凄まじいまでのステータス、膨大な量のスキル。
　な、なんと!?魔導の極み!?
「ロナント様!?しっかりしてください!?」
　素晴らしい・・・・・・なんと、素晴らしい！
　な!?
「鑑定の妨害じゃと!?」
「ロナント様!?」
「ああ、間違いない!?迷宮の異変はこのお方、この力に逃げ出したのだ!?」
　蜘蛛の魔物に近づいた兵士達が次々に倒れていく。
「おお、何が、何やら、儂の及びもつかぬ叡智、力が!?ええい!?放せ!?もっとあの力を間近で!?」
「ロナント様!?」
　ブイリムスに殴られ正気に戻った時にはかなりの数の兵士がやられておった。
「すまん、もう大丈夫じゃ」
「撤退しようにも、通路を塞がれていては!?」
「黙って横を通してくれるはずもなかろうな。であれば、大規模転移で逃れるしかない」

「分かりました。ロナント様をお守しろ!?」
ブイリムスの指示で兵士達が儂の周りを囲む。
ブイリムス達が魔法構築の時間を稼ぐために前に出る。
『■■■■■、■■■■■■■■■■！』
なんじゃ!?念話？
女性のような怒鳴り声のような声で蜘蛛の魔物が誰かに念話で話しかけている!?
『■■■■■？■■■■■■、■■■■■■？』
先ほどとは違うとても綺麗な女性の声の念話が蜘蛛の魔物に返ってくる。
まさか!?一緒に目撃されたという不定形の怪物を呼んでいるのか？
『■■■■■■■■■■！』
『■■■■。■■■■■■』
怒鳴るような女性の声に対して恐ろしく冷静な女性の声が返ってくる。
そしてその念話の直後、背後に異様な気配を纏った何かが現れる。
「ブイリムス、どうやらもう一匹も来たようじゃ」
「くっ!?挟まれたか!?」
大規模転移魔法を構築しながら視線を背後に向ける。
情報とは違い、金属というよりは水に近い見た目の球体状の魔物。
こやつがあのお方と念話で話していた魔物か。
『鑑定が妨害されました』
こやつも鑑定を妨害しおった!?
まずいの、大規模転移魔法の構築が間に合うか・・・・・・
球体状だった魔物はしばらく様子を見た後に、動き始めた。
情報にあった通りに球体状から形を歪め、複数に枝分かれし数本の鞭のようなものを作り出した。
次の瞬間には鞭のようなものを振り回し、兵士を一人ずつ吹き飛ばしていく。
吹き飛ばされた兵士は凄まじい速度で壁に激突し、皆原型をとどめ

ていない。
「くっ!?何という力!?」
ブイリムスが召喚獣を背後に現れた魔物に向かわせるが、鞭の射程に入った瞬間に一撃で吹き飛ばさる。
鞭を振り回している体は動こうとはせず、鞭を振り回して近くにいる兵士達皆殺しにしていく。
ブイリムスの召喚獣が鞭の射程外から魔法を放てば、闇魔法で召喚獣事吹き飛ばしてくる。
あれほどの威力の魔法が使えるのに、なぜ、魔法で攻撃しない？
こやつは何を考えておる？
不定形の怪物は振り回していた鞭を急に止めた。
なんじゃ？こやつは何がしたいんじゃ？
儂の疑問など気にしたことかと、不定形の怪物は全ての鞭を二つに割いて鞭の数を倍にしおった。
それだけでは終わらず、鞭を覆うように金属が生成されていく。
あれは!?あの金属はこやつが作り出した物か!?
金属を生み出した者の正体が分かったのは良かったが、不定形の怪物は神珍鉄で覆われた鞭を兵士達に振り下ろした。
先ほどまでとは違い、兵士達は吹き飛ばさることなくその場に倒れていく。
恐ろしく鋭利な刃物で切断されたように綺麗な断面が出来た兵士達が地面に次々と倒れていく。
あの金属に常時魔力を流し続け、鞭の動きに合わせて形を変えているのか!?
何という魔力量じゃ!?
兵士に金属を纏わせた鞭を振り下ろす不定形の怪物の姿はどこか嬉しそうで、顔など無いはずなのに口角を吊り上げた不気味な笑みが見えた気がした。
やっとの思いで構築し発動させた大規模転移で帰って来たのは、片腕を失った儂と儂を庇って大怪我をしたブイリムスのみ。
唯一の成果は膨大な魔力を流すことでしか形を変えることの出来

ん神珍鉄のみ。
武器や防具に加工できればと鍛冶屋に渡してみたが、誰一人として加工することが出来んかった。
しかし、神珍鉄の加工は魔力鍛錬には丁度いいものじゃった。
思い描いた形に変えれるようになったころには魔力量と魔力操作の技術が格段に上がっとった。
そして神珍鉄で作った杖は全魔法の威力を格段に上げるものになった。
その後、あの方々は迷宮の悪夢、迷宮の怪物と呼ばれ恐れられるようになった。

地龍単独討伐目指して修行!?

進化して蜘蛛子ちゃんの禁忌がカンストした日から私達は別々にレベル上げをしていた。
蜘蛛子ちゃんは下層で遭遇し、恐怖を刻まれた宿敵地龍アラバを倒すため。
そして私は下層で最後にあった地龍カグナを倒すために鍛えることにした。
そのために地龍カグナの居場所の確認に行ったのだが、もう一匹いた。
しかも明らかにスピードタイプの地龍ゲエレ。
地龍が二匹タッグを組んでるってどうなの?
まあ、カグナのステータスを確認した結果から言ってカグナ単体ならどうとでもなる。
確かに龍だけあってかなり高いステータスだったけど、相性が悪すぎる。
防御特化で速度が低いカグナなら、同じく速度が低くて極端に攻撃特化の私なら簡単に倒せるだろう。
だから、問題なのはゲエレだ。
速度差が辛いなぁ。
私防御力が高いわけじゃないから、ゲエレの攻撃でもダメージは十分に入る。
ＨＰは飽食でストックしておけば多少は大丈夫だろうが、一対一でも厳しい相手なのは間違いない。
その上、カグナと同時に相手にしないといけない。
取り合えず、レベル上げと飽食のストックを貯めることを優先しないとなぁ。
『スラちゃん、今すぐに戻ってきて!』
ん?蜘蛛子ちゃん、どうしたんだろう?
『どうしたの?今すぐって、何かあった?』
『人間に巣が燃やされてる!』

『分かった。すぐに戻るね』
巣が燃やされたからあんなに怒ってたのか。
まあ、私も急いで帰らないとね。
私が長距離転移で巣に戻ると、蜘蛛子ちゃんが邪眼を使って兵士達を殺していた。
巣はほぼ全焼していて、燃やしたであろう人間達は蜘蛛子ちゃんを恐れて転移で逃げようとしてるのか。
ステータス的には雑魚だし、ちょっと新しい戦い方の練習台になってもらおうかな。
えっと、体を部分的に伸ばして鞭のような触手を作ってと、こいつを私の力で振り回せば。
高速で振り回した触手が兵士を吹き飛ばし壁に叩きつける。
兵士の鎧は触手が直撃した場所は粉々に砕け散る。
やっぱり、この体を生かした戦い方をすべきだよねぇ。
ん～、私が動き回るよりは速いけど、蜘蛛子ちゃん並みのスピードがあれば避けられそうだなぁ。
触手を高速で振り回しながらでも魔法は撃てるね。
よし、次の奴試してみよ。
まず、触手を半分に割いて数を倍に増やす。
そして神珍鉄で触手を覆って魔力を流して触手の動きに合わせて形を変える。
そして兵士に当たる向きに刃を作り出し、鎧ごと兵士を斬る。
神珍鉄は魔力で形を動かしてても強度は変わらないのがいいよね。
幻想金属で作った金属の中にも魔力を流して形を変えられるものはあったけど、金属が柔らかくなってるだけだったからなぁ。
神珍鉄のように触手がぐにゃぐにゃ動いても刃はしっかり硬いままだからちゃんと斬れる。
触手に合わせた形状の変化も並列意思にやらせればそこまで大変じゃないし、この戦い方はありだね。
問題は、雑魚以外に使えるかだよねぇ。
今度下層の魔物相手に試してみよう。

それにしても、人間は経験値が美味しいなぁ。
いやぁ、非常に優秀な練習台だこと。
そんなことを考えていると、二人に空間転移で逃げられてしまった。
まあ、いいや。
それなりに経験値稼げたし、新しいスキルを獲得できたからね。
『巨大化：自身の体を大きく出来る』
シンプル!?
けど、私の場合は体の形を変えて手を伸ばしたりするのに体積は大きい方がいいからね。
さて、未だに巣を燃やされて荒ぶってる蜘蛛子ちゃんを落ち着かせますか。
『蜘蛛子ちゃん、落ち着きなよ』
『落ち着いてられないよ!?お家全焼させられて落ち着ける訳ないでしょ!?』
『燃やされた仕返しにほぼ全員殺したじゃない。それに経験値が大量に入ったんだし、今回は良しとしようよ』
『そうだけどさぁ』
『ほら、早く巣を作り直そ』
『んー、分かったよぉ』
蜘蛛子ちゃんは納得してないようだが、巣を直すことは賛成のようだ。
私も蜘蛛子ちゃんと一緒に万能糸で巣の修復に取り掛かる。
『そういえば、スラちゃんさっきの何？』
『ん？ああ、スライムとしての体を生かしてみようと思ってね。試してみたの』
『あれ動けるの？』
『並列意思で制御してるから問題なく動けるよ。それに新しいスキルで体を大きく出来るようになったから腕の数もさらに増やせそう』
『うわぁー』
『その反応酷くない』

蜘蛛子ちゃんから呆れたような声が返って来た。
蜘蛛子ちゃんだって邪眼で一方的に殺戮してたのに、私にだけその反応は酷い。
あれ？スキル上げで大量に作った神珍鉄の鈴がない。
もしかして、逃げた二人のどっちかが持って行ったのかなぁ。
まあ、大量に作れるからいっかぁ。
『そうだ。スラちゃん、後で手伝って欲しいことがあるんだけど』
『別にいいけど、何を手伝えばいいの？』
『アラバと縦穴で戦おうと思ってるんだけど、そこに蜂が巣を作ってるから駆除を手伝って欲しいんだよねぇ』
『いいよ。ちょうど私も試したいスキルとかあったし』
『ありがとう』
そして巣を再建し終えた私達は下層の縦穴に来た。
上を見上げれば大量の蜂が飛び回っている。
『結構な数がいるねぇ』
『そうそう。弱いくせに数が多いんだよねぇ』
『そうだねぇ。まあ、ちょうどいいし、早速スキルを試してみましょうか』
『さっき、行ってた巨大化のスキル？』
『それとは違うスキル』
蜘蛛子ちゃんが私の言葉に首を傾げているので、早速試していこう。
空間機動で蜘蛛子ちゃんがいる位置より高い場所に移動する。
そして神龍力を発動し、上にいる蜂の群れに向けてブレスを放つ。
私の口から体と同じように青系統の色のグラデーションが薄っすらと入った黒い奔流が吐き出される。
黒い奔流に触れた蜂達は塵と化して消滅していき、奔流が消えるころには大量に居た蜂は大半が消えてなくなていた。
私は神龍力を解除して蜘蛛子ちゃんの隣に降りる。
『ブレス撃って試してみたかったんだけど、どうやら腐食属性だったみたい』

『ないわー、腐食属性のブレスとかないわー』
『ん、蜘蛛子ちゃんだって破滅の邪眼あるじゃん』
『確かに、あるけどね。けど、私の場合自爆攻撃だからね』
蜘蛛子ちゃんの反応に私が不満そうに返すと、蜘蛛子ちゃんは呆れた様子でいう。
『腐食無効とれば自爆しないのに』
『そうなんだけどねぇ。スラちゃんはどうやって腐食無効取ったの？』
『あれをひたすら食べ続けただけよ』
『あれ？』
千里眼で見つけた壁についている黒い虫を指さして答える。
蜘蛛子ちゃんも私が指さした方に視線を向け、あれの正体に気づいて顔が真っ青になる。
そしてあり得ないものを見るような目で私のことを見て来る。
『もしかして、あれ食べて獲得したの？』
『あいつ以外に腐食属性持ってる奴知らなかったし、耐性は必要でしょ』
『わ、私は遠慮しておこうかなぁ。さあ、残った蜂を殲滅しに行こう』
『あ、ちょっと!?』
まるで逃げるように空間機動を使って上空にいる蜂を倒しに行ってしまった。
腐食無効を獲得できれば破滅の邪眼使いたい放題なのに。
まあ、嫌なら仕方ないかぁ。
私も蜘蛛子ちゃんの後を空間機動を使って追いかける。
途中で巨大化して腕を大量に生やして近づいて来る蜂を次から次へと落とし続ける。
腕が届かない距離の蜂には暗黒槍を撃って撃ち落とす。
蜂が弱いこともありあっさりと巣を駆除することが出来た。
『終わったね。私はもう少しレベル上げするけど、蜘蛛子ちゃんはどうする？』
『私もスキルの確認しながらアラバ戦の作戦立てるかなぁ』

『頑張ってね』
『うん、スラちゃんもね』
『じゃあ、スキルレベル上げて来るね』
『はーい』
蜘蛛子ちゃんの返事を聞いて私は下層の適当な場所に転移する。
下層のそれなりに広い空間に移動した私は先ほどと同様に巨大化する。
先ほどスキルレベルが2になったこともありさっきよりさらに大きくなった。
んー、普段の二から三倍くらいかなぁ。
レベル2でこれなら最大まで上げれば十倍くらいになれそうだかな。
さて、レベル上げと食料の確保を兼ねて殺戮を始めよっか。
探知で近くにいる魔物の位置は把握しているので、伸ばした腕に神珍鉄を纏わせて斬り捨てる。
近づいて来るもの、逃げようとするもの、腕が届く範囲にいる全てを斬り捨てる。
届く範囲に敵がいなくなったのを確認し、腕で死体を掴んでかき集めて空納にしまっていく。
どうしよう？もう少し狩って帰ろうかな？
もう1レベルを上げて戻る？
ん～、よし、レベル上げて帰ろう。
レベル上げを決めて私はまた違う場所に移動して殺戮を行おう。
レベルが上がるころには一人では食べきれない量の食料が空納に入っていた。
まあ、蜘蛛子ちゃんもいっぱい食べるから多い分には困らないよねぇ。
さぁて、食べながら私も作戦を考えるとしますかねぇ。
あれ？作戦を立てて戦うのって今回が初めてかも。

地龍狩り行くよお!?

さて、ようやく私もカグナとゲエレを倒す作戦を考え付いた。
といっても蜘蛛子ちゃんの作戦に比べればとても単純なものだけれどねぇ。
参考になるかと思って聞いてみたが、怠惰とかいうチートスキルが無いと真似できない。
いや、そもそも私のスピードだと逃げ回ることが出来ないか。
『蜘蛛子ちゃん、行ってくるね』
『うん、私も行ってくる』
それだけ言って私はカグナとゲエレの元に転移する。
目の前に急に転移して来た私に二匹は驚いて一瞬固まる。
その一瞬で私は目隠しをするように暗黒弾を広範囲に放つ。
カグナとゲエレが暗黒弾に対処している間に耐性を大量に盛った万能糸で周囲を囲む。
私が糸を張っていると、ゲエレが暗黒弾を回避しながら私に迫ってくる。
待ってました!?
空間転移でカグナとゲエレの背後に回り込み万能糸で巣を張る。
もう一度ゲエレが近づいてくる前に、巣は何とか完成した。
私が一生懸命に作った巣にカグナがブレスを放ったことで、巣に穴が開き糸が垂れる。
それも予想済み。
私の巣はあまり移動しないカグナにとっては特に意味をなさない。
けど、強力な粘着性を持った強度の高いこの糸は体に着いたらまず取れない。
スピード型のゲエレにとっては邪魔でしかない。
けど、ゲエレの動きを制限できるようになっただけで、まだ準備が完了したわけじゃない。
そこからさらに粘着性の高い糸を壁や天井に大量に張り、広い洞窟で動き回れるスペースを奪っていく。

カグナとゲエレのブレスや魔法攻撃を未来視で先読みして躱しながらの作業は大変だったが、無事に終了する。
そして粘着性の糸に属性攻撃を付与した糸を大量に絡ませてようやく私が戦いやすいテリトリーが完成した。
私スライムなのに蜘蛛子ちゃん以上に戦うための巣を作るの上手い気がする。
そんなくだらないことを考えているとカグナの広範囲ブレスが来るのが見えたので転移で移動する。
即席の巣だが場所によっての戦い方など、しっかりと考えこんで作られているため転移で移動先も最初から決まっている。
カグナの強力なブレスで一部の糸と壁が壊れたことで粘着性の高い糸がさらに道を塞ぐように垂れ下がる。
蜘蛛の糸に触れることが危険だと本能的に気づいているのか、ゲエレは土魔法で糸を無理矢理避けて道を開けて通ろうとする。
やっぱり、土魔法で糸の隙間を広げて来るよねぇ。
はい、もちろん読んでいましたとも。
ゲエレが糸の隙間を通り抜けようとする時に周囲の糸を操糸で操り、ゲエレの体に絡め付ける。
粘着性の高い糸が体に着いたことで近くに張られた糸が体に絡みついたゲエレは満足に動けない状態に陥った。
属性攻撃が付与された糸も絡みついたことでダメージを受けてはいるが、ＨＰ高速回復ですぐに回復されてほとんど減らない。
ん～、糸の属性攻撃だと地龍の防御力相手にほとんどダメージが入らないかぁ。
まあ、ゲエレの動きを封じることには成功した。
絡みついた糸から抜けだけせてもこのテリトリーでは自由に動き回れない。
つまり、後は一方的な殺戮だぁ。
巨大化で体を五倍の大きさに変えた私は腕を伸ばして糸の隙間を縫うようにしてカグナとゲエレに攻撃をする。
私の攻撃力ならカグナはともかくゲエレにはかなりのダメージが

入る。
最初は打撃のみで削っていく。
あれだけスキルポイントがあると、対策される可能性がある。
対策されても大丈夫なように必要以上に耐性を盛っているから自由に行動できるようにはならないだろうけど、私もかなり消費した。
糸のおかげでカグナもゲエレも私を直視できない。
おまけに体をこれだけ伸ばしている以上、気配感知でも腕を伸ばしている私の位置を特定するのは難しいはず。
よし、今のうちに手軽に食べれる魔物を空納から出して食べよう。
予想通り、ゲエレはスキルポイントを使って火炎耐性と火炎魔法を取得して絡みついた糸を必死に焼き切ろうとしている。
高い耐性が付与されているため、簡単には燃えないが燃えないわけではない。
時間がかかるものの確実に抜け出してくるのは確実。
それでも抜け出すまでにかなり消費しているはず、それまでに出来るだけダメージを与えればゲエレはもう怖くない。
ゲエレが抜け出すか、カグナが私の位置を特定するまでに出来るだけ食べて回復しないといけない。
幸い、ゲエレは抜け出すのに手こずっているし、カグナはこの糸が張り巡らされた空間を気にせずに動き回る私の腕が時間を稼いでくれている。
ああ、カグナが硬いなぁ。
平均攻撃能力がカグナの防御力の倍以上あるけど、腕を伸ばすとどうしても攻撃力が落ちるんだなぁ。
それでも十分に防御力以上の攻撃力はあるはずなんだけど、スキルのせいでダメージがほとんど入らない。
入ってもＨＰ高速回復のせいですぐに回復される。
スキルポイントを使って耐性を獲得されないように、得意属性は隠して置かないとだめだねぇ。
やばい、ブレス!?
まあ、撃たせないけどね!?

腕ではなく私の体に向かってブレスを放とうとするカグナに重魔法を掛ける。
その上でカグナの頭を複数の腕で叩いてブレスを自分の足元に撃たせる。
カグナが体制を立て直す前に、腕を引っ込めて次の場所に転移する。
転移してすぐにカグナだけでなくゲエレにも重魔法による攻撃を行う。
出来ればスキルポイントを重魔法、糸、神珍鉄、酸攻撃くらいで使い切らせれば余裕そうね。
カグナは暗黒魔法まで対策されそうだけど、そこで使い切れればセーフかなぁ。
最悪なのは私の最大攻撃力である腐食属性まで対策された時だよねぇ。
そうなると、カグナとの持久戦が始まるなぁ。
また腕を伸ばして攻撃を再開するが、どうやらゲエレは糸から脱出したようだ。
重魔法の耐性も獲得したようで腕による攻撃を避けられる。
ゲエレの動きを封じるために腕から糸を出して逃げ道を塞いでいきながら、神珍鉄で腕を覆い斬撃による攻撃に切り替える。
カグナの方は操糸で周りの粘着性の高い糸を絡め付け、地面に縫い付けて固定する。
ブレスを撃たれると面倒なので腕から糸を新たに出してしっかりと塞いでおく。
そのうえで神珍鉄で覆われた腕による斬撃と刺突でＨＰを削っていく。
よし、頼むから腐食属性使うまでにスキルポイントなくなってくれよぉ。
ゲエレはかなりＨＰが削られていることで、斬撃と貫通の耐性のレベルを上げてくる。
狭い空間でもなんとか腕による攻撃を避けているが、ＨＰの回復速

度と同程度のダメージは常時入っている。
そしてゲエレのスキルポイントはほとんど尽きた。
これでゲエレを倒せる!?
その前にカグナを完全に封じて置かないといけないね。
糸の巻き付いていない隙間からカグナの体に神珍鉄の槍を十数本突き立てる。
そして体の中で反しを作り簡単に抜けないようにして反対側を周りの地面に突き立てて同じように反しを作り固定する。
そのうえでカグナの体を粘着性と強度の高い糸で覆う。
カグナが動けなくなったのを確認し、ゲエレに集中する。
ゲエレの周りの糸を操糸で操り、もう一度絡みつけて動きを封じる。
ゲエレもすぐに糸を燃やしにかかるが、燃やされる前に腕を引っ込めて空間転移でゲエレの前に移動する。
そして神珍鉄の槍で串刺しにし、腕を縮めたことで上がった攻撃力の上に酸攻撃を乗せて殴り付ける。
一気に畳掛けられたことでゲエレは何もできずにＨＰを削り切られて倒れる。
復活しないことを確認してカグナに視線を向ける。
かなり消耗したけど、一番厄介だったゲエレは倒せた。
後は、圧倒的な暴力でカグナをねじ伏せる。
ゲエレがやられたことでカグナは糸を火炎魔法で燃やし、地面を砕いて神珍鉄の固定具を引き抜く。
ＨＰはかなり削れたけど、攻撃の手を一旦止めたせいでＨＰが７割くらいまで回復している。
糸対策をしたことでスキルポイントもかなり減っているが、物理攻撃に対する耐性とＨＰ回復速度もかなり上がった。
もう普通の攻撃だとＨＰを削るのは難しそうね。
まあ、普通の攻撃なんてもうしないけどねぇ。
くらえ、暗黒槍!?
ゲエレが死んだ以上糸で足止めする必要がなくなったため、糸もろ

とも暗黒槍で貫いて攻撃する。
カグナは大量の暗黒槍に対処することが出来ずにＨＰを一気に削られていく。
食べるなら腐食攻撃はやめた方がいいよね。
なら、耐性を獲得される前に暗黒魔法と酸攻撃で一気に削り切ろう。
巨大化して大量に腕を伸ばし、酸攻撃で全方位から殴り付ける。
暗黒槍と酸攻撃と打撃攻撃により、体力を一気に削られたカグナは成すすべなく倒れる。
ゲエレ同様に回復しないことを確認して腕を戻して巨大化を解除する。
ふぅ、無事に二匹とも倒せたなぁ。
じゃあ、巣に戻って食べながら蜘蛛子ちゃんが帰ってくるのを待ちましょうかねぇ。

さあ、外に出よう

上層の巣で地龍を食べながら蜘蛛子ちゃんの帰りを待っていると、元気のない蜘蛛子ちゃんが帰って来た。

どうしたんだろう？

アラバは倒したんだろうけど、何かあったのかな？

『蜘蛛子ちゃん、元気ないけど、なんかあった？』

『スラちゃん・・・・・実はさ』

私が問いかけると、蜘蛛子ちゃんはアラバ戦で何があったのか教えてくれた。

なるほど、アラバは全身全霊で挑んだ相手に自分なりの敬意を払ったわけかぁ。

けど、いつも必死で生き残ることに全力な蜘蛛子ちゃんには逆効果だったわけかぁ。

ん～、私が何か言って変わるものじゃないなぁ、これは。

『蜘蛛子ちゃん、世の中いろんな考えの奴がいるから、自分の価値観と違うことを気にしてもしょうがないよ』

『そうかもしれないけど・・・・・』

『いいじゃない、勝ったんだから。世の中自分を貫き通した人の勝ちなんだよ。どんなに御大層な信念や理想を掲げても、貫き通せなければ敗者でしかない。相手の信念や理想を砕いて勝った勝者なら、敗者の考えに囚われちゃだめだよ』

『・・・・・ちょっと何言ってるか分かんない』

『ありゃ？』

ん～、もっとかみ砕いて伝えないといけないのかぁ。

えっと・・・・・・

『勝者なら敗者に「私の方が正しかったじゃないか、バーカ」くらい言ってやればいいのよ』

『いい感じのこと言ってると思ったら全然違った!?』

『まあ、それは流石に冗談だけどねぇ。けど、そのくらいバッサリ斬り捨てる方が、これから先も迷わずに自分を貫けるよ』

『・・・・・そうだよね。アラバがどんな価値観を持っていても勝ったのは私だもんね』
『じゃあ、念願の外に行こっか』
『美味しいものがいっぱい食べれる!?』
美味しいものが手に入るか分からないけどねぇ。
まあ、迷宮内には無かった木の実とかあるのは確かだろうけどねぇ。
『それで、出方分かるの？』
『うん、この前マーキングした人間のおかげで出口が分かったよ』
『へぇ、叡智って便利ねぇ』
『よし、スラちゃん行こう!?』
『はーい』
食べかけていた地龍を空納にしまうと、蜘蛛子ちゃんが背中に乗せてくれる。
いやぁ、本当に移動が速いなぁ。
まあ、平均速度能力が三倍以上離れてるから仕方ないんだけどねぇ。
それにしても蜘蛛子ちゃん本当に強くなったなぁ。
初めて会った時は速いだけで本当に弱かったのに、今では一人で地龍を倒せるなんてねぇ。
それに支配者スキルを四つも持ってるなんて、本当にチートだなぁ。
『スラちゃん、出口見えて来たよ!?』
『ようやく、迷宮を出られるねぇ』
『これで私達も自由だー!?』
蜘蛛子ちゃんが叫び声を上げながら迷宮の外に出ると、転生して初めて浴びる日の光と迷宮の出入り口を取り囲む砦が待っていた。
砦にはたくさんの兵士達が武器をこちらに向けて攻撃してくる。
攻撃は全く効いてないからどうでもいいが、どうしたものかねぇ。
『どうする蜘蛛子ちゃん？』
『いきなり殺すのもあれだから、めっちゃ力をセーブして』

そう言いながら蜘蛛子ちゃんが撃ちだした魔法が砦に直撃すると、面白いくらい簡単に崩壊していく。
あまりの惨状に蜘蛛子ちゃんは私は関係ないとそそくさとその場から離れていく。
『いきなり殺さないために力を何だっけ？』
『ちゃんと力はセーブしたよ!?それなのに簡単にぶっ壊れたんだ!?』
『なるほどなるほど、それで？』
『砦が脆いのが問題だと思います!?欠陥工事が崩壊の原因だと思います!?』
『魔導の極みなんて持ってる龍を殺せる魔物の魔法に耐える建物があるなら見てみたいわ』
『・・・・・・それは・・・・・・スラちゃんが神珍鉄で作れば見れるよ!?』
『被告人が容疑を認めたため有罪とする。これにて閉廷』
『ノー!?』
蜘蛛子ちゃんとふざけた会話をしながら山の中を進んでいく。
正直、先に攻撃してきたのは向こうなので砦を壊されたくらいで済んだことを感謝してほしいくらいだ。
私達の気まぐれ次第では皆殺しもありえたのだから、被害が少なくて良かったね。
『まあ、冗談はほどほどにして、これからどうする？』
『やっぱり、迷宮では食べれないものを食べたいよねぇ』
『じゃあ、山の幸でも探してみよっか』
『おー、筍とか茸、木の実、シカや猪いないかなぁ』
『私も甘いものが食べたいなぁ』
蜘蛛子ちゃんと一緒に山の中をゆっくりと散歩しながら食べ物を探して回る。
私は蜘蛛子ちゃんの背中に乗せられているので歩いていないが。
しかし、思った以上に見つからないものだなぁ。
まあ、動物は私達を恐れて逃げていくよねぇ。
食べ物は空納に入ってるから焦る必要はないけど、折角外に出たん

だから木の実とか食べたいよねぇ。
しばらく、探したことで漸く果物を見つけることが出来た。
私は腕を伸ばして果物を複数個取り、蜘蛛子ちゃんに少し渡す。
『いやぁ、見つかって良かったねぇ』
『ありがとう、スラちゃん。それじゃあ、いっただきまーす』
美味しそうに桃のような果物にかぶりつく蜘蛛子ちゃんを見て私も同じようにかぶりつく。
迷宮内では食べることが出来なかった果物の甘味に幸せな気分で食べ続けていると、探知に蜘蛛の魔物が大量に引っかかった。
蜘蛛の魔物達は明らかにこちらに向かって来ている。
『何、あいつら？』
『ああ、多分、私を連れ戻しに来た奴らかも』
『ふーん、殺すの？』
『そうだね。向こうも殺す気で来てるだろうから、殺してもいいでしょ』
『了解』
殺すのはいいけど、アークは少し厄介だなぁ。
動きさえ制限できれば問題ないんだけどねぇ。
『蜘蛛子ちゃん、アークの足止め出来る？』
『足止めくらいなら出来ると思うけど、なんで？』
『いや、攻撃が当てられるなら簡単に倒せる相手だから』
『ああ、なるほどねぇ。なら、足止めは任せて!?』
『お願いねぇ』
蜘蛛子ちゃんと簡単な作戦を話し合って私達は罠を仕掛けて蜘蛛の魔物達の前に姿を現す。
蜘蛛の群れは私達を前にして止まると、蜘蛛子ちゃんが仕掛けた罠を簡単に壊した。
一応、頭はそこそこいいんだねぇ。
罠は一つではないので二つ目の罠で動きを封じて蜘蛛子ちゃんと一緒に暗黒魔法を撃ち込んで雑魚を一掃する。
しかし、グレーターとアークは流石にこのくらいでは倒せないよう

だ。
腕で砂煙から出て来たグレーター二匹の頭を吹き飛ばす。
まあ、グレーターなら問題なく殺せるね。
問題はアークだけど、蜘蛛子ちゃんが動きを止めてくれれば余裕だね。
アークとグレーターの攻撃を避けながら走って逃げる蜘蛛子ちゃんの背中からグレーターに腕を伸ばして頭を吹き飛ばす。
残りはアーク二体とグレーターが三体。
操糸でアークとグレーターの攻撃を防ぎながら腕でグレーターの頭を潰して殺す。
アーク二体が残ったところで蜘蛛子ちゃんが木の上に飛び乗る。
私達を狙ってくるアーク二体に私と蜘蛛子ちゃんの二人で操糸を使い身動きが取れないように拘束する。
『上手くいったね、蜘蛛子ちゃん』
『これくらい余裕ですよ、スラちゃん』
蜘蛛子ちゃんの言う通りかなりの余裕があった。
確かに一人だと倒すのが辛いが、二人で協力できるなら何の問題もない。
私の最大の弱点であるスピードは蜘蛛子ちゃんが補ってくれるので、私は得意の攻撃に集中できる。
私達が協力するのなら龍クラスでも何の問題もない。
『それじゃあ、止めを刺しますか』
『そうだね』
私達の糸で満足に身動きの取れないアーク二体を余裕をもって殺す。
アークを殺したことで一気にレベルが上がった。
私の平均速度能力も大分上がったなぁ。
まあ、それでも２０００代なんだけどねぇ。
『それじゃあ、食べますか』
『折角、迷宮から出たのに食べてるものが迷宮にいた頃と変わらないのはどうしてなんでしょうね』

『まあ、食べ物を無駄にするわけにはいかないから仕方ないね』
『そうそう。お残しは厳禁』
蜘蛛子ちゃんと一緒に蜘蛛の死体を食べる。
迷宮内で食べれるものだが、意外と美味しかったので良しとしよう。

人助けと転生者

蜘蛛の魔物達を撃退して食べた後、私達はまた外の世界の散歩を再開した。

しかし、あんな風に迷宮を出ただけで群れで襲い掛かってくるなんて、蜘蛛子ちゃんも大変だなぁ。

ブラザー達って言ってたから兄弟なんだろうけど、群れを作る魔物だと群れのルールとか厳しいのかなぁ。

そういえば、前に中層でやばい蜘蛛に出会ったなぁ。

あれも蜘蛛子ちゃんの血縁だったりするのかなぁ？

『ねえ、蜘蛛子ちゃん』

『ん？どうしたの、スラちゃん？』

『前に中層に居た時に滅茶苦茶強い巨大な蜘蛛見かけたよねぇ。あれも蜘蛛子ちゃんの兄弟なの？』

『ああ・・・・・あれはブラザーじゃなくてマザーだよ』

『つまり、あの蜘蛛の群れのボスってこと？』

『そういうこと、そして私を連れ戻そうとしてる奴ね』

どうやら蜘蛛子ちゃんは相当やばい奴に目をつけられているようだ。

龍クラスのアークを複数匹従えるやばい蜘蛛に追いかけられるなんて最悪だ。

あの時はステータスも確認しなかったが、龍を軽くあしらうほどの力を持った化け物であるのは確かだ。

『そんな奴に追われてて大丈夫なの？』

『大丈夫だよ。マザーってあの巨体だから迷宮から出てこれないだろうしね』

『んー、それもそうだね』

あんな体だと迷宮内を動き回るのでも道を選ばないといけないだろうから、簡単には出てこれないだろう。

今の私達でもあれに勝てるか本当に分からない。

神を目指している以上いつかは超えないといけないだろうけど、一

日二日で超えられるなら誰も苦労なんてしない。
成長チートを持ってる私達でさえ簡単には超えられなんだ。
それはつまり、どうしようもない化け物ということになる。
あんな化け物が人間の国に現れればあっという間に人間は滅びることになるだろう。
『出来ればずっと迷宮の奥底に居て欲しいかなぁ』
『近づいてきたら転移で逃げれば大丈夫でしょ』
『そうだねぇ。転移で逃げ回れば追いかけるのは不可能だしね』
『そうそう』
『まあ、逃げ回ってる間に人間の国が何個も滅びるだろうけどねぇ』
『そこは仕方がない。私達にはどうにも出来ないことだよ』
『確かにねぇ』
蜘蛛子ちゃんとマザーについて話していたら探知に人が引っかかった。
それも複数人数で馬車に乗っている集団。
しかし、馬車は止まっており、馬車を囲むように武装した兵士達が剣を抜いている。
『人間だねぇ』
『お取込み中？』
『お取込みというより、襲われ中』
『ん～、どうする？助ける？』
『まあ、人間は経験値が美味しいから助けてもいいよ』
『確かにねぇ。けど、人と関わるのは面倒なんだよなぁ』
『流石コミュ障』
『うるさいよ!?』
私達が話している間にも兵士達は盗賊に斬り倒されて行っているが、気にせずに話を続ける。
『人間助けても私達魔物だよ。今度はこっちに刃向けて来る可能性があるわけでしょ』
『いいんじゃない。それで』
『いや、良くないでしょう』

『私達が盗賊を倒して経験値を貰う。その後、助けた奴らに襲われた殺して経験値を貰う。襲われなかったらそのまま離れればいいだけだしね』
『そっか。襲って来たのはあっちだから正当防衛だよね』
『そうそう。殺しに来るってことは殺される覚悟はあるってことだよ』
『じゃあ、それで行こう』
『おーう』
馬車の人達を助けることが決まったので、盗賊を圧倒的な力で蹂躙する。
盗賊と私達のステータスが離れすぎている上に、スキルの数も質も違い過ぎる。
まともな戦闘など最初から成立しない本当にただの虐殺でしかない。
それでも入ってくる経験値の量はかなり多かった。
こんな雑魚殺してもそこそこ経験値が貰えるのはいいよねぇ。
さて、もう生きてる盗賊はいないな。
私が生きている盗賊がいないか確認していると、蜘蛛子ちゃんは盗賊に傷つけられた兵士達の治療を行っていた。
ああ、助けるってそこまでするのねぇ。
まあ、私も手伝ってあげるかぁ。
腕を伸ばして蜘蛛子ちゃんが治療してる以外の兵士を治療してやる。
治療が終わると蜘蛛子ちゃんがこの場所から離れようと、移動を開始する。
蜘蛛子ちゃんが移動を始めてすぐに、馬車の中から女性が赤ちゃんを抱えて出て来た。
さっき泣いていた赤ちゃんかぁ。
ん？根岸彰子？
・・・・・・ああ、私達と同じ転生者か。
うわぁ、スキルポイント７５０００って多いなぁ。

私なんて転生直後はスキルポイント１０００しかなかったのに・・・・・・

悟りなんてチートスキルがあったから何とかなったけどねぇ。

ん？そういえば・・・・・・あれ？ん？んん？

まあ、いっかぁ。

別に大した問題ではないしねぇ。

なんかさっきから蜘蛛子ちゃんが文句言ってるけど、蜘蛛の言葉なんて私にも伝わらないんだから何一つ伝わってないよ。

そして急に逃げるように走って離れていく。

何かショックを受けることがあったようで泣いているが、本当に何があったのだろう。

ん？さっきとは違うのが探知に引っかかったなぁ。

今日は良く人が引っかかる日だ。

『あれって、エルフ？』

『エルフだ!?ファンタジー定番種族キタコレ!?』

『嬉しそうだねぇ』

『エルフとか見るとファンタジーって気がしない？』

『自分の体がすでにファンタジーの塊だからねぇ』

『ああ、そういえば、そうだったねぇ』

スライムこそファンタジー定番モンスターだ。

そのスライムに転生している私にとってはエルフ程度でファンタジーなど感じない。

それになんかかなり物騒なエルフだしねぇ。

『これからさっきの吸血鬼襲いに行くみたいだねぇ』

『はあ、吸血っ子も大変そうだねぇ』

『まあ、今回はついでだし助けてあげようか』

『そうだね』

木々に隠れて吸血鬼を襲撃しようとしていたエルフ達を皆殺しにしておく。

ついでくらいの感覚だったが、いい経験値になったので良し。

さあって、楽しい散歩の続きだぁ。

『山の幸を食べつくしたら、海に行ってみない？』
『いいねぇ、海。こっちの世界だと何が釣れるんだろう』
『水龍とかが釣れたりしてねぇ』
『流石に水龍は無いでしょ。けど、水龍の刺身食べてみたいなぁ』
『迷宮の外なんだから、魔物の肉じゃないものも食べたいけどねぇ』
『あー、確かに、果物とかデザート食べたいよねぇ』
『この世界に来てから甘いものあんまり食べてないからねぇ。甘味は捨てられないよねぇ』
　というか、最初に食べた蜘蛛子ちゃんが拾って来た乾燥クリクタの実は美味しかったなぁ。

化け物と人形と進化

蜘蛛子ちゃんと一緒に森の中で見つけた果物を食べながら散歩している。
何となく、すごく嫌な予感がした私が、エルロー大迷宮の方に視線を向けると、エルロー大迷宮がある辺りから紫の奔流が天に昇って行った。
それを見た瞬間に私は顔を逸らした。
ああ、やばい。
上層から下層で生きて来た私でも迷宮内であんなふざけたことが出来る存在を一体しかしらない。
まさか、通れる道を自分の力で作ってくるなんて・・・・・・・
『蜘蛛子ちゃん』
『ん？どうしたの、スラちゃん？』
『マザーが来る』
『スラちゃんのマザー？』
『ううん、蜘蛛子ちゃんのマザー』
私の言葉に蜘蛛子ちゃんの足が止まる。
気のせいか蜘蛛子ちゃんが震えているような気がする。
『いやぁ、まさかぁ、だってあの巨体じゃあ外になんて・・・・・・』
『さっき、迷宮をとんでもない太さのブレスがぶち抜いてたよ』
『・・・・・・マジ？』
『まじです』
『あれ？なんか揺れてない？』
『まずいね。急いで逃げないと』
蜘蛛子ちゃんが後ろに跳び退くと、そこに巨大な蜘蛛の足が振り下ろされた。
視線をゆっくりと上にあげると、いつの日か中層で見た巨大な蜘蛛がそこにいた。
やばいなぁ。
クイーンタラテクト（弱体化中）って・・・・・・

何が弱体化してるんですかねぇ。
弱体化してなお、私より攻撃力高いってなんなの？
これ、逃げ切れるかなぁ。
『蜘蛛子ちゃん、転移魔法は私が構築するから逃げることだけに集中して』
『分かったよ、スラちゃん!?』
私の言葉を聞いてすぐに蜘蛛子ちゃんが全速力で逃げ始めるが、普通について来るマザー。
早く転移魔法を構築しないと本当に死んじゃう。
範囲転移で巣に逃げないと、早く早く早く。
うわぁ!?
魔法を構築している私の真横をマザーのブレスが通り過ぎる。
ブレスが地面に直撃すると、地面が爆散する。
蜘蛛子ちゃんが必死に避けながら逃げているため、ギリギリ当たらずに済んでいる。
これ、蜘蛛子ちゃんいなかったら死んでるなぁ。
あんなのまともに食らったら無事じゃ確実に済まないだろうしねぇ。
魔法の構築を急いで行いながら何となく後ろを振り向くと、平和な森の光景がぐちゃぐちゃにされていた。
木々はなぎ倒され、地面は抉れ、先ほどまでの森の光景などどこにもない。
うわぁ、移動する大災害だぁ。
これは本当にやばいなぁ。
マザーの振り下ろした足を蜘蛛子ちゃんが回避するが、少しかすり体の一部が削られる。
蜘蛛子ちゃんも足をやられたようで、避けた先に撃ち込まれたブレスは回避できそうにない。
ブレスが直撃する寸前で何とか魔法が完成して巣に戻ることが出来た。
危なかったぁ。

後、少し構築が遅かったら直撃してたぁ。
かすっただけとは言え、ＨＰかなり削れたからなぁ。
少し巣でゆっくり休んでから外に出よぉ。
『しばらくは古巣で休もうかぁ』
『そうだねぇ!?』
蜘蛛子ちゃんが私の言葉に返事を返す途中で、目の前に白い鎌のような前足が振り下ろされた。
私達が視線を上げると、アークが二体と大量の小さい蜘蛛が私達の目の前にいた。
ああ、ここに逃げ込むことも読まれてたのねぇ。
けど、アーク二体くらいならぁ。
背後で聞こえた足音に私達が振り向くと、アークが八体と大量の蜘蛛が居た。
・・・・・・アーク十体かぁ。
大丈夫かなぁ、これ・・・・・・
アーク十体に囲まれた状態をどうにかする手段なんて一つしかないだろう。
『蜘蛛子ちゃん、中層に行こう』
『そうだね。中層でこいつらをまとめて倒そう!?』
『まずは、こいつらを突破しないとねぇ』
アークの攻撃を蜘蛛子ちゃんが何とか回避してくれるが、数が多すぎる。
蜘蛛子ちゃんがアークの攻撃を回避しきれずに噛みつかれた。
背中に乗っていた私もろとも噛みつかれ、毒による攻撃をしてくる。
状態異常は私には効かないけど、蜘蛛子ちゃんには効いてるよねぇ。
アークの頭を伸ばした腕で殴り飛ばし、ＨＰを一気に削ってやるが殺すまではいかなかった。
それよりも蜘蛛子ちゃんのＨＰが危ないから先に治療した方が良さそうだねぇ。

蜘蛛子ちゃんの治療を行いつつ、アークたちを伸ばした腕を振り回して追い払う。
攻撃はほとんど当たらないが、近づけさせないことは出来た。
『ありがとう、スラちゃん』
『こっちは大丈夫だから、早く中層に!?』
『分かった!?』
中層に向かう道の途中で私達の目の前にそいつは現れた。
洞窟の天井に立っている腕が六本あるマネキンのような奴。
そいつは私達が戸惑った一瞬で私が伸ばしていた腕と蜘蛛子ちゃんの鎌のような前足を斬り落とした。
速すぎない!?
複数伸ばしていた腕が一気に切り落とされたことでＨＰが一気に削れる。
やばいなぁ。
奇跡魔法で治療を行いＨＰを回復させながら背後に視線を移す。
アーク十体と大量の蜘蛛がこちらに向かって来ている。
人形一体だけでも厳しいのに、アーク十体同時に相手とか無理でしょ!?
仕方ない、アークの足止めは私がするしかない。
人形相手だと私の腕も意味ないし、アークを魔法で足止めしよう。
『私がアークを足止めするから蜘蛛子ちゃんは人形をお願い』
『お願いってどうすれば!?』
『取り合えず、攻撃を避けることを優先して!?』
『分かった、避けるだけなら任せて』
魔導の極みなんてチートは無いけど、私も魔法は得意なのよ。
迫ってくる蜘蛛の群れに暗黒槍と暗黒弾の雨を降らせてやる。
流石にアークを倒すことは出来ないだろうけど、足止めにはなる。
問題は、アークどもの足止めに大量の魔法を撃ち込み続けてるから転移で逃げることが出来ないんだよねぇ。
『蜘蛛子ちゃん、転移で中層に跳べる?』
『すぐには無理、時間があれば出来るよ』

『分かった。人形の相手をしながらお願い、私はアークどもの足止めに集中するから』
『了解』
問題は足止めの方だけど、このまま魔法を撃ち続ければアークは耐性を獲得してくるだろうしねぇ。
蜘蛛子ちゃんが人形を何とかしてくれてる間にアークを削り切れればいいんだけど。
こんなに動き回られたら腕を伸ばして攻撃するのも出来ないし、伸ばしたら人形に斬られるよねぇ。
となると、切り札を使うしかないねぇ。
『蜘蛛子ちゃん、私が合図したら一瞬だけ止まって』
『え？よく分からないけど、分かったよ!?』
神龍力発動!?
スピードが無くてもこんな狭い通路だと逃げ道は無いでしょう。
『今、止まって!?』
『了解!?』
私の合図で蜘蛛子ちゃんが動きを止めた瞬間に私は蜘蛛の群れにブレスを撃ち込む。
腐食属性の強力な攻撃に避けれなかったアーク数体と蜘蛛の群れが塵になって消える。
『動いて良いよ』
私が言うと、蜘蛛子ちゃんは動き出すが、転移の構築が終わったのか中層に転移で来た。
いやぁ、今回は本当に危なかった。
蜘蛛子ちゃんがいなかったら本当に死んでたねぇ。
『蜘蛛子ちゃん無事？』
『うん、大丈夫』
『良かった。で、これからどうする？』
『取り合えず、さっきの戦いでレベル上がったから進化かなぁ』
『そういえば、私もレベル上がってた。私も進化しようっと』
蜘蛛子ちゃんに下ろしてもらった私は進化先の確認に入る。

《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。
アストラル・スライム
エンペラースライム》
ああ、前と似た感じだねぇ。
前の時の上位種って感じかなぁ。
となると、アストラル・スライムだねぇ。
『アストラル・スライム：進化条件：一定以上のステータスを持つ粘液状の魔物、魔法系スキル、物理無効、状態異常無効、全属性無効の所持：説明：物質を超越した高次元の体を得た粘液状の魔物』
うわぁ、進化条件えげつないわぁ。
物質を超越した超次元の体ってなによ。
まあ、進化するんだけどね！
アストラル・スライムに進化で!?
《進化が完了しました》
《種族アストラル・スライムになりました》
《各種基礎能力値が上昇しました》
《スキル熟練度進化ボーナスを取得しました》
《進化によりスキル『不死』を獲得しました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『巨大化ＬＶ９』が『巨大化ＬＶ１０』になりました》
《条件を満たしました。スキル『巨大化ＬＶ１０』がスキル『超巨大化ＬＶ１』に進化しました》
《熟練度が一定に達しました。スキル『超巨大化ＬＶ１』が『超巨大化ＬＶ４』になりました》
《スキルポイントを入手しました》
あれ？眠くならない。
状態異常無効があるからかな？
まあ、眠くならないのはいいか、ステータスの確認っと。
《アストラル・スライム　ＬＶ１　名前なし（蓮見葵）
ステータス
ＨＰ：９５６０／９５６０（緑）

ＭＰ：６５０／１８６５０（青）
ＳＰ：８２４０／８２４０（黄）
：８０３０／８２４０（赤）
平均攻撃能力：１８７５０
平均防御能力：１０８４０
平均魔法能力：１８３２０
平均抵抗能力：９６４０
平均速度能力：４２６０
スキル
『ＨＰ超速回復ＬＶ１０』・・・・・・『天命ＬＶ１０』『天動ＬＶ１０』『富天ＬＶ１０』『城塞ＬＶ１０』『剛毅ＬＶ１０』『天魔ＬＶ１０』『天道ＬＶ１０』『不死』『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』
スキルポイント：２０００
称号
『悪食』『暗殺者』『糸使い』『魔物殺し』『無慈悲』『魔物の殺戮者』『悟りの支配者』『竜殺し』『恐怖を齎す者』『龍殺し』『魔物の天災』『覇者』》
おお、一部ステータスだけならマザーに届きそうだ。
スピードは相変わらずだけどねぇ。
進化によるステータスの上昇とスキルレベルの上がり方がついにおかしくなって来たなぁ。
しかも、さっき明らかにおかしいスキル手に入ったよねぇ。
『不死：システム内において死ぬことが無くなる』
わーい、もう防御力とか関係ないねぇ。
深淵魔法使えるやばい奴と会わない限りは大丈夫だね。
まあ、隣にいるんだけどねぇ。
蜘蛛子ちゃんと敵対する予定はないし、大丈夫でしょう。
さて、もう一つのスキルの確認っと。
『超巨大化：自身の体を大きく出来る。大きくなるとＨＰと攻撃力が上昇する』
おお、巨大化だけでなくＨＰと攻撃力まで上げってくれるとは、これはいいスキルだねぇ。

普通なら体が大きくなるせいで攻撃が当たりやすくなるけど、物理無効や全属性無効で攻撃のダメージなんて入らないし、不死で死なない。

つまり、私にとってはデメリットにならない。

ふふ、ちょっと、下層にこもって鍛えてもよさそうだねぇ。

そうすれば、マザーが襲って来ようと怖くないでしょう。

私と蜘蛛子ちゃんがステータスの変化を確認していると、ポトリという音を立ててスマホが落ちて来た。

転生の真実

『もしもし、Dです』
急に現れたスマホから予想通りの人物の声が聞こえてくる。
ああ、やっぱり。
『お久しぶりです。急にどうしたんです？』
『お久しぶりです、スライムさん』
『あーあー、聞こえない、聞こえない』
私がDに挨拶していると、蜘蛛子ちゃんは耳？を押さえて現実逃避している。
そんなにDと話すのが嫌なのだろうか？
まあ、世界最悪の邪神と自称するようなやばい神と関わりたくないんだろうけど。
『あー、何ということでしょう。私の手になぜか蜘蛛自爆ボタンが』
Dの言葉を聞いた瞬間の蜘蛛子ちゃんの行動は速かった。
糸でスマホを引き寄せると、先ほどまで前足で塞いでいた耳？に当てる。
『しもしも、ごめんなさい！許してぇ！押さないでぇ！ていうか何そのボタン!?』
『冗談ですよぉ。ボタンなど無くても蜘蛛を汚い花火に変えるくらい出来ますから』
Dの全く抑揚のない声で言われても冗談には聞こえないだろうねぇ。
まあ、本当にそんなもの無くても私達なんて消せるだろう。
『ご安心を、こんな面白おかしい人材を無駄に散らすようなことはしません』
『そうっすか、光栄っす。あはははあはははは・・・・・・』
『あはははは』
蜘蛛子ちゃんの乾いた笑い声と本当に笑っているのかと思うようなDの笑い声が重なる。
『じゃあ、そういことで』

蜘蛛子ちゃんはスマホを置くと、どこかに歩いて行こうとする。
『自爆』
『ごめんなさい!?』
そんなに怖いなら大人しく話を聞けばいいだろうに。
『そもそもDが爆発させるなら自爆じゃなくて爆破じゃないの？』
『ああ、そうですね。だとしたら、自爆ボタンではなく爆破ボタンですね』
『どっちにしろ嫌だよ!?』
『ほら、蜘蛛子ちゃん、落ち着いて、深呼吸しようか。ほら、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー』
『ヒッヒッフー、ヒッヒッフー』
私の言葉に蜘蛛子ちゃんが合わせるように深呼吸をする。
『産卵のスキル獲得できた？』
『こんなことで出来るわけないでしょ!?』
『え、出来てないの？D、今のは獲得させるところでしょ』
『おお、これは失礼しました。次の機会があればしますね』
『しなくていいよ!?』
いやぁ、蜘蛛子ちゃんも元気になったねぇ。
それじゃあ、そろそろ本題に入りましょうか。
『それで、今回は何の用なの？』
『単なるお祝いですよ、お二人が不死に至った』
『お二人？』
『はい、蜘蛛さんもスライムさんも不死になりました』
蜘蛛子ちゃんも不死になってたんだ。
『ねえ、この不死って、なんでこんなスキル作ったの？』
『人は満たされると最終的に何を目指すと思います？』
『え？』
どうやら蜘蛛子ちゃんには不死のスキルが存在している意味が分からないようだ。
この世界のシステム的にはあっておかしくないスキルなのにねぇ。
『流石、スライムさんですね。蜘蛛さんに分かるように言いますと、

富、名声、武力、権力、そして不老不死。どこの世界でも人の目指すものなんて、その程度です。そして、それが本当に手に入ると知ったら、どうすると思います？』
『ああ、そういうこと』
今の問いで蜘蛛子ちゃんも分かったようだ。
『そういうことです。たとえ手が届かないとわかっていても、人は縋りたくなるものです。何を犠牲にしてでも。そうして頑張って頑張って、結局は手に入れられずに力尽きる。その頑張った結晶は管理者が美味しく頂く。実に効率的だと思いません？』
『流石、世界最悪の邪神様ですね。人の欲や感情をよく理解してますね』
『そうでしょう』
本当に、人の欲や感情をよく利用したシステムだこと。
『じゃあ、それ私達ポンと手に入れちゃったんだけど、どういうこと？』
『ザナ・ホロワとアストラル・スライムは不死の魔物という設定なんです。まさか、本当に進化してしまう個体が出てくるとは予想していませんでしたが、おめでとうございます。あなた達は世界で唯一のユニークモンスターになりましたぁ。パチパチパチー』
蜘蛛子ちゃんのザナ・ホロワは知らないけど、そもそも私以外のスライムを見たことないんだけど、ユニークモンスター以前に他に存在してるの？
『はい、その世界にスライムは存在していますよ。スライムはその世界で唯一自然発生する魔物なんですが、条件が厳しくてあまり数がいないんです。分裂出来るまで強くなる前に他の魔物に殺されることが多いため、本当に数が少ないんです』
『なるほど、つまり、私は自然発生したスライムというわけねぇ』
『はい』
こんな迷宮だと他のスライムは発生してもすぐに殺されそうねぇ。
転生者の私だから生き残れたわけねぇ。
『スラちゃんは希少なスライムだから不死を獲得できたってこと？』

『いえ、そんなことはありませんよ。そもそもアストラル・スライムに進化する条件を満たすことがかなり難しいんです。なので、スライムだから手に入ったというわけではないですよ』
　まあ、あんなふざけた条件をクリア出来るのなんて悟りとかいう成長チートがないと無理でしょうね。
『え？じゃあ、私は？』
『ザナ・ホロワに関しては進化する前に死ぬように出来てたんです』
『え？何それ？』
『ゾア・エレには腐蝕攻撃がありましたね？けれど、腐蝕耐性はありませんでした』
『そうなの？』
『えっと、多分』
　大分前のことだから忘れてるね、これは。
　まあ、私もどの進化で何のスキルが手に入ったかなんて覚えてないけどねぇ。
『はい。ですから、普通のゾア・エレは腐蝕攻撃を使った瞬間、自分も死ぬことになります。良かったですね。耐性を持っていて』
『危な!?マジかー、私知らないうちに死にかけてたのかぁ』
『だから、腐食無効は持っておいた方がいいって言ったのに』
『スライムさんの取り方は正気を疑いますけどねぇ』
『な!?世界最悪の邪神に正気を疑われるなんて・・・・・・』
　私は何もおかしいことなんてしてないというのに。
『失礼な、私は正気ですよ。人から正気を奪うのが私です』
『なるほど、あの時、私はDに正気を奪われていたのか』
『いやだなぁ。人のせいにしないでくださいよぉ。スライムさんが勝手に正気を失っただけです』
『私は生まれてこのかた正気を失ったことはないよ』
『そうですね。スライムさんはそういう人でした』
　ん？どういう意味？
『結局、あんたの目的って何？』
『言ったはずですよ、娯楽だと』

まあ、そうでしょうね。
純粋な悪意の塊みたいなDが、人助けなんて目的でこんなことするわけないものね。
『でも、今日は気分がいいので、それなりにサービスして色々とレクチャーして差し上げましょうか？』
『おぉ！マジっすか、じゃあ何で私達この世界に転生したの？』
『ああ、あの光の正体がなんだったのかは気になるかな』
『ご説明しましょう、あなた達は地球の日本で死にました』
それは分かってるって。
『それは先代の勇者と魔王が関係しています。両者ともに次元魔法の天才的使い手で世界の壁を越える魔法を編み出してしまったのです』
『なにそれ、すっげ』
『ええ、ただシステム外の技術に対してシステムの補助は働かないのです。彼らには次元を越えるという高度な術式を補助無しでは制御できませんでした。結果、術式は暴発、しかも世界の壁を越えた先、地球の日本のとある場所で爆発してしまったのです』
『なるほどねぇ』
それがあの時見た光の正体ってわけかぁ。
『つあり、それが・・・・・・』
『そう。あなた達の高校の教室です』
『なんてはた迷惑な！』
『全くです。勇者と魔王が暴走した結果とは言え、私は作ってから放置していた、その世界のシステムを点検し直す羽目になりました』
『作って放置！製作者の怠慢！』
『その世界を管理するのは管理者、私はシステムを提供しただけの部外者です』
その割にはかなり干渉している気がするけどねぇ。
『それはまあ、何の罪もない高校生達が、私が構築したシステムに巻き込まれて死んだわけですから』
『高校生達？』
『はい、爆発で死んだのは教室にいた２６人。私はその魂を保護し、記

憶をそのままにその世界で生きて行けるようにスキルを付与しました。後は、適性に合うスキルを一つずつプレゼントし、なるべく魂の波長が近い種族に転生できるように斡旋しました』
『ん、んん、私、蜘蛛だよね』
それを言ったら私はスライムなんだけど。
スライムに波長が近いってどんな魂よ。
『まあ、余程波長が合ったんでしょうねぇ。他の人は大半が人族に転生してますよ』
『ノー、なんでやねん！私だって人間に生まれたかったわ』
Ｄの言葉に蜘蛛子ちゃんが床を転げまわる。
そんなに人に生まれなかったのが悔しいのだろうか？
『ですが、こうしてフライング気味に活動できているわけですし、あながち外れとも言い難いですよ』
『フライング？』
『蜘蛛子ちゃん、多分思ってるのと違う』
『他の方々はまだ赤ん坊です』
『ああ、フライングってそっちか』
『生まれるのも人族より早かったですしねぇ』
魂が肉体に入ってから生まれるまでの時間の差かな。
スライムの私はどうなのか知らないけど。
『さっき、２６人が転生したって言った？』
『はい、そうですよ』
『教師入れたら２７人じゃないの？』
『ああ、それは私が転生してないからですね』
『はあ!?あんた教室にいたの!?名前は!?』
『秘密です』
なるほど、そういうことねぇ。
まあ、Ｄの正体についてはいつでも分かるし今はいいか。
『名前はともかく、システムの製作者の私がいたから勇者と魔王の魔術があの教室に開通してしまったんです』
『あんたが原因の一部ってことだよねぇ』

『おそらく、私を倒すつもりだったんでしょう』
『邪神を撃つために勇者と魔王が手を組むとは、熱い展開だねぇ』
『管理者を敵と見なしている勢力がいるようですねぇ。先代の勇者と魔王は彼らにそそのかされたのではないかと』
『ああ、ただの馬鹿だったかぁ』
まあ、人類側からすれば苦しめられてるから間違いではないだろうけどねぇ。
その原因が自分達にあるのだから自業自得だけさぁ。
世界の真実を隠せば簡単に騙せそうだねぇ。
『まっ、転生して何をするかはあなた方次第。これからも面白く見させていただきます』
『いや、見るなし』
『あなたちのこれからを期待していますよ。特に蜘蛛さんは彼女に勝てることを祈ってます。願わくばもっと私を楽しませてくださいね』
言いたいことだけ言ってスマホが消える。

修行をしよう

Ｄのスマホが消えたのを確認して蜘蛛子ちゃんに話しかける。
『私はこれから下層に籠って修行しようと思うけど、蜘蛛子ちゃんはどうする？』
『ん～、私は逃げ回りながらマザーの戦力を少しずつそいでいこうかな』
『そっか。ピンチの時は呼んでね、すぐに行くから』
『まあ、不死だし大丈夫だと思うけどねぇ』
不死ねぇ、このシステム内で絶対の安全何てあり得ないと思うけどねぇ。
『スキルの効果を過信しない方がいいよ。あのＤが作ったシステムだからねぇ、不死の抜け道くらいたくさんあると思うよ』
『ああ、うん、気を付けるよ』
『じゃあ、またね』
『うん、またね』
蜘蛛子ちゃんに注意だけして私は中層から下層に転移する。
カグナとゲエレが居た空間に改めて巣を張り直し、活動拠点を作る。
今の私なら下層にいる地龍が相手でも余裕で勝てるよねぇ。
となると、修行をするなら自分で負荷を掛けないとだめだよねぇ。
普段からかけてる重魔法の数を増やして、神金生成で作れるあれを使えばいいかなぁ。
『神重鉛・魔力の貯蓄性に極めて優れており、魔力の貯蓄量で重さが増す金属。生成できる者が少なく入手は困難を極める』
私はＭＰがあればいくらでも生成できるけどねぇ。
神重鉛を体中につけて魔力を込めて重くするのと、重魔法の数を増やして鍛えよう。
その状態であの猿の群れを魔法無しで相手にすれば食料確保も問題ないね。
早速、体を五倍の大きさにして腕を伸ばす。

伸ばした腕に神重鉛で出来た腕輪を大量に着ける。
魔力が一切貯蓄されてないので重さは普通の鉛と大して変わらないくらいだ。
しかし、腕輪に魔力を貯蓄していくと、どんどん重くなる。
最終的に自動回復を越える速度で流し込んだ私のＭＰが０になるころには伸ばした腕を持ち上げられなくなっていた。
え？これ、こんなに重くなるの!?
いくら、魔神法や神龍力を使ってないとは言え、私の攻撃力２万近くあるんだよ!?
超巨大化で攻撃力も上がってるはずなのに、本当に持ち上げられない。
仕方がない、ＭＰが回復したら魔神法と神龍力を発動させて試してみよう。
大きくした体を元の大きさに戻して腕輪から腕を抜く。
そして空納から食料を取り出して飽食のストックを回復させながら少しの間休む。
さて、ＭＰとＳＰの貯蓄は十分に出来た。
体を大きくして腕をもう一度腕輪に通す。
そして魔神法と神龍力を発動させて腕を持ち上げる。
先ほどとは違い腕を持ち上げることは出来たが、自由に振り回せるほどの余裕はない。
これだけでも十分に鍛えられるねぇ。
ここに重魔法なんてかけてる余裕ないわぁ。
取り合えず、この状態で猿を探しに行こう。
普段とは比べ物にならないほど重み体を動かして下層を歩いて回る。
途中で雑魚が襲い掛かってくるが、腕が重すぎて反撃が遅れて攻撃を何度も受けた。
それでもカグナ以上に高い私の防御力とスキルのおかげで全くダメージは入らないので助かっている。
腕に必死に力を込めて殴り付けることで、一撃で殺せるが一匹倒す

のにかかる労力が半端ではない。
今は動けてるけど、ＳＰが切れたら確実に動けなくなるなぁ。
空納に食料の余裕はあるけど、もっと大量の貯蓄があった方が良さそうだねぇ。
食料の貯蓄について考えていると、漸く目的の猿を見つけた。
猿は私を見ると襲い掛かってくるが、私は腕の一本に力を込めて猿を殴り飛ばす。
猿を一匹殺したことで近くにいた別の猿が叫んで私に襲い掛かってくる。
大量の猿の群れに石を投げつけられたり、殴られたりをしながらも一匹ずつ殺していく。
上位個体である大きい猿も来たが、何の問題もない。
こいつら程度の攻撃ではダメージなんて最初から入らないのだから。
せいぜい私の食料の貯蓄に尽力してよねぇ。
最初に蜘蛛子ちゃんと会った時に見た猿の群れとは数が明かに違う。
蜘蛛子ちゃんを襲っていた群れはかなり小規模の群れだったのだろう。
雑魚とは言え、かなりの数を殺し続けたこともありレベルが上がった。
レベルが上がったことで動かすのがやっとだった腕が大分余裕をもって動かせるようになり、最後の方は魔神法と神龍力を解除した状態で腕を動かしていた。
レベルが上がる前から動かしやすくなってたけど、これは本当にバグってるわねぇ。
そういえば、この世界に来てから死にかけたことは何度もあったけど、体を限界まで追い込んで鍛えたことはなかったねぇ。
重魔法とかで体に負荷をかけたことはあったけど、まともに活動出来ないレベルで負荷をかけたことは一度もなかった。
死にかけた経験だって基本的にはスピードが無いという弱点が

あったからだ。
その弱点を蜘蛛子ちゃんが補ってくれたし、スキルで相手の動きを制限すれば乗り越えられる程度だった。
だから、ステータスの伸びは補正があってもこれが限界だと思っていた。
ふふ、私も蜘蛛子ちゃんみたいに生きるか死ぬかのギリギリを試してみようかな。
この体に顔なんてないけど、顔があれば口角を吊り上げて本当に楽しそうに笑っていることだろう。
全滅させた猿の死体を食べながら自動回復を越えない程度の速度で魔力を神重鉛の腕輪に流していく。
飽食のストックが満タンになるまで食べ、残りを空納にしまって次の群れを探すために、魔神法と神龍力を発動させる。
レベルが上がりステータスが上がった分、さらに重くしたせいでまた動くだけで一苦労だ。
物理ステータスはこれを続ければ上がるだろうけど、魔法はどうしよう。
次に動く余裕が出来たら神重鉛に魔力を流すんじゃなくて重魔法を複数かける方に切り替えようかな。
ああ、人化も出来るようになりたいかな。
蜘蛛子ちゃん、人が作る食べ物食べたがってたし、町に入るために人型目指すだろうからねぇ。
私も人の体の方が動かしやすいしねぇ。
特に歩くのとかわ。
スライムの体に不満はないが、歩いたり走ったりするのは人の体の方がやりやすいと思ってしまう。
走り回らなければ腕を伸ばしたり、生やしたりやりたい放題なのでとても便利だし戦いやすい。
それでも元人としては違和感がすごいのは確かだ。
形を変えるのは自在に出来るんだから、人の形を真似して行動してたら取得できないかなぁ。

まあ、その辺は後で試してみればいいか。
お、猿発見、殺戮の時間ですね。
しばらく歩いて漸く先ほどとは違う群れの猿を見つける。
結構歩いたせいで神龍力を解除しても問題ないほどにステータスが上がってしまった。
猿を見つけたと同時に神龍力を発動し、ギリギリ動ける程度に調整して重魔法を掛ける。
先ほどと大して変わらない数の群れを殺しつくし、腕に付けた神重鉛を空納にしまって猿を食べる。
飽食のストックが満タンになったのを確認して巣に戻る。
さて、人化の練習して今日はもう寝よう。
明日からも今日と同じやり方で鍛えればステータスが大幅に伸びるでしょ。

人化と衣食住

神重鉛を使った修行を始めてから数日が経った。
不死のスキルを持っているが、何度も死ぬかもしれないと思った。
神重鉛に重魔法を掛けた状態で動くには魔神法と神龍力を発動させる必要がある。
そんな状態では通路を普通に歩くだけでもＭＰとＳＰを大幅に削られる。
動くだけでも大変な状態で竜クラスの奴が襲ってくることもある。
万全の状態なら何の問題もない相手だが、ＭＰもＳＰもギリギリの状態で襲われればかなり辛い。
まあ、自分で自分を追い込んでるだけなんだけどねぇ。
ダメージがほとんど入らない上に不死だから出来る鍛錬だ。
それでもＳＰが切れて空腹になるのは辛い。
そんな日々を送りながら合間にやっていた人化の練習が実った。
数日で人化のスキルが手に入ったのは悟りのおかげだろうが、気にせずに発動させる。
人化した姿を確認するために、神金生成で鏡のような金属板を作り出す。
アストラル・スライムの体とは違う雪のように白い肌の手足。
スライムの体と同じように青系統のグラデーションが薄っすらとかかった白銀の髪。
そして明らかに人の物ではない瞳。
白目の部分は普通だが、黒目の部分だけがスライムの体と同じで薄い黒に青系統のグラデーションがかかっている。
さらに、口の中もスライムの体と同じようだ。
唯一の違いは歯がついているくらいだ。
ふむふむ、目と口を見られなければスライムだとバレそうにないね。
顔も学校で一二を争う美少女と呼ばれてた前世と変わってないねぇ。

体形も変わってないぽいね、胸も前世と同じでそこそこ大きい。
変わったのは髪の色と長さだけね。
前世だと背中の中間くらいだったのに、今は膝下辺りまである。
体の確認が一通り終わると、背後に大きい蛙が出て来た。
上層にもいる蛙の進化した種だろう。
折角、人化して生えた足で地面を蹴り、一瞬で蛙に近づいて回し蹴りで吹き飛ばす。
私の全力一撃を受けた蛙は粉々になりＨＰを全損させる。
おお、やっぱりこっちの方が動きやすいねぇ。
けど、全裸で迷宮内を暴れまわるのは女子として問題だよねぇ。
そうだ、糸で服とか作ればいいじゃない。
取り合えず、粉々になった蛙の死体は空納にしまって巣に戻る。
巣に戻ってすぐに糸で簡単な下着を作って着る。
その後にゆっくりと服を作っていく。
流石に白一色だと味気ないので、青系統の色を使いながら水色のワンピースを一着作り上げる。
「出来たぁ!?」
ワンピースを着て先ほど作った鏡のような金属板の前でクルクルと回ってみる。
「初めてにしてはなかなかの出来ねぇ」
少し時間をかけただけあっていい感じのワンピースが出来た。
鏡を見る限りでは目と口の中を見られなければ普通の女の子だろう。
んー、フードを目深にかぶれば大丈夫だよね？
問題は街中に入れるかだけど、恐怖を齎す者があるからなぁ。
まあ、威圧とかオフにして隠密とかで頑張るしかない
そもそも言葉が分からないから人の話とか文字を見に行きたいだけだしねぇ。
そうと決まれば適当にフード付きのローブを作って行ってみよう。
ワンピースとは違い速攻で作ったローブを着てフードを目深にかぶる。

その状態で隠密や無音などで気配を全力で消して人が住んでいる町に向かう。
迷宮の外に転移で出て、町を探す。
迷宮の出口に砦があったから、道を辿っていけば町に着くよねぇ。
明らかに人が通るために整備された道を辿って町を目指す。
予想通りにすぐに町は見つかり、探知を全開で使いながら町の中に入る。
隠密を発動させながらも出来るだけ人の目に付かないように気を付けて進む。
探知で入ってくる雑談をする人達や買い物をする人、家事をする人などの動きや会話を整理していく。
並列意思と高速演算を利用して言語の理解を深めていく。
もっと時間がかかるかと思ったけど、スキルを使えば案外簡単に言語を取得できそうねぇ。
これなら今日中に言語を習得出来そう。
一通り歩いて回り、言語を習得できた。
言語と恐怖を齎す者の確認のため、フードを目深にかぶった状態で買い物をすることにした。
果物を売っている適当な露店の前に行くと、果物を指さして店主に声を掛ける。
「これ、十個ください」
「はいよ」
店主は私が頼んだものを袋に詰めながら値段を言ってくる。
それに対して私は手をローブに一旦隠して神金生成により硬貨を生成する。
神金生成は金属生成の最上位スキル。
神金生成で作れない金属はないので、硬貨ならいくらでも作り出せる。
形や材質は探知で何度も感じ取ったので余裕で再現できる。
店主にお金を渡してお釣りを受け取り、私は人がいない路地裏に移動して転移で迷宮に戻る。

「恐怖を齎す者も言語も問題なさそうだねぇ」
目的を問題なく達成できたことに喜びながら、成果である果物に視線を向ける。
あれから迷宮に籠っていたために食べることのなかった果物。
「いっただきまーす」
ん～、美味い!?
いやぁ、こんなことしてるの蜘蛛子ちゃんにバレたら怒られそうだなぁ。
今度、蜘蛛子ちゃんにも買って行ってあげよう。
買って来た果物を全て食べ終わり、袋とロープを空納にしまう。
さて、今日からは人型で訓練しよう。
スライムの姿での戦い方には大分慣れたからねぇ。
人型での戦闘にも慣れて置かないと。
空納から神重鉛の腕輪を取り出し、鍛えているように見えない細い腕と足に付けていく。
スライムの時違って付けれる数が少ないので神重鉛に魔力を流し込んでいく。
だんだんと重くなり動くのが辛くなってくるところで魔力を流すのをやめて重魔法を掛ける。
まともに立てない程に重魔法を重ね掛けして魔神法と神龍力を発動する。
「さて、今日も猿の群れを探しますかぁ」
下層を歩いて回っていると、猿を見つけたので殴り殺す。
すると、猿の群れがいつも通り襲い掛かってくる。
近づいて来る猿を殴り蹴りと殺し続ける。
あれ?いつもより数の減りが遅い。
あー、手の数が少ないからかぁ。
いつも十数本の腕を振り回して猿を蹴散らしているのに対し、今は両手と両足で目の前の猿くらいにしか攻撃が届かない。
これでは猿の数が減るのが遅くても仕方がない。
ん～、手数の多さはスライム形態の方が上かぁ。

けど、この状態でも手足を伸ばしたりすることは出来そうだ。
まあ、折角作った服が破れるからしないけどねぇ。
いつもより時間がかかったせいで最後の方はそれなりに動き回れるようになった。
そして猿との戦闘で暴れまわったこともあり服がボロボロになっている。
「そういえば、戦闘を考慮して作ってなかったわぁ。はあ、戦闘用の服作ろう」
猿の死体を空納にしまい巣に戻る。
お腹が空いているので、空納にしまった死体を出して食べながら作る服について考える。
やっぱり、元日本人だし和服がいいかなぁ。
アニメの和服キャラの戦闘シーンとかかっこいいし、和服綺麗だもんねぇ。
ということで和服を作ろう!?
「問題は耐久力よねぇ」
今の私の戦闘に耐えられるほどの服を作ろうと思えば作れる。
ただし、それは今のであってとんでもない速度で成長している私のステータスでは耐えられなくなるのも時間の問題だ。
仕方がないから、今作れる最高の物を作ってボロボロになったら作り直そう。
何度か繰り返せば和服のクオリティも上がっていくでしょ。
そうと決まれば急いで食べて作ろっと。
和服のデザインをイメージしながら猿の死体に手を伸ばして口に運ぶ。
そして手に持った猿の死体を見て思ってしまった。
「こんな蜘蛛の糸の塊みたいな場所で女の子が魔物の肉を貪るってどうなんだろう」
流石にこんな場所に蜘蛛の糸で本格的な家を作る気にはなれない。
食べ物も私が食べる量を全部買うとなると大変なことになる。
空腹なら地龍一匹が丸々食べれるし、飽食のストックを考えると足

りない。
「人としての衣食住でまともなのが衣だけとはねぇ」
まあ、いいか。
私、人じゃないし、それに人の目なんて気にしても仕方がない。
ただ、食べ物だけは美味しいものが食べたいなぁ。

き、君は・・・・・・

修行を始めてかなりの時間が経った。
しかし、蜘蛛子ちゃんからの連絡が全くない。
どこで何をしているのかも分からない。
こちらから連絡しても『大丈夫』『しばらく会えそうにない』くらいしか教えてくれない。
蜘蛛子ちゃんのことだから私を巻き込まないようにしてくれているのだろうが、何も教えてくれないのは悲しい。
しばらく会えないというので、私は修行の頻度を減らして町に行く機会を増やした。
魔物に目を潰されたもと冒険者の旅人という設定でいろんな国を回って食べ歩きをしている。
目を糸で作った布で隠し、口の中を見られないように気を付けながら美味しい食べ物を食べ歩いている。
お金？お金ならスキルでいくらでも作れるので問題ない。
恐怖を齎す者も何か聞かれたら昔獲得した称号の影響と言って誤魔化している。
結構雑な設定だと思うが、意外とバレないものだ。
まあ、蜘蛛子ちゃんにバレたら謝るしかないけどねぇ。
経済的な問題に関しては私は人じゃないから知らない。
こんな世界で製造元が分からない硬貨を使っている法が悪い。
「さーて、今日は修行しますかねぇ」
いつものように神重鉛の腕輪を付け、重魔法を複数掛けて下層を歩いて回る。
こんな修行を続けたせいで普段は体が異常に軽く感じる。
そもそもまともに動けないレベルの負荷を常時かけ続けているのがおかしいのだけどねぇ。
それでも最近ではほとんど日常になっている。
そんな日常となった修行で下層を回っていると、私の探知に一匹の魔物が引っかかった。

「!?まさか・・・・・・」
私は出来る限りの全力で走り、探知に引っかかった魔物の場所に急ぐ。
その魔物を目視で確認出来る距離まで近づいて私は動きを止めた。
そして魔物を目視で取られた私はスライム形態に戻り、着ていた服や神重鉛の腕輪などを空納に放り込む。
重魔法や魔神法、神龍力を解除して魔物に近づく。
そして私は転生してから初めて出会ったスライムに念話で話しかける。
『君、生まれたて？』
念話に対して何も帰ってこないので意思の疎通は出来ないようだ。
Ｄの話だとスライムはかなり希少な魔物らしいし、このまま放置してると死んじゃいそうだしねぇ。
取り合えず、食べ物上げればなつくかな？
空納から適当に魔物の死体を取り出して与えてやる。
スライムが私が出した死体を警戒しながらも食べ始める。
それを見ながらどうすれば眷属とかに出来るか考える。
ん～、私の体を一部分けてあげればなれるかな？
まあ、試してみる以外に方法がないし、思いついたことを試していこう。
体の一部を伸ばして切り落とし、スライムに乗せる。
『取り込んで』
伝わらないだろうが、一応念話で話しかける。
すると、スライムの水色の体に私の薄い黒で青系統のグラデーションがかかった体の一部が溶け込んでいく。
魔物を食べる時とは様子が違い、一体化していくようにスライムと私の体の一部が混ざり合う。
そしてシステムが眷属支配のスキルを獲得したことを伝えて来る。
よし、成功したぞ。
さて、君のステータスはどんな感じかな？
《スモールレッサーアストラル・スライム　ＬＶ１　名前なし

ステータス
ＨＰ：１２０／１２０（緑）
ＭＰ：２１０／２１０（青）
ＳＰ：１２４／１２４（黄）
：１２４／１２４（赤）
平均攻撃能力：１５５
平均防御能力：１１０
平均魔法能力：１３２
平均抵抗能力：１２４
平均速度能力：１０５
スキル
『ＨＰ自動回復ＬＶ１』『ＭＰ自動回復ＬＶ１』『火耐性ＬＶ１』『風耐性ＬＶ１』『水耐性ＬＶ１』『氷耐性ＬＶ１』『雷耐性ＬＶ１』『光耐性ＬＶ１』『闇耐性ＬＶ１』『外道耐性ＬＶ１』『重耐性ＬＶ１』『大地耐性ＬＶ１』『凍結耐性ＬＶ１』『酸耐性ＬＶ１』『腐食耐性ＬＶ１』『状態異常耐性ＬＶ１』『衝撃耐性ＬＶ１』『打撃耐性ＬＶ１』『斬撃耐性ＬＶ１』『破壊耐性ＬＶ１』『貫通耐性ＬＶ１』『蜘蛛糸ＬＶ１』『金属生成ＬＶ１』『酸攻撃ＬＶ１』
スキルポイント：２００
称号》
耐性スキル多いなぁ。
そして私の眷属なのに随分とバランスのいいステータスしてるなぁ。
まあ、私が攻撃に特化し過ぎてるだけなんだけどねぇ。
ん～、レベルが低いしレベル上げ手伝ってあげようかなぁ。
このままだと下層で生きていけないしねぇ。
『ついておいで』
念話で私が呼びかけると、スライムは私について来る。
そしてスライムを連れて猿を探して回る。
猿を見つけると、糸で身動きを封じてスライムの前に置く。
『倒して』

私の言葉にスライムは猿を酸攻撃で攻撃し始める。
攻撃力はそこそこ高いおかげで問題なく猿を殺す。
レベルが上がったようだが、１レベル上がった程度では意味がない。
そして猿が殺されたことでやって来た大量の猿を全て糸で拘束する。
上位種だろうが関係なく糸で身動きが取れないように拘束してやる。
かなりの数を殺したあたりでスライムのレベルがカンストして進化が可能になる。
スライムと猿の群れを連れて巣に転移で戻り、スライムに進化するように命令を出す。
流石にアストラル・スライムにはなれないだろうなぁ。
スモールレッサーアストラルってなってたけど、レッサーアストラル・スライムから何に進化出来るんだろう？
取り合えず、進化を終えてレッサーアストラル・スライムに進化したスライムに猿の死体を食べさせる。
限界まで食べたらまた糸で捕らえた猿を殺していく。
今回の群れはそこそこ大きかったおかげでスライムが進化可能になるまでレベルを上げることが出来た。
流石は猿、数だけは多いからレベル上げにはもってこいだねぇ。
さて、次は何に進化するんだろう？
町で買った果物を食べて進化が終わるのを待つ。
スライムの進化が無事に終わったので鑑定をする。
《レッサーアストラル・グレータースライム　ＬＶ１　名前なし
ステータス
ＨＰ：５２０／５２０（緑）
ＭＰ：２１０／６１０（青）
ＳＰ：４２４／４２４（黄）
：１２４／４２４（赤）
平均攻撃能力：６５５

平均防御能力：６１０
平均魔法能力：５３２
平均抵抗能力：５２４
平均速度能力：５０５
スキル
『ＨＰ自動回復ＬＶ６』『ＭＰ自動回復ＬＶ６』『火耐性ＬＶ７』『風耐性ＬＶ７』『水耐性ＬＶ７』『氷耐性ＬＶ７』『雷耐性ＬＶ７』『光耐性ＬＶ７』『闇耐性ＬＶ７』『外道耐性ＬＶ７』『重耐性ＬＶ７』『大地耐性ＬＶ７』『凍結耐性ＬＶ７』『酸耐性ＬＶ７』『腐食耐性ＬＶ４』『状態異常耐性ＬＶ５』『衝撃耐性ＬＶ７』『打撃耐性ＬＶ７』『斬撃耐性ＬＶ７』『破壊耐性ＬＶ７』『貫通耐性ＬＶ７』『蜘蛛糸ＬＶ４』『金属生成ＬＶ３』『強酸攻撃ＬＶ１』『剛力ＬＶ１』『堅牢ＬＶ１』
スキルポイント：１０００
称号
『魔物殺し』『無慈悲』『魔物の殺戮者』》
なるほど、グレータースライムになるわけねぇ。
それに大きさだけなら私より大きく、大体直径二メートルくらいの大きさがある。
これくらい強くなれば下層でも一人で生きて行けるでしょう。
『これからは一人で狩りをするんだよ。後、危なくなったら私を呼びなさい』
分かったという内容の思念が伝わって来た。
どうやら念話は出来ないが、意思疎通できる程度には知能があるようだ。
眷属支配のパスのおかげで居場所は把握できるから救援を受ければ空間魔法でいつでも助けに行けるし、問題ないだろう。
さて、人型になって今日は寝よう。
人型になり、和服を着て寝ようとすると、スライムが近づいて来る。
「なるほど、上で寝ていいと」
スライムの思念を受け取り、スライムの背中に横になる。
ああ、これはとても気持ちがいい。

蜘蛛子ちゃんが私を枕にしていたのはこういうことかぁ。
確かに、これはとても寝心地がいいねぇ。
蜘蛛子ちゃんと一緒に巣で寝ていたころのことを思い出しながら私はぐっすりと眠る。
眠らなくても問題はないが、ずっと寝ていたくなるほど気持ちがよかった。
これからは修行の疲れをスライムの背中で寝て癒そう。
「さて、今日も修行を頑張りますかぁ」
私が巣を出ると、スライムも私とは違う方に向かっていった。
上層なら何の問題もないだろうが、下層ではあの子のステータスでも危ない魔物が居るので気を付けて狩りをして欲しいねぇ。
まあ、危ないなら救援が来るだろうし、召喚で呼び出せばいいか。
いつも通りに猿の群れを潰すが、レベルがかなり高くなったせいで群れを一つ潰してもレベルが上がらなくなってきた。
たまに竜を狩っているが、それでも簡単にはレベルが上がらない。
しかし、これだけ群れを潰しているのになんであの猿絶滅しないの？
けど、流石に最近は群れを見かけるのが減って来た。
あんまり狩り過ぎてもあれだし、次からは見かけたら殺す程度にしておこう。
かなりの期間修行しているけど、蛇程度の魔物も大量に居てくれて修行には困らない場所だよねぇ。
スライムを眷属にしてから私は週に一日程度まで修行の頻度を落としてそれ以外の日は町に行ったり、巣で神金生成で作れる金属で武器の開発などをして過ごした。
そんな日々を送っていると、スライムがさらに進化した。
レッサーアストラル・アークスライムになったことでかなり強くなった。
まだ進化したばかりでレベルが低いがすでに龍より少し弱い程度のステータスがある。
そして直径四メートルほどに体が大きくなった。

「君も大分強くなったねぇ」
心配はいらないだろうけど、私の体もう少し分けてあげようかな。
人型のまま手いっぱいにスライム状態の体を出してスライムに乗せる。
スライムは最初の時と同じようにゆっくりと私の体と同化する。
私の一部を取り込んだことで平均ステータスが四千近くまで上がった。
「うん、これで下層でも大丈夫でしょう」
次に進化する頃にはもっと強くなってるだろうなぁ。
さて、今日はもう寝よう。
大きくなったスライムの背中に乗り、とても心地の良い感触に包まれて眠る。

戦争？と最終進化

のんびりと辛い修行を行う日々を過す。
スライムはアークになったことでレベルの上がりが遅くなっている。
スライムが次に進化するまで時間がかかりそうだなぁ。
私も最近はレベルがあまり上がらないので困っていた。
そんな中蜘蛛子ちゃんから念話が来る。
『スラちゃん、今大丈夫？』
『大丈夫だよ、どうしたの？』
『いやー、実はさぁ。色々あって私が原因で戦争が始まりそうなんだよねぇ』
『え？』
蜘蛛子ちゃんは今まで何をしていたのだろう。
戦争が始まるはまだ分かるが、その原因が蜘蛛子ちゃんにあるというのが分からない。
蜘蛛子ちゃんを討伐しようとするなら分かるが、そういうのとは違うようだし。
本当に何をしたのだろう？
『まあ、色々あったんだよ』
『それで、どうして私に連絡してきたの？』
『私、その戦争で経験値稼ごうと思うんだけど、スラちゃんも参加するかなって』
なるほど、確かにレベルを上げるなら人間を大量に殺すのは効率がいい。
それに最近はレベルの上りが良くないので経験値を大量に稼げるのは嬉しい。
『私も参加する』
『分かった。じゃあ、迎えに行くからエルロー大迷宮の上層で待って』
『はーい』

待っててと言われたが、転移で来るだろうから急いでいった方がいいね。
流石に人型で行くと人の町で食べ歩いてたこととかバレそうだし、スライム形態で行こう。
スライム形態に戻り、スライムに念話を送る。
『ちょっと出て来る。何日か戻らないかもしれないから、巣をよろしくね』
スライムの了承を受け取り、上層の蜘蛛子ちゃんと住んでいた古巣に転移する。
古巣に転移すると、大量の卵があった。
なにこれ？蜘蛛子ちゃんの卵？
蜘蛛子ちゃんも眷属作ってたのかぁ。
そんなことを考えていると、蜘蛛子ちゃんが巣に戻ってくる。
『久しぶり、すぐに戦争に参加するの？』
『戦争始まるの明日ぐらいからかなぁ』
『じゃあ、今日中に戦場の近くに行っておこうか』
『そうだね。実際、いつ始まってもおかしくないし』
『じゃあ、転移よろしく』
『はーい』
蜘蛛子ちゃんに転移してもらって私達は森の中に出る。
近くに人の町があるので、あそこの国とどこかの国で戦争をするのだろう。
『そういえば、どうして戦争の原因が蜘蛛子ちゃんなの？』
『えっと、簡単に言うとあのサリエーラ国が私を神獣って崇めてて、あそこの領主の家に来てたオウツ国の使者を私が殺しちゃったから』
うん、経緯は何となく分かった。
色々言いたいことはあるけど、何となくは分かったよ。
『まあ、色々あったんだね』
『うん、色々あった』
深く考えるのをやめよう。
きっと蜘蛛子ちゃんはこういう子なんだ。

だから、Dが気に入っているんだ。
Dに気に入られるなんて蜘蛛子ちゃん大変だねぇ。
『まあ、戦争の前なんだし、さっさと寝ようか』
『そうだね』
私と蜘蛛子ちゃんは木に簡単に寝れる場所を糸で作る。
そして私が力を抜いて少し潰れると、蜘蛛子ちゃんが私を枕にしてくる。
ああ、そういえば、スライムがいないと私が枕になるのかぁ。
まあ、蜘蛛子ちゃんだしいっかぁ。
そしてすぐに眠りについた私達は次に目が覚めるころにはサリエーラ国の軍が侵攻を始めていた。
私と蜘蛛子ちゃんはその軍について行く。
しばらく、軍について移動していると平野にたどり着いた。
平野の反対側ではオウツ国だろう軍が揃い始めていた。
万を超える軍勢が睨み合い戦争の準備をする中、私は蜘蛛子ちゃんに念話を送る。
『オウツ国の軍を攻撃すればいいんでしょ?』
『うん、サリエーラ国では私神獣様として崇められてるし、吸血っ子もサリエーラ国にいるし』
『ふーん、そうなんだ。じゃあ、私もう攻撃してくるね』
『ああ、分かった』
サリエーラ国もオウツ国も軍隊はほぼほぼ揃い戦争を始めるために陣形などを整えているが、私は気にせずに平野の中央に転移で移動する。
平野の中央に移動した私は超巨大化のスキルで体を最大まで大きくする。
先ほどまで何もなかった平野の中央にいきなり、超巨大化した私が現れたことで両軍はかなり混乱している。
しかし、私に軍の混乱など関係はない。
レベルがカンストするまでオウツ国の軍を殺しつくすだけだ。
家一つを余裕で飲み込めるほどに大きくなった私は腕を伸ばし、オ

ウツ国に攻撃を仕掛ける。
現状の私のステータスはかなり上がっており、人ではまともに対処出来ない力と速度で振り下ろされる腕に軍は何も出来ずに蹂躙される。
大量の経験値が私に入ってくるが、カンストまでには至らないので腕だけでなく暗黒槍の雨を降らせてやる。
万を超える数のオウツ国軍が死んだことで私のレベルはカンストした。
戦闘準備も終わっていない軍が突然現れた私にわずかな時間で五分の一以上の数が何の抵抗も許されずに殺されたことで、先ほど以上に混乱している。
レベルもカンストしたし進化しに帰ろっと。
『蜘蛛子ちゃん、私レベルカンストしたから帰るね』
『ああ、うん。私も進化に必要な経験値稼いだら戻るよ』
『じゃあ、お先に』
何が起きたかまともに把握できず、混乱状態の両軍を置いて私は超巨大化を解除して転移で巣に戻る。
巣にスライムはいなかったのでレベル上げのために下層を回っているのだろう。
まあ、帰ってくるのを待つ必要はないので私は進化を始める。
私が出来る最後の進化先。
『アルティメット・スライム：進化条件：ＬＶ５０のアストラル・スライム、支配者スキル一つの所持：説明：高次元の体を持つ究極のスライム』
説明雑いなぁ。
そして普通の魔物じゃ絶対に進化出来ないだろこれ。
アストラル・スライムだって条件を達成できるスライムがいないって言うのに。
まあ、私は達成したので進化しますとも。
それでは進化。
《進化が完了しました》

《種族アルティメット・スライムになりました》
《各種基礎能力値が上昇しました》
《スキル熟練度進化ボーナスを取得しました》
おや、体がかなり黒くなったなぁ。
体が黒くなり過ぎたせいで、青系統のグラデーションがすごい綺麗に見える。
体の変化も確認できたし、ステータスの確認をしますかぁ。
さて、最終進化でどれだけステータスが上がったかなぁ。
《アルティメット・スライム　ＬＶ１　名前なし（蓮見葵）
ステータス
ＨＰ：２９５６０／２９５６０（緑）
ＭＰ：８６５０／５８６５０（青）
ＳＰ：４８２４０／４８２４０（黄）
：３８０３０／４８２４０（赤）
平均攻撃能力：７８７５０
平均防御能力：３５８４０
平均魔法能力：４０３２０
平均抵抗能力：３９６４０
平均速度能力：３１５６０
スキル
『ＨＰ超速回復ＬＶ１０』・・・・・『天命ＬＶ１０』『天動ＬＶ１０』『富天ＬＶ１０』『城塞ＬＶ１０』『剛毅ＬＶ１０』『天魔ＬＶ１０』『天道ＬＶ１０』『不死』『悟り』『ｎ％Ｉ＝Ｗ』
スキルポイント：１５０００
称号
『悪食』『暗殺者』『糸使い』『魔物殺し』『無慈悲』『魔物の殺戮者』『悟りの支配者』『竜殺し』『恐怖を齎す者』『龍殺し』『魔物の天災』『覇者』『人族殺し』『人族の殺戮者』『竜の殺戮者』『人族の天災』》
おお、進化しただけで全ステータスが１万以上増えた。
スピードもかなり伸びたし、私の弱点がなくなって来たぞぉ。
では、早速ご飯を食べながら作業をしますかねぇ。

人型になり空納から服を取り出して着る。
そして進化で減ったＳＰを回復するために大量の魔物の死体を出す。
もぐもぐと魔物の死体を食べながら最高の和服を作る準備を進める。
これまで作って着た中で最高の品質で作って蜘蛛子ちゃんを驚かせないとねぇ。
蜘蛛子ちゃんの驚く顔を楽しみにしながら時間をかけて丁寧に仕上げていく。
デザインもしっかりと拘って作りこんでいると、スライムが戻ってきたようだ。
帰って来たスライムを息抜きに鑑定してみると、レベルは差ほど上がってないのにステータスがかなり上がっている。
あれ？もしかして私が上位種に進化したから？
一応、私の体の一部を取り込んでるし、無くはないか。
スライムの変化に首を傾げるが、適当な理由をつけて納得して作業を再開する。
先ほどまでとは違い、スライムが戻って来たのでスライムに座り、お菓子感覚で魔物の死体を食べながら作業する。
どれだけの時間が経ったか分からないが、完成した和服に着替える。
糸の最上位スキルで私が作れる最高の強度を誇る糸を使い作り上げた和服。
履物は神珍鉄と糸で作られた下駄。
そして目と口が見えないように顔を覆い、私の方からは透けて見える白い布。
「完璧だね。物語に登場する正体不明キャラみたいでいいねぇ」
作り出した鏡のような金属の前で和服の完成度確認しながらクルクル回ってみる。
かなりの完成度の高い和服に今までの苦労を思いひとしきり喜ぶ。
「さて、蜘蛛子ちゃんに見せびらかしに行こう」

蜘蛛子ちゃんのところに行くことを決めてスライムを撫でてやる。
そして町で買っていた果物を何個か置いて念話を送る。
『しばらく帰らないかもしれないから、巣のことよろしくね』
巣のことをスライムに任せて万里眼で蜘蛛子ちゃんを探す。
あれ？迷宮内にいない？
蜘蛛子ちゃんの子供達はいるけど、蜘蛛子ちゃんがいない。
もしかしてサリエーラ国の方にいるのかな？
サリエーラ国の方を見ると、蜘蛛子ちゃんと一緒に見たサリエーラ国の町が燃えていた。
ああ、もしかして吸血鬼助けに行ったのかな？
じゃあ、私も行こっと。

魔王と新しい呼び名

エルロー大迷宮から転移した私は燃える町の中を歩いて進んでいた。
そこら中で燃える町に泣き叫ぶ人や逃げ惑う人達で溢れていた。
町を襲撃したであろう兵士が私に斬りかかって来たので頭を吹き飛ばして殺し、死体を空納にしまう。
「蜘蛛子ちゃん、また面倒なことに巻き込まれてるんだねぇ」
燃えている町の様子を見ながら万里眼で蜘蛛子ちゃんを探す。
万里眼を使ってすぐに蜘蛛子ちゃんを見つける。
どうやらこの領地の領主が住んでいる館にいるようだ。
「他にも誰かいるし、今回は何をしたんだろう?」
館に向かってゆっくりと歩く私に襲い掛かってくる奴らがいるが、気にせずに殺す。
そしてその死体を空納にしまいながら移動を続ける。
私が館の扉を開けて中に入ると、館の中にいた蜘蛛子ちゃんと黒い少女、吸血鬼と吸血鬼を抱きかかえている男の四人が私に視線を向けて来る。
四人が私のことを警戒しているが、私はそんなことを気にせずに蜘蛛子ちゃんに近づいて手を上げる。
警戒して身構える蜘蛛子ちゃんと黒い少女を無視して私は手を振る。
「蜘蛛子ちゃん、お待たせ」
『・・・・・・!?もしかして、スラちゃん!?』
「そうだよ。驚いた?すごいでしょ、この和服」
蜘蛛子ちゃんは私の変化にかなり驚いているようだ。
ふふっ、苦労して作った甲斐があったね。
蜘蛛子ちゃんの目の前でクルクルと回って和服を見せつける。
『和服って言うより、その姿の方がよっぽど驚いたよ!?え!?人化出来るようになったの!?』
「当然、蜘蛛子ちゃんと美味しいもの食べ歩くのには必要でしょ」

『おお!?けど、私は人の姿なの上半身だけだけどねぇ』
「きっと蜘蛛子ちゃんならすぐに人の姿になれるようになるって」
『ん～、けど、これ以上進化先ないんだよねぇ』
「ああ、じゃあ、スキルポイントで人化のスキル取るしかないねぇ」
『やっぱりかぁ』
私と蜘蛛子ちゃんが話していると、私達の会話に困惑していた黒い少女が蜘蛛子ちゃんに問いかける。
「えっと、知り合い？」
黒い少女の問いに対して蜘蛛子ちゃんは頷いて返す。
蜘蛛子ちゃんの反応を見て私に視線を向けて来るが、私は蜘蛛子ちゃんに問いかける。
「ねえ、この人誰？」
『えっと、簡単に言うと魔王で蜘蛛の魔物の頂点。後、ステータスが平均九万あるから喧嘩売らない方がいいよ』
「え!?」
蜘蛛子ちゃんの言葉に私は蜘蛛子ちゃんと魔王を交互に見る。
蜘蛛子ちゃんがそんな嘘を着くとは思えない。
魔王はどうでもいいとして蜘蛛の魔物の頂点でステータス平均九万？
何それ、化け物じゃん。
もしかして、Dが蜘蛛子ちゃんに彼女ってこの少女のことか。
Dもまた随分と酷い無茶ぶりをしたことで。
まあ、こうやって一緒に居るってことは和解したのかな？
ん～、けど、蜘蛛の魔物かぁ。
「ん～、蜘蛛ってことは蜘蛛子ちゃんだとどっちか分からなくて紛らわしいなぁ。よし、今日から蜘蛛子ちゃんのこと白ちゃんって呼ぶね」
『もしかして色が白いから？』
「そうだよ」
『せめて、もう少し考えようよ』
「シンプルイズベストって言うでしょ」

『ああ、うん。そうだね、もう白ちゃんでいいよ』
どうやら蜘蛛子ちゃんも納得してくれたようなので、今日から蜘蛛子ちゃん改め白ちゃんに改名。
折角だし、私も呼び方変えて貰おうかなぁ。
私も眷属が出来てスラちゃんだと紛らわしいし。
「折角だし、私の呼び方も変えよ。私も眷属のスライムが出来たからスラちゃんだと紛らわしいし」
『ええ、急に言われてもねぇ』
私達の会話に周りはかなり困惑しているようだけど、気にしない。
話があるなら話しかけてくればいいだけだしねぇ。
白ちゃん、すこし考えすぎじゃない？
「シンプルでいいんだよ？」
『じゃあ、青ちゃんで』
「青？・・・・・・ああ、なるほどね」
前世の名前からとったのか。
まあ、見た目も青系統の色結構入ってるし、見た目的にも間違ってないね。
「えっと、そろそろいいかな？」
「ん？いいですけど、どうしたんです？」
「えっと、君はこれからその子と一緒に行動するの？」
「その予定ですけど、どうしてですか？」
「いや、良かったら二人とも私と一緒に魔族領に来ない？」
魔族領ねぇ。
私はどっちでもいいから白ちゃん次第かなぁ。
「白ちゃん、どうする？私はどっちでもいいけど」
『私も行ってもいいけど』
白ちゃんもどっちでもいいかぁ。
お互いどっちでもいいなら、このまま変わらない日常を過ごすより行った方が面白そうだよねぇ。
「じゃあ、行くってことでよろしくお願いします」
「オッケー、これからよろしくね」

魔王が手を差し出してきたので、手を握っておく。
それで満足したようでうんうんっと頷いていて口を開く。
「それで、気になってたんだけど、どうして顔隠してるの？」
「ん？ああ、これですか？」
「そうそう、ずっと布で顔隠してるけど、なんか理由があるの？」
『あ、それ、私も気になる』
魔王の言葉に顔を覆っている布に触れて聞き返すと、白ちゃんまで気になっていたようで念話で問いかけて来る。
私からしたら、白ちゃんが念話でしか喋らないのも気になるけどね。
「目と口の中を見られると人じゃないってバレるからですよ」
二人の前で布をめくり、スライムの体と同じ色をしている目と口の中を見せる。
私の目と口の中を見て二人は少し驚いたが、納得してくれたようだ。
「まあ、バレて騒がれたら国ごと消せばいいんですけどねぇ」
「ああ、うん、取り合えず、分かったよ」
「取り合えず、この町から出ません？」
「そうだねぇ。いつまでもここにいるわけにはいかないしね。君達も一緒においでよ」
私の言葉に魔王が賛成し、この場にいるもう二人に話しかける。
吸血鬼とその従者は戸惑いながらもついて来ることには賛成のようだ。
『食料とか必要そうなもの持ってこうよ』
「ああ、それもそうだねぇ。この館の食べ物持っていくけどいいよね？」
「は、はい、構いません」
「じゃあ、遠慮なく」
従者の許可を貰ったので私と白ちゃんで館にある食料や調理器具などを全て空納に放り込んでいく。
食料と調理器具の回収が終わると、館から出て町の外に出る。

燃えている町が見える丘まで移動して、これからについて改め話し合うことになった。
魔王と吸血鬼達が転生者について話しているが、特に興味が無かったので白ちゃんに話しかける。
「白ちゃん、どうして喋らないの？」
『青ちゃん以外に人がいるから、何となく』
「折角なんだし、喋ろうよ。どうせ念話だって盗聴されるんだし」
「・・・・・・まあ、頑張る」
「うん、これから慣れて行こうねぇ」
私と白ちゃんが話していると、魔王達も話し終わったのかこちらに近づいて来る。
「話は終わったんですか？」
「青ちゃん、話聞いてなかったの？」
「はい、全く。彼女達の関係性とか興味ないですし、エルフのことも興味ないので」
「エルフが何をしてるのか知らないの？」
「知りませんよ。けど、禁忌の元凶とかそんなところでしょう」
「え？知ってるの？知らないのどっち？」
私の言葉に魔王が困惑しているが、何を困惑しているのか。
今知らないと言ったじゃないか。
「知らないです。ただ、何をしてるのか予想できるってだけですよ」
「禁忌のことやエルフのこと分かってるなら何で興味ないのさ。世界が滅ぶかもしれないんだよ？」
「そんなすぐには滅びませんよ。本当に邪魔なら潰せばいいだけですしねぇ」
「随分はっきりと言い切るね。ポティマスをそんな簡単に潰せるとでも？」
私の言葉に魔王は人が変わったように真剣な顔で私を見て問いかけて来る。
冗談抜きで真面目に答えろという雰囲気を感じたので、少し考えて返す。

「そうですねぇ。そのポティマスがエルフの族長なんでしょうけど、そいつ、心底臆病で器が小さいようですから、何重にも保険をかけているでしょう。それもＭＡエネルギーを利用したシステムに頼らない保険がかなり多いでしょうね。しかも自分の技術以外何も信用してないでしょうし、守りを崩して保険を一つ一つ潰すのは骨が折れることでしょうねぇ。まあ、簡単に潰すのは無理な相手ですよ」
　ついでに、どこぞの邪神が簡単に潰せないように干渉してくるでしょうしねぇ。
　本当に潰そうと思うと骨が折れそうな相手だなぁ。
「青ちゃん、エルフについてどこまで知ってるの？」
　ポティマスとかいう世界の害悪について考えていると、白ちゃんが首を傾げて問いかけて来る。
「ん？ほとんど何も知らないよ」
「え？」
「私が知ってるのは、エルフの里が強力な結界で覆われていることとエルフが長寿であることくらいだね」
「それだけ？本当に？」
　白ちゃんは何をそんなに驚いているんだろう。
　いや、白ちゃんだけじゃないね。
　魔王もなんかあり得ないと言いたげな顔で私のことを見て来る。
「二人ともどうしたの？」
「確認だけど、青ちゃんはポティマスのこと知らないんだよね？」
「魔王から聞くまで名前も知りませんでしたよ。ついでに、エルフの知り合いもいません」
「じゃ、じゃあ、なんで、そんなにポティマスの性格が分かるの!?」
　そんな驚くようなことは何もないでしょうに。
「しっかりと考えれば分かることでしょう」
「考えれば分かるって、そんな・・・・・・」
「まあ、そんなことは置いといて、これからどうするんです？」
「そんなことって」
「今話してもどうにもならないことなんて置いておきましょうよ。今

日すぐに移動するのか、今日はここらで休んで移動するのかを決めません」
ポティマスをどうするかなんてゆっくり考えればいいことは後にすればいいでしょうに。
「ああ、そうだね。今日はここで休んで、明日からサリエーラ国の首都を目指そう」
「じゃあ、休むために色々準備しましょうか」
まだ、何か聞きたいような魔王を置いて私は糸でベッドを作り始める。
白ちゃんも一緒に寝るだろうし、少し大きめに作ろう。
私がベッドを作っている間に白ちゃん達もそれぞれに行動し始めた。
思ってた以上に大人数で旅をすることになりそうだなぁ。

暇つぶしの英才教育とスパルタ特訓

太陽の光が木々に遮られた獣道を進む私達。
アラクネになった白ちゃんの蜘蛛の背中に乗せてもらい人型の白ちゃんに抱き着いて同行メンバーを見る。
魔王で蜘蛛の魔物の頂点に立つ黒い少女、アリエル。
フード付きローブを来て息を荒くして辛そうな吸血鬼の男、メラゾフィス。
そして現在進行形で死にそうな顔で虫の息の赤ん坊で転生者のソフィア。
「本当に変なメンバーだよねぇ」
「それには賛同するけど、あんまり体触らないでくれる？青ちゃん」
「そんなにベタベタ触ってないでしょ。ちょっとしたスキンシップくらいだよ」
「この胸を揉んでる手は何？」
「揉むくらいいいでしょ？」
「ダメ」
白ちゃんの胸を揉んでいた手を掴まれて外される。
「ええ、触り心地いいんだから、少しくらいいいじゃん」
「青ちゃんにも立派なのがついてるでしょ」
「白ちゃんほどじゃないよ」
「ダメなものはダメ」
「はーい」
もう少し揉んでいたかったけど、これ以上は怒られそうだし仕方ないねぇ。
『青、セクハラしてないで助けなさいよ』
「セクハラとは失礼な。ただのスキンシップだよ」
『どうでも、いいわよ』
白ちゃんに糸で操られ、まともに歩けない赤ん坊でありながら無理矢理歩かされてるソフィアから念話で助けを求められる。
「大丈夫だよ。死ぬ寸前まで行っても死にはしないから」

『なんで、あんたは歩かないのよ！』
「え？私の定位置ここだし」
『意味わかんないわよ』
意味が分からないと言われても、白ちゃんと一緒に行動する時は基本的に白ちゃんの背中に乗って移動してたしねぇ。
それに白ちゃんの許可も貰ってるから何も悪くないでしょ。
「弱音や文句言ってないで頑張りなよ。君の従者も頑張ってるんだから」
私がソフィアの従者であるメラに視線を向ける。
白ちゃんがソフィアを鍛え始めたので、私はメラを育てることにしたのです。
といってもソフィアに比べて成長速度は遅いが、主であるソフィアを守れるように強くなろうと真面目に頑張っているので、厳しい訓練を施している。
私とソフィアの会話が聞こえているだろうに返事をして来ないのが良い証拠。
重魔法を掛けているのでまともに歩くだけでもかなり辛いせいで返事をする余裕がないんでしょうねぇ。
まあ、動けなくなるとソフィアと同じで私が糸で動かすんだけどねぇ。
「分かったら死ぬ寸前まで歩く」
『分かったわよ!?』
まあ、実際は私達の暇つぶしなんだけどねぇ。
ＨＰが減り始めたら私が奇跡魔法で強制的に回復させ続けてるから死にはしない。
死ぬほど辛いだろうけど、死にはしない。
それでもＳＰがなくなる前には休憩をする。
そろそろ休憩するためか、白ちゃんが糸を回収したのでソフィアがバタンと倒れる。
倒れたことでＨＰが減ったが、私がすぐに全快させる。
「お嬢様!?お嬢様！聞こえていらっしゃいますか!?」

メラがソフィアのことを抱きかかえて心配しているが、死んでないので放っておいて大丈夫でしょう。
「白ちゃん、火の準備お願いね」
白ちゃんが日の準備をしている間に私は空納から食料を取り出して下準備を始める。
一人で修行をしている頃に町へ行った際に、飲食店の調理を見ていたので問題なく出来る。
調理器具はソフィアの実家から貰って来たものがあるし、無ければ作ってしまえばいい。
白ちゃんが用意してくれた火を使って手早く料理を作り配る。
ソフィアとメラの料理には白ちゃんが毒を入れ、二人に悪食の称号と耐性のレベル上げを行う。
「青様、お嬢様にもまともな食事を出してはいただけませんか？」
「む、毒が入っているだけでまともな食事だよ。毒の苦みを上手く利用してるんだから、味は悪くないはずだよ」
まあ、毒抜きの方が美味しいのは確かだけど。
「毒が入っている時点でまともではないかと思うのですが」
「美味しくて耐性上げれて称号貰えるんだからいいでしょ」
『メラゾフィス、いいわ。何言っても無駄よ。味がまともなだけましよ』
最初に白ちゃんが作ったのは毒のある肉焼いただけだからねぇ。
私からすれば焼いてるだけまともだけど、二人にとってはまともではないようねぇ。
白ちゃんは私の作った料理を嬉しそうに食べているので、もう一人に私が料理を渡す。
「ありがとー」
アリエルさんは私の料理を受け取ると、白ちゃんと同じように美味しそうに食べる。
私も自分が作った料理を食べ始める。
「そういえば、青ちゃんはポティマスのことどう思ってるの？」
「何とも思ってませんよ。会ったこともないですし、私の邪魔してく

るなら潰すかなってくらいです」
「ふーん、そうなんだ。けど、白ちゃんはポティマスに殺されかかってたよ？」
「え？」
　何それ、私聞いてないんだけど。
　アリエルさんの言葉に白ちゃんを見ると、話を聞いていたのか頷くだけで返してくる。
「へー、ふーん。じゃあ、潰さないといけないねぇ」
　けど、一朝一夕で潰せるような守りじゃないんだよねぇ。
　はあ、時間はかかるけど確実に潰す道を選ぶしかないねぇ。
「なら、私と手を組まない？私もポティマスを殺したいんだよねぇ」
「いいですよ。けど、アリエルさんが居てもポティマスを潰すには戦力が足りないんですよねぇ」
「私が協力しても潰せないの？」
「無理でしょうねぇ。エルフを潰すだけならアリエルさんの力を借りなくても出来ますけど、ポティマスを潰すにはアリエルさんが居ても無理ですよ」
　アリエルさんが目を見開いて固まるが、実際に無理なのは分かり切っているだろうに。
「アリエルさんが加わって潰せる程度の相手なら、アリエルさん一人で倒せてますよ」
「ポティマスを潰せないのはいいとしても、なんで、エルフは潰せるの？」
「里への侵入方法は簡単に思いつきますし、エルフが使っているのは機械兵器ですからねぇ。機械兵器は使い方さえ分かれば誰でも使えるんですよ」
「あはは、普通は里への侵入が出来ないんだけどねぇ」
　アリエルさんが呆れて苦笑しているが、呆れるほど難しいことではない。
　侵入だけなら意外と簡単に出来るのは事実だ。
　後は情報を集めて機械兵器を利用して結界内で暴れまわれば一瞬

でエルフは壊滅する。
誰にも居場所を教えていないであろうポティマスは生き残るだろうが、それ以外は全滅すること間違いなしだ。
「まあ、エルフは準備を整えてから潰しましょう。あまり追い詰めすぎると、余計にポティマスを潰しにくくなるので」
「ああ、うん。方法は任せるよ」
アリエルさんが何か諦めたような顔をしているが、全員が食べ終わったので移動と訓練を再開する。
しっかりと、メラを鍛えないとねぇ。
ステータス平均万越えを目指して頑張ろうねぇ。
簡単に食器を片付けて白ちゃんの背中に乗る。
白ちゃんに抱き着きながらメラに重魔法を掛ける。
重くなった体を必死に動かして歩くメラを見ながら訓練内容を考える。
取り合えず、メラには魔闘法と気闘法を習得してもらいたいねぇ。
魔力の訓練は神珍鉄を使えば出来るけど、魔法はスキルを取って貰わないといけないんだよねぇ。
実際に私も重、外道、闇の三つしか使えないしねぇ。
私の場合、魔法と物理攻撃が効かないなら腐食攻撃で消し飛ばせるから、必要ないだけだけどねぇ。
メラの腐食耐性を上げるために私が腐食攻撃で殴ったら確実に死ぬから無理だよねぇ。
成長が遅いから殺すつもりでやるしかないねぇ。
「これは強くなるのに時間がかかりそうだねぇ」
「まあ、始めたばかりだしねぇ」
「負荷倍にしたら死んじゃうかな？」
「死にはしないだろうけど、動けないんじゃない？」
「ん～、鍛えるのって難しいねぇ」
「私や青ちゃんは成長系のスキルがあったからねぇ」
「成長系スキルってすごかったんだねぇ」
まさか、ここまで成長が遅いとは思わなかった。

けど、鍛えるならメラが動けるギリギリまで負荷を上げないとねぇ。
重魔法を調整してメラにかけると、メラからうめき声が聞こえたが気にしない。
先ほどより、進むのが遅くなったが動けるようなので問題ないだろう。
空納から果物を取り出して、白ちゃんに見せて問いかける。
「白ちゃん食べる？」
「食べる」
白ちゃんに一つ渡して、私の分も取り出して食べる。
メラの鍛え方を考えながら白ちゃんの蜘蛛の背中をもふもふする。

蜘1　頼もしい味方

吸血っ子とメラを助けた後、魔王と休戦した。
その後、青ちゃんを入れて魔王達と魔族領を目指すことになった。
青ちゃんはいつの間にか人化出来るようになっているし、ポテイマスとかいう奴のことを実際に会った私より良く分かってるしでかなり驚いた。
そしてステータスも平均攻撃力とスキルだけなら魔王にだって負けないほど強くなってる。
というか、マザーを取り込んだ私とステータス対して変わらないってどうなの？
むしろ、スキルは私より高いって何？
やっぱり、悟りの効果バグってるでしょ!?
いくら修行してたからって上がり過ぎじゃない？
まあ、青ちゃんは味方だからいいんだけどね。
私の背中に座り、私に抱き着いている青ちゃんに視線を向ける。
何度注意してもセクハラのような行為を繰り返す青ちゃんに諦めつつも注意する。
「セクハラやめようよ、青ちゃん」
「セクハラじゃなくて、スキンシップだよ」
いつも通りスキンシップだと言い張り、青ちゃんに呆れる。
青ちゃんに触られるのは嫌じゃないけど、いろんなところを触ってくるのでくすぐったくてしょうがない。
髪を触ったり、抱き着いて来るだけならいいのだが、本当に気まぐれで色んなところを触ってくるのだ。
それこそ蜘蛛の部分でも関係なく。
スライムだったころはそんなこと無かったんだけどなぁ。
しばらく会わない間に何かあったのかな？
まあ、考えても仕方ないかぁ。
青ちゃんの考えは前からよく分からない。
そして興味が無い相手に対しては怖いほど無慈悲だ。

サリエーラ国とオウツ国の戦争の時も戦う準備が整っていないオウツ国側の軍に対して容赦なく攻撃を仕掛け、軍の五分の一を殺してさっさと帰ってしまうほどに他人に興味を持たない。
私の記憶だと前世の青ちゃんは見た目が綺麗なことを除けば普通の女子高生だったはずだ。
得意不得意もなく平均的な学力に、平均的な運動神経、孤立はしないものの特別仲の良い友達はいない。
外見以外で本当に目立つことのない普通の女子高生だったはずなのに。
メラのうめき声も気にせずに動けるギリギリまで重魔法を強める青ちゃん。
どう考えても前世とは別人だ。
いや、他人に興味が無いのは前世から変わってないかな。
どのみち人を殺すことに何の感情も抱かないような子には見えなかった。
私が知らないだけで裏ではそうだったのかもしれないけど、どう考えても変わり過ぎだ。
これまでの青ちゃんを思い返して考えるのをやめる。
私も人のこと言えなかったわ。
まあ、仲良くなってみないと分からないこともあるよね。
今は他に考えなきゃいけない問題があるしねぇ。
吸血っ子を狙ってるエルフに、一緒行動してる魔王について考えないとねぇ。
魔王に関しては私の不死性の秘密を知られて対策されない限り大丈夫だなはずだ。
不死のスキルならともかく卵復活に関しては青ちゃんにも教えていない。
青ちゃんなら気づくかもしれないが、魔王に教えることはないだろうから問題ない。
エルフの方はポティマスがやばい。
強かったし、機械だったし、スキルもステータスも封じてられたし。

ポティマスに狙われてる吸血っ子と一緒にいるから襲撃される可能性がある。
まあ、ポティマスが襲ってきても大丈夫なように魔王と一緒に行動しているんだけどねぇ。
私と青ちゃんだけだとポティマスに勝てるか分からないしねぇ。
エルフや魔王のことを考えていると、吸血っ子が限界を迎えそうだったので糸を外す。
吸血っ子が顔面から倒れるのを見て青ちゃんもメラにかけていた重魔法を解除する。
そして二人に奇跡魔法を掛けてＨＰを回復させる。
「白ちゃん、火の準備お願いね」
青ちゃんに頷いて返し、適当な枝を糸で集めて糸ごと火魔法で燃やす。
私が準備した火を使って青ちゃんが料理を作って皿に盛り付ける。
吸血っ子とメラの料理には私が毒合成で毒を作って混ぜる。
そして青ちゃんが私用に多めに料理が盛られた皿を渡してくれる。
いやぁ、青ちゃんの料理は本当に美味しいよねぇ。
青ちゃん、料理も出来たんだねぇ。
迷宮では調理と言っても調味料が無かったから焼くか、生のどっちかだったから知らなかったよ。
青ちゃんは魔王に皿を渡して自分の分を食べ始め、魔王とエルフについて話している。
私がポティマスに殺されかけた話題になると、青ちゃんが驚いてこちらを向く。
私は青ちゃんに頷いて返すと、エルフを潰すと言い出した。
私のためにエルフを潰してくれるなんて、青ちゃんは優しいねぇ。
けど、青ちゃんが魔王と手を組んでもそう簡単に潰せる相手ではないみたいだねぇ。
ポティマスは無理だけど、エルフは魔王抜きで潰せるとか、青ちゃんすげぇ。
魔王も青ちゃんのエルフ潰せます発言に驚いてるし。

まあ、簡単に潰せるならすでに魔王が潰してるよねぇ。
青ちゃんと魔王に任せておけばエルフも大丈夫そうだねぇ。
食べ終わると、青ちゃんが片付けをしている間に吸血っ子に糸を巻き付ける。
片付けが終わった青ちゃんが背中に乗ったのを確認して移動を開始する。
青ちゃんはメラに重魔法を動けるギリギリまでかけていく。
どうやらメラの成長が遅いのが気に食わないようだ。
青ちゃん、私達と同じ勢いで全員が成長するわけじゃないんだよ。
私や青ちゃんレベルの成長を期待されてるメラが少し可哀想だが、気にしてもしょうがないね。
メラに魔闘法と気闘法を習得させたいと言っていたが、習得したらさらに負荷を上げる気なんだろうし。
赤ん坊なのに無理矢理歩かされてる吸血っ子と変わらないくらいの拷も、ゲフン！、調教を受けている。
青ちゃんはもっと厳しくしたいようだが、サリエーラ国の首都に向かうのが目的のため移動があまり遅くならないように手加減はしているようだ。
それでもメラが動けなくなれば糸で無理矢理動かしているので、限界をギリギリまで追いつめられるのに変わりはないようだけど。
そんな過酷な訓練を施している本人は私の背中に乗って一歩も歩いてないけどねぇ。
まあ、背中に乗ること許してるのは私なんだけどねぇ。
青ちゃんを背中に乗せるのはいつものことだし、青ちゃんの機嫌がいいと美味しいものが食べれる。
いやぁ、青ちゃん乗せてるだけで美味しいもの食べれるなんて楽でいいねぇ。
けど、どこで果物とか手に入れたんだろう？
まあ、なんでもいっか。

魔改造って楽しいよねぇ

現在、私と白ちゃんは町の外で待たされている。
アラクネで明らかに人でないと分かる白ちゃんはともかく、私まで町の外にいるのは白ちゃんが一人だと可哀想だと思ったから一緒に残ることにしたのだ。
そして私達が変なことをしないためにか、アリエルさんが監視役として置いて行ったパペットタラテクトこと人形が四体。
正直、監視役が居ようが居まいが、どうでもいいためいつも通り過ごしている。
料理を作って皿に盛り付け白ちゃんに渡す。
「はい、白ちゃん」
「あちがと、青ちゃん」
白ちゃんに渡した後は、人形達にも渡してあげる。
「はい、あなた達も」
料理を渡してあげると、人形とは思えない女の子らしい仕草で戸惑う。
それでも出された料理はしっかりと食べ始める。
意外と女の子らしい仕草をするものだねぇ。
まあ、取り合えず、私も食べよっと。
居残りしている私達が、料理を食べ終わる。
そして私は食器の片付ける。
「白ちゃん、少しエルロー大迷宮に戻ってくる」
「ん？迷宮でなんかあったの？」
「眷属が進化したみたいだから、様子を見に戻ってくるだけ」
「ああ、なるほど。行ってらっしゃい」
「行ってきまーす」
白ちゃんに迷宮に戻ることを伝え、私は下層で作った巣に転移する。
巣に戻ると、アークのころよりさらに大きくなったスライムが待っていた。

アークスライムから進化してキングスライムになったようだ。
「大分大きくなったねぇ」
スライムを撫でてやりながら鑑定する。
キングになったことで平均ステータスが1万になっているが、最後に会った時からそこまで伸びていない。
やっぱり、このくらいの伸び方が普通なのかなぁ。
私や白ちゃんのような異常な成長をする方がおかしいのだと、割り切る。
そしてスキルに分裂があることを見つけて眷属が増えたのか、周りを見てみる。
私が周りを見渡すと、三匹ほど小さなスライムが出て来た。
三匹ともスモールレッサーアストラル・スライムとなっているので、まだ生まれたばかりなのだろう。
私に近づいて来た三匹を抱きかかえて撫でまわしてやる。
この子達とも一応眷属としてパスは繋がっているようなので、喜んでいることが伝わってくる。
キングに縋りスライム達を満足するまで撫でまわす。
一通りなでて満足した私はスライム達を置いてキングを撫でてやる。
「この子達をしっかりと育ててあげるんだよ」
キングにスライム達をしっかりと育てるように言い聞かせ、私は転移して白ちゃん達の元に戻る。
私が戻ると、白ちゃんは人形達を改造している最中だった。
「何してるの？」
「ん？この子達もっと可愛く出来ないかなぁって」
「ふむふむ、なるほど」
確かに、仕草は女の子みたいだったしねぇ。
いいかもしれない。
「私も手伝うよ」
「よし、一緒に改造しよう」
「まかせて、魔改造して上げる」

私の言葉に人形達は戸惑っているが、気にしない。
まず、強度を上げるために体を関節の動きを阻害しないように神珍鉄でパーツごとに覆っていく。
神珍鉄で覆う作業が終われば、人の肌を糸で再現して動きを阻害しないように全身を覆う。
髪や目に指先まで白ちゃんと協力して作りこんでいく。
四体とも同じ見た目では区別がつかないので、それぞれの外見を変えて作る。
人形がぱっと見人にしか見えなくなってくると、服を着せてないのは流石に問題なので服を作ってやる。
徹夜で作業を続ける私達だったが、そんなのは気にしない。
私も白ちゃんも寝なくても問題ないため、徹夜で人形達の魔改造を行っていく。
朝日が昇り、町からアリエルさん達が戻ってくる。
「おかしいなー？いつのまにか別嬪さんが増えているぞ？」
アリエルさん達は人形達の変化に驚いている。
私と白ちゃんが徹夜で魔改造したことにより、見た目は完全に人間の女の子だ。
見た目だけでなく、人形達の体は私が神珍鉄を利用して魔改造したことで強度も格段に上がっている。
神珍鉄の強度は魔力を流して形を変える以外では本当に恐ろしい強度を誇る。
攻撃力が3万以上ないと砕くことは出来ない。
そんな神珍鉄を皮膚の下に仕込んでいるため、まともな攻撃では倒すことは不可能なレベルだ。
可愛らしい見た目になったことで人形達も喜んでいるようなので文句なしだね。
「白ちゃんと一緒に魔改造した」
「魔改造って、何したの？」
「それは企業秘密。人形達も喜んでいるし、問題はないでしょ」
「まあ、それはそうだけど」

けど、折角区別できるように見た目を分けたのに人形だと誰が誰か分からないなぁ。
「折角だし、区別するために名前を付けよっか」
「いいねぇ。何て名前にする？」
「そうだねぇ。α、β、γ、Δとかは？」
「青ちゃん、その名前はどうかと思おうよ」
「そう？じゃあ、何て名前つける？」
例題を上げたら白ちゃんにジト目で呆れられた。
そんなに変な名前ではないと思うのだけれど。
白ちゃんと名前について話していると、アリエルさんが慌てて名前を付けてしまった。
別にそんなに慌てて名前を付けなくてもいいと思うのだけど、そんなに私のネーミングセンス酷かったかなぁ。
まあ、アリエルさんが名前を付けたので、私は白ちゃんの背中に乗る。
そしてメラに重魔法を掛け、白ちゃんがソフィアに糸を巻き付けて移動を開始する。

メラが魔闘法と気闘法を使えるようになった。
移動中に魔闘法と気闘法を使って修行していると、休憩の回数が増えるのでやっていない。
そしてメラが昼間に弱ってしまうので、移動を夜にして昼間は移動せずに修行している。
といってもずっと修行していては動けなくなるので、出発前の一時間は休憩させている。
修行の内容は魔闘法と気闘法を使わせて重魔法の負荷の中で筋トレをさせている。
筋トレが終われば私が神重鉛で作った剣で素振りをさせる。
その後、そこらの石を拾って手加減して大量に投げつける。
石を剣で落とせなければ大ダメージだが、石が当たった瞬間に私が全快させるので死ぬことはない。

魔法を使えるようになれば、自爆させて耐性と魔法のレベルを上げさせられるのにねぇ。

何か月か旅をしている間に色々なことが変わった。
白ちゃんとアリエルさんは最初のギスギス感が薄れてきた。
たまに軽口や牽制をしている程度なので問題ないでしょう。
ソフィアは相変わらず白ちゃんに強制的に鍛えられているため、それなりに強くなった。
メラは日増しに表情が曇っていく。
そのため辛気臭い表情が常に浮かぶメラに対して、白ちゃんがイライラしたり、ソフィアもメラとどう接していいのか悩んだりと、微妙な空気になっている。
人形達は幾度もの魔改造を経たことで、見ただけでは人形だと気づかれないほどになり、個性も明確に表現するようになった。
そしてアリエルさんが召喚で呼んだり戻したり繰り返していたのだけれど、今では常に４人全員が呼び出されたまま、一緒に旅に同行している。
色々変わったことがあるが、そのほとんどが私にはどうでもいい日常でしかない。
けど、メラのことだけは見過ごせない。
別にメラが思い悩もうがどうでもいいことだ。
生きているのだから思い悩んで答えを出せばいいが、白ちゃんに影響が出るならどうにかしないといけない。
どうせ失った物や吸血鬼としての生き方に悩んでいるだけ、くだらない。
そんなくだらないことで思い悩めるなんて・・・・・・
取り合えず、思い悩む余裕がなくなるまで修行で追い詰めよ。
その後に分からせてやればいいのだ。
どれだけくだらないことを思い悩んでいたのか。
そして私としては一番重要なこともこの何か月かであった。
それは私と白ちゃんの武器を作ったことだ。

白ちゃんの前足の鎌と私の神金生成で作れる最高の金属の神鉄鋼を利用して作ったお揃いの大鎌。
神鉄鋼は神珍鉄以上に魔法の触媒として優れており、神重鉛と違い魔力を貯蔵しても重くなることはない。
その上、大量の魔力を込めることで重さ形を魔力を込めたものの思いのままに調整できる。
そして貯蔵した魔力を魔法やスキルとして放つことも出来る優れもの。
よく分からないうちに特性がついていたが、気にしたら負けだと思う。
『蜘蛛の大鎌：
攻撃力：２５０００
耐久力：９９９９９
貯蔵量：９９９９９
特性：『自動成長』『自動修復』『腐食属性』『闇属性』『魔力貯蔵』』
本当によく分からない性能をしている。
しかも、貯蔵した魔力を利用して攻撃力を一時的に引き上げられる。
私や白ちゃんは魔力は回復速度も速いので普段貯蔵しておいていざという時に解き放てる。
大鎌が持っている腐食属性と闇属性に上乗せして、私達の持っているスキルの攻撃も乗せられる。
魔力を解き放って行われる攻撃力がカンストした腐食攻撃は大鎌の能力を理解した白ちゃんがアリエルさんに試していた。
あのアリエルさんが全力で躱していたので、当たればアリエルさんでも死ぬ可能性があるみたいだ。
むしろ、死なないのは私や白ちゃんだけかもしれない。
白ちゃんがアリエルさんで試した後に、二度とそんな危ない武器を作らないでくれと涙目でお願いされた。
槍と刀と投げナイフを作ったらやめますねっと返したら全力で却下された。

そんなに怖かったのだろうか？

お酒には気を付けようね

ある日、町に行ったアリエルさんが大量の酒を買って戻って来た。
「今日は気分を変えて、お酒行ってみよう！」
最近、メラの影響で微妙な空気になってるからかな？
だからって、樽単位で買ってくるかな？
「ほい、白ちゃんと青ちゃんも」
まさか、私達全員で飲むために買って来たのか。
アリエルさんに手渡されたお酒の入ったコップを見ながら考えていると、隣で白ちゃんが飲み干してしまった。
まあ、折角だし飲んでみますか。
初めて飲むお酒の味はどんなものかねぇ。
手渡されたお酒を一気飲みする。
そこから脳が麻痺したような感覚と共に思考に靄がかかったような感覚に陥った。
思考がまとまらないことを少し不快に感じたが、何となく心地よい感覚を抗うことなく受け入れた。
頭がフワフワする。
あはは、なんか少し楽しいかも。
「おかわり」
近くにあった酒樽を取り、空になったコップにお酒を注ぐ。
注いだお酒を一気に飲み干してはまた注ぐ。
「まだまだあるからねー！」
アリエルさんも私以上のペースでお酒をコップに入れるとすぐ一気飲みして、あっという間にお酒が入った樽を空にしている。
アリエルさんペース早いなぁ。
「ふふっ、ふふふ・・・・・・」
白ちゃんもお酒を飲んで気分が良くなったようだ。
白ちゃんもアリエルさんに対抗して早いペースでドンドン樽の中身を少なくしていく。
お酒に慣れていないせいか、顔を真っ赤にして目をぐるぐる回して

いる。
　そしてテンションがいつもより高い。
「あはは、白ちゃん、顔真っ赤！」
　目がぐるぐるしてる。
　ソフィアはお酒を一口飲んで倒れている。
「う、うぅぅ・・・・・・」
　そしてメラゾフィスが泣いている。
「あははあはははは、メラが泣いてる！」
　おっかしいの！メラ、泣いてる！
　腹を抱えて笑う私とは別に、白ちゃんは無理矢理メラにお酒を飲ませる。
　無理矢理飲まされて慌てるメラ。
　それを見て私と白ちゃんはケラケラと笑う。
「ゲホッ、ゲホッ！」
　あははあはははは！メラが怒ってる！
　おっかしいの！バッカみたい！
　睨まれた白ちゃんは、のほほんと笑って返す。
　同じく睨まれた私は、腹を抱えて笑い転げる。
「うん、そっちの方がいい顔だぁ。ウジウジしてるよりよっぽどマシ」
「あなた達に・・・・・・、何がわかるッ！」
「あはは！怒ってる怒ってる！」
　メラの怒鳴り声に対して私は腹を抱えて笑いながらお酒を飲む。
「何もかも失って、その上吸血鬼になってしまった私の気持ちが、あなた達にわかるか!?」
「うるさい！」
「ぐぅ!?」
　私の重魔法でメラが倒れる。
　大の字で地面に倒れたメラは修行の時以上に強力な重魔法に立ち上がることが出来ずに這いつくばっている。
　そんなメラに近づいて私は頭を掴んで持ち上げる。
「メラ、何馬鹿なこと言ってんの？」

「馬鹿なこと!?・・・・・・、あなたに私の何がわかる!?」
「分かんないよ。そんなくだらないことで思い悩んでる、メラの気持ちなんて分かるわけないでしょ?」
「なら!?」
　私の言葉を聞いて何か言おうとするメラの顔を無理矢理ぶっ倒れているソフィアに向ける。
「何もかも失ったって言ってるけど、あれは?」
「!?」
「あれは、メラにとって大切なものにすら入ってないの?」
「そんなことは!?」
　何か言おうとするメラの頭を手放して落とす。
　地面に頭を打ち付けられて言葉が途切れるが、構わず私は続ける。
「吸血鬼になった程度で、あれを守ることを諦めるの?」
「吸血鬼になった私の気持ちなんて・・・・・・」
「はあ、メラの信念はその程度なんだ」
「!?」
　メラにかけた重魔法を解除し、お酒の樽を持って白ちゃんの背中に乗る。
　そしてコップに入れずに樽のまま飲んでメラに視線を向ける。
「私はスライムだし」
「私は蜘蛛だよ」
「ちょっと、生き方が変わった程度で揺らぐ程度の信念なら捨てちゃえば?」
「そんなに嫌なら死ねばいいじゃん」
「メラが望むなら私達が殺してあげるよ?」
　メラが答えを出すまでの間、私はお酒を飲み続ける。
「死ねない!私はお嬢様のためにも死ぬわけにはいかない!」
「生きる意味とか、誇りとか信念があるなら何迷う必要があんの?吸血鬼になったらそれに影響あんの?ないならそんなの些事だよ些事、くだらない」
「あははあはははは!!」

白ちゃんの言葉に悩みを一刀両断されたメラが崩れ落ちる。
それを見て私は声を上げて笑う。
「メラ、強くなりたい？」
「はい、お嬢様をお守りするために強くなりたいです」
「そっかそっか！」
強くなりたいんだ。
「けど、あれ、君よりずっと早く成長して強くなるよ」
「!?」
メラの驚いた表情を見て私は笑う。
何がおかしいのか分からないが、腹を抱えて笑い続ける。
「これまでの修行だと、君はあれより弱いままだよぉ。どうする？」
「お嬢様をお守り出来るだけ、強くなる方法があるのですか？」
「それは君次第だよぉ。ずっと死に続けるような、辛い辛い修行なんだけどぉ。やるぅ？」
「お嬢様のためなら、やらせてください」
「あはははは！いいよ！死ぬ寸前、ギリギリまで追いつめてあげるよぉ」
メラの答えを聞いて私は腹を抱えて笑う。
お酒の樽を一つ空にし、腕を伸ばして別の樽を取り飲み始める。
あはははは！明日からが楽しみだねぇ。
これで容赦なく鍛えられるよぉ。
「白ちゃん、柔らかくて気持ちぃ」
特に、この胸が良いよねぇ。
大きくて、柔らかくて、程よく弾力があって。
あの子達に似てて、ずっと触ってたくなるくらい触り心地が良いよねぇ。
新たに取った樽も飲み干して白ちゃんの体を触り続ける。
そんな私の和服の襟をつかんで持ち上げた白ちゃんは、私の両手を背中でまとめると糸で拘束する。
私を拘束した白ちゃんは私が空にした樽に糸で貼り付けにする。
「白ちゃん？」
「青ちゃんが触ってくるんだから、私が触ってもいいよねぇ」

「え？」
白ちゃんの和服の中に手を突っ込み体中を触り出す。
お腹を撫でられたり、脇をくすぐられたり、胸を揉まれた。
「白ちゃん!?くすぐったいよ！」
「スキンシップ、スキンシップ」
「触るのはいいけど、あんまりくすぐらないで！」
白ちゃんに触られるのがくすぐったいせいで笑いっぱなしの私は最終的に笑いつかれて気絶するように眠った。
私が気絶しても触り続けた白ちゃんは満足すると、やめて簡易のベッドを出して気絶するように寝た私と一緒にベッドで眠る。
アリエルさんとメラは私達から目を逸らしてお酒を飲んで寝ていた。
次の日の朝。
「あれ？私いつの間に寝たんだっけ？」
アリエルさんから手渡されたお酒を飲んだ後の記憶がない。
飲みすぎちゃったのかなぁ。
私が周りを見渡すと、空になった樽が大量に転がっている。
白ちゃんは私の隣で寝ている。
他の皆もそれぞれちゃんと簡易の寝床で寝ているようだ。
私が視線を自分の体に移すと、和服がはだけて色々見えている。
「？なんで、はだけてるんだろう？」
和服をしっかりと着なおし、皆が起きるまで空納から果物を取り出して食べる。
しばらくして、皆が起きると私が朝食を作り配る。
朝食後、メラに声を掛けられる。
「昨日のこと覚えておられますか？」
「ああ、ごめんねぇ。全く覚えてない」
「そうですか。では、改めて、お嬢様を守れるように鍛えていただけないでしょうか？」
「転生者のソフィアとメラじゃ成長の速度が違う。まともな修行じゃなくなるよ？」

私の言葉にアリエルさんが目を見開いてこっちを見て来るが、どうかしたのだろうか？
「分かっています。どんなに辛い修行でも構いません」
「そう。じゃあ、これから始めよっか」
「!?」
魔闘法と気闘法を使ったメラがギリギリ立っていられる重魔法を掛ける。
「さっさと、魔闘法と気闘法を使う」
「は、はい！」
「これ持って」
メラに神重鉛の棒を持たせる。
今のメラにとってはまともに振ることなんてできない重さの棒を必死に持つメラ。
「私が今から魔法を撃ち込むから一落す。いいね」
「はい！」
メラが耐えれるギリギリの威力の闇魔法を大量に撃ち込む。
ＨＰが０になりそうになれば、すぐに奇跡魔法で回復させる。
「今は私が回復させてるけど、治療魔法を覚えたら自分でかけるのよ」
「はい！」
「それから体が壊れることなんて気にせず振りなさい。壊れた瞬間に治してあげるから、痛いだけよ」
「分かりました！」
メラは私の闇魔法を撃ち落とすため、一振り一振り限界を超えて振り続ける。
今は声を出して必死に振っているだけだが、いずれ一振りごとに体が壊れるくらいになってくれるでしょう。
今でも限界を超えて振っていることに変わりはないため、数回振れば体の至る所が壊れてＨＰが減っていく。
それを瞬時に治し、また壊れ、また治す。
常に限界を超えるために力を振り絞っている上に、気闘法を発動させているメラのＳＰはすぐに尽きてしまう。

「そこまで、少し休憩」
「は、い・・・・・・」
メラが休憩している間に私は調理をする。
食材が限られているので、味は重視せずに毒を持つ魔物の肉を使って大量の料理を作る。
料理が出来ると、メラの前に並べる。
「限界を超えて食べなさい。過食というスキルの獲得とレベル上げをするわよ」
「は、はい」
普段とは違い明らかに美味しくない料理に顔を歪めながらも食べ続ける、メラ。
先ほどの闇魔法でボロボロになった服の隙間からメラの背中に触れる。
私の突然の行動にメラが驚き、食べる手を止めて私を見る。
「どうされましたか？」
「何があっても気にせずに食べ続けなさい」
「？は、はい」
食べるのを再開したメラを見て私はメラの背中に触れた手から酸攻撃を行う。
いきなり背中に焼けるような痛みが走ったメラは驚いて咽る。
それでも痛みに耐えながら、私に言われた通りに食べ続ける。
ＨＰが危なくなればすぐに奇跡魔法で全快させ、また酸攻撃を行う。
ＳＰが全快してメラの食べる速度が遅くなるが食べ続け完食する。
完食したのを確認して私は酸攻撃をやめ、ＨＰを全開させる。
「少し休んだら最初の訓練ね」
「はい」
「今はこれの繰り返しだけど、魔法を使えるようになったら自分に魔法を撃ち込みながら最初の訓練をしてもらうから」
「わかりました」
「それから、移動中は重魔法を歩ける限界ギリギリで掛けるけど、魔闘

法と気闘法は使わないでね」
「？わかりました」
「移動中はＭＰがあるうちはこれに魔力を流して形を変えるように頑張る」
「これは？」
「神珍鉄」
　私が渡した神珍鉄の棒に首を傾げるメラに教えてやる。
　そしてメラの目の前で神珍鉄に魔力を流して形を変える。
「これは一定以上の魔力を流せば形を自在に変えられる。形を思い描いた形に変えるには魔力操作技術が高い必要があるの。ＭＰで言うと５００くらいの魔力を込めれば柔らかくなり始めて、大体１０００くらいの魔力を込めたら溶けた鉄くらいの粘度になるよ」
「１０００ですか・・・・・・」
「言っておくけど、ＭＰ１０００分の魔力を込めても粘度を保とうと思えば、常に大量の魔力を流し込み続けないといけない。少ないＭＰで望んだ形にしようと思えば高い魔力操作技術が要求されるってわけ。魔力量と魔力操作の訓練には最適の金属でしょ」
「魔力を込めて手で形を変えることは出来ないのですか？」
「出来ないわ。魔力に合わせて形を変えるだけで、物理的には硬いままだからねぇ」
「なるほど、わかりました」
「じゃあ、修行を再開しようか」
　その後、夕方になるまでメラをひたすらに鍛え続けた。
　移動を開始する前に一時間ほど睡眠をとらせ、移動中には魔力の修行と物理ステータスの修行と並列思考のスキル獲得を目指す。
　さて、慣れてきたら休憩の時間を減らして何をやらせようかなぁ。

え？蜘蛛狩り？

アリエルさん達が買い物に町に行っている時。
私と白ちゃんは一緒に人形達の改良を行う。
人形達は改良し過ぎて人間と区別をすることは普通の人には不可能だろう。
ただ、未だに声帯は実装出来ていないため、話すことが出来ない。
白ちゃんと二人で糸で疑似声帯を作る方法を考えているので、実装するのも時間の問題である。
少しお腹空いたなぁ。
空納から果物を取り出して白ちゃんに問いかける。
「白ちゃんもいる？」
「いる」
白ちゃんにも一つ手渡し、果物片手に疑似声帯の機構を考える。
そういう作業をしていると、空間の歪みを探知した。
この感覚は？ギュリギュリか？
何の用だろう？
私の予想通りにギュリギュリが転移して来た。
「久しいな」
ギュリギュリが突然現れたことで人形達に緊張が走った。
白ちゃんも、表情を消して観察するような視線を送っている。
誰も話しかけないので、私が話しかけようと口を開こうとすると。
「あまり時間が無いので本題だけ話そう。そっちの蜘蛛の方、君の分身が暴れているので何とかしてくれ」
「どういうことですか？」
先にギュリギュリが口を開いたので、私はギュリギュリにどういうことか問いかける。
「見せたほうが早いな」
そう言ってギュリギュリは腕を軽く振ると空中にスクリーンのようなものが出現する。
スクリーンにはソフィアとメラが住んでいた街と押し寄せる数え

切れないほどの白い蜘蛛の大群が映っていた。
そして街を蹂躙させないと壁の上で戦う人たちの姿。
「見ての通りだ。これが君の意思によるものでないのなら止めてきて欲しい」
分身が暴走することってあるのかな？
しかし、白ちゃんがこんな命令を出すとは思えない。
どうなってるんだろう？
「止めてきます」
白ちゃんが真面目な口調でギュリギュリに返した。
「そうか。頼んだ」
白ちゃんが転移の構築を始めると、ギュリギュリは安堵の表情を浮かべる。
ギュリギュリは少し離れて木に寄りかかると、腕を組んだまま動かなくなる。
私が白ちゃんに視線を向けると、白ちゃんが手を差し伸べて来る。
「行くよ、青ちゃん」
「ああ、手伝わされるんだぁ」
「いいでしょ」
「まあねぇ」
白ちゃんの手を取るとほぼ同時に転移する。
転移後に場所を確認すると、町から離れた蜘蛛の群れの背後に転移していた。
他より明らかに強い蜘蛛が９匹いるねぇ。
白ちゃんがその９匹に近づいていくので、私もついて行く。
「へい貴様ら、どういう了見だ？」
私と話す時と同じように話しかける白ちゃん。
自分の分身だから普通に話せるのかな。
『げっ!?本体！もう嗅ぎつけてきたのか!?』
蜘蛛の一体が驚き、念話で返してくる。
どうやら、こいつら９匹が今回の主犯らしいねぇ。
「どういうつもりでこんな事しでかしている訳？ギュリギュリが私ら

のとこに文句言いに来たんだけど」
苛立ちながら白ちゃんが蜘蛛達に言う。
『ええー』
『ギュリギュリも動きはえーな』
「すぐこれを止めてくんないと殺されそうな勢いだったんですけど！ていうか止めろし。何してくれちゃってんのホント？」
本当に何がしたいんだろうねぇ。
苛立っている白ちゃんの隣で私が呆れて肩を竦める。
『えー。だって人族とか全部ぶっ殺したほうがいいじゃん』
「……は？」
『そうだ、そうだー』
『それで理解しない、そっちの方が意味わからん』
うわぁ、すごいくだらない理由だったぁ。
人類何て滅ぼしてどうするんだろうねぇ。
分体の言葉に呆然とする白ちゃん。
そしてヒートアップする分体の蜘蛛達を見て、白ちゃんも理解したようだ。
「どうする？殺す？」
「そうだね。もう、こいつらは私じゃない」
「そっか」
白ちゃんの言葉に私は空納から大鎌を取り出す。
「じゃあ、殺しちゃうねぇ」
大鎌の魔力を解き放ち攻撃力を上げて蜘蛛目掛けて振る。
躱すことの出来なかった蜘蛛は大鎌に斬り裂かれて塵になる。
一匹が塵となったことで蜘蛛達が騒ぎ出す。
『げぇ、青ちゃんがやばい武器持ってる!?』
『誰だ!?鬼に鎌持たせたのは!?』
「誰が、鬼だって？」
『『青ちゃんが怒ったぁ!?』』
顔を隠していた白い布を外し、蜘蛛達に微笑むとまた騒ぎ出す。
「失礼な、私はスライムだって言うのに」

「そういうことじゃないと思うけど」
「もしかして、白ちゃん？私のこと鬼だと思ってるの？」
私が目だけ白ちゃんに向けて問いかけると、白ちゃんは全力で首を横に振る。
そして蜘蛛達を指さして必死にあいつらだとアピールしてくる。
「まあ、白ちゃんがどう思ってるのかは後でゆっくり聞こうかな」
「えぇー。お前らのせいで、私まで疑われたじゃないかぁ！」
私の言葉を聞いて白ちゃんが大鎌で蜘蛛達に斬りかかる。
そんなに私怖いだろうか？
『血迷ったか!?本体!?』
『そっちに青ちゃんがいるとは言え、こっちの８体とやり合うつもりか!?』
『本体とはいえ、容赦はせんぞ！』
蜘蛛達は私から距離を取って魔法で攻撃してくる気のようだ。
「神龍結界」
『なら、こっちも!?』
『『『神龍結界！』』』
どうやら向こうも発動させたようだが、私にはあまり意味がない。
けど、殲滅戦がやりにくくなったのは事実だ。
白ちゃんと同格だとすると、スピードが厳しいなぁ。
まあ、近づいて来る奴らは容赦なく斬り殺せるけど、逃げ回れると面倒だよねぇ。
「ねぇ、近づいてきてくれない？」
『青ちゃんに近づくなんて自殺行為誰がするか!?』
「はあ、スピード特化の相手は苦手だなぁ」
神龍結界を張りはしたが、向こうの方が数が多いせいか普通に魔法を撃ってくる。
スキルの耐性がカンストしている私には大したダメージはない。
私に効果がある魔法と言えば、深淵魔法だけだねぇ。
『だめだ。青ちゃんには深淵魔法以外通じないっぽい』
『じゃあ、深淵魔法を使う!?蜘蛛達時間を稼げ』

蜘蛛達が深淵魔法の構築を始めると、蜘蛛達が大量に押し寄せて来る。
「作戦全部筒抜けなのにいいのかねぇ」
「そうだけど、あれは止めないとヤバい」
「分かってるよぉ」
襲い掛かってくる蜘蛛達を大鎌で斬り裂きながら神龍力を発動させる。
『げぇ!?』
今更気づいても遅い。
襲い掛かて来た大量の蜘蛛の群れ事と深淵魔法を構築している白ちゃんの分体を吹き飛ばす。
弱体化したマザーのブレスがエルロー大迷宮の最下層から地上までをぶち抜いて巨大な縦穴を作れた。
そんなマザー以上のステータスとレベルの高い神龍力を持つ、私。
そして私のブレスの属性は腐食。
全盛期のマザーを超える私のブレスに腐食属性がついているのだ。
いくら白ちゃんの分体でも耐えることが出来ずに蜘蛛の群れともども塵となって消える。
「私の前で動きを止めるなんて、殺して欲しいの？」
先ほどのブレスで白ちゃんの分体が3匹まとめて消し飛んだ。
最初に倒したのを入れて4匹、残りは5匹かぁ。
『これ、勝ち目無くない？』
『まだだ。いくら、青ちゃんでも怠惰には対抗出来ない！』
『だめだ！本体に怠惰のスキルを切られた！』
分体達の話を聞いて白ちゃんに視線を向ける。
「怠惰含めて色々スキルオフにしたから、ジャンジャン狩っちゃって」
「白ちゃんも少しは狩ろうよ。まあ、ステータス強化が無いなら、私でも追いつけるから助かるけどねぇ」
魔神法を発動させて白ちゃんの分体を追い回す。
途中で蜘蛛達が襲い掛かってくるが、弱すぎて足止めにもならない。

分体が魔法で攻撃してくるが、大鎌で薙ぎ払う。
たまに、直撃するが問題はない。
「全く、面倒だなぁ」
魔力を解放して攻撃力を上げ、分体を斬り裂く。
白ちゃんも2匹狩り、残り2匹になった分体。
『くっそー!』
『青ちゃんさえいなければ!』
「全く、ちょこまかと逃げないでよぉ」
『逃げるに決まってるでしょ!?』
「はあ、本当に面倒だなぁ」
神金生成を発動させて神珍鉄を大量に作り出す。
神珍鉄を伸ばして分体を追い回して貫く。
私が動くより、こっちの方が早かったねぇ。
神珍鉄を動かす速度に負けるってどうなの?
「まあ、これでおしまいだねぇ」
『や、やめ!?』
串刺しにされた分体に近づいて腐食攻撃で殴り付ける。
二匹とも塵となって消えてなくなる。
そして私は神珍鉄を大きい球体にして空納に放り込む。
「それでこの蜘蛛の群れどうするの?」
残った白い蜘蛛の群れを見て白ちゃんに問いかける。
「どうしよっか?」
「ん?魔法の反応があるね。ここも魔法の範囲みたいだし、魔法が撃たれたら迷宮に転移させる」
「おお、ナイス案!それ採用!」
そして白ちゃんは蜘蛛達と私達を対象に転移魔法を構築する。
町の方から魔法が放たれる。
それに合わせて白ちゃんが転移を発動させ、私達は蜘蛛の群れと一緒に迷宮に転移する。
迷宮に転移した後、私と白ちゃんだけで人形達が待つ場所に転移して戻る。

旅路の摸擬戦

白ちゃんの分体が暴走した事件から数日たった。
ソフィアとメラが私達と一緒に魔族領に行くことを決めたことで、私達は魔族領に向かっている。
長い旅の間、私達は実践訓練のために摸擬戦をしている。
今は私とアリエルさんとで摸擬戦を行っている。
「どうして攻めてこないんですか？」
「そのヤバい大鎌があるからに決まってるじゃん」
「白ちゃんの時は余裕で倒してたじゃないですか？」
「青ちゃんは白ちゃんと違って全ての攻撃が当たるとヤバいでしょ!?いくら私でも攻撃力８万越えの腐食攻撃くらったらやばいんだからね!?」
「いやだなぁ。当たったことないでしょ」
「当たらないように必死に避けてるの！」
そんなことを言われても仕方がない。
腐食は私の一番適性の高い属性なんだから。
それに私の攻撃でアリエルさんに通じるのは腐食攻撃のみなのだから、勝つためにはそれしかないのだ。
まあ、私もスキルで全ての攻撃をほぼ無力化しているので人のことは言えないかぁ。
けど、アリエルさんの攻撃力高すぎてダメージ入りはするんだよねぇ。
流石はステータス平均９万越えの化け物だねぇ。
ごり押しでスキルの防御を突破してくるなんて、アリエルさんくらいだよぉ。
「アリエルさんに逃げられると、私追いつけないんですけどぉ」
「そりゃそうなんだけどさぁ。スキルの防御が硬すぎるんだよねぇ」
「それでもダメージ通してくるじゃないですか」
「自動回復ですぐに回復する程度じゃん!?削り切る間青ちゃんの傍にいるなんて無理だよ!?」

このままだと私の訓練にならないんだよねぇ。
いつもそういって逃げられてまともに摸擬戦をしてもらったことがない。
白ちゃんもアリエルさんと同じで逃げ回るし、他の人だと弱すぎて摸擬戦にならない。
これまで何度も摸擬戦をしているけど、未だにまともに訓練になる摸擬戦をさせてもらっていない。
「分かりましたよぉ。大鎌と腐食攻撃は使わないので、普通に摸擬戦しましょうよ」
「本当に？本当に使わない？」
「使いませんよ。じゃないと私の訓練にならないじゃないですかぁ」
「よし、それならちゃんとやるよ！」
私が大鎌を空納にしまうと、アリエルさんがすごく元気になった。
腐食攻撃と大鎌を封じると、私の勝ち目は完全になくなる。
私の攻撃力が高いとは言え、アリエルさんよりは低いのだ。
魔神法と神龍力で強化しても強化してないアリエルさんと互角。
それなのに、アリエルさんには物理無効があるらしい。
強化した私の攻撃力と同じくらい高い防御力を持ち、スキルの防御力まで高いのだ。
はぁ、純粋なステータスが一番強いわけねぇ。
攻撃力特化な私のステータスを恨みながらも空納から神珍鉄を取り出す。
「それは？」
「ただの神珍鉄ですよ。腐食属性なんてついてないので安心してください」
「おっけぇ。それなら使ってもいいよぉ」
「格下の私がハンデつけられるのおかしくないですか？」
「あはははは、青ちゃんを格下だと思ってたら私今頃死んでるよ」
笑いながら言うことではないと思うのだが？
そもそも私が格下なのは確実だ。
確かにスキルや攻撃力なら私は対等レベルに強いかもしれないが、

それ以外の部分が低すぎる。
世界基準で見れば間違いなく最強クラスだが、アリエルさんと比べれば差は圧倒的だでしょうねぇ。
攻撃力を除いた平均ステータスが倍以上違うのだ。
いくら攻撃力やスキルが優秀でもその差が埋まるわけではない。
では、その差を埋める方法は？
答えは簡単だ。
システム外の力で埋めればいい。
未来視のさらに先を読み、最小限の動きで攻撃を受け流し、最小限の動きで反撃する。
倍以上離れているのならアリエルさんの半分以下の動きで攻撃し、守ればいい。
どれだけ速かろうと、来ると分かっていれば対処できる。
さあ、今回はちゃんと訓練に付き合ってよぉ。
アリエルさんが私に向かってとんでもない速度で突っ込んでくる。

白視点
神珍鉄の塊を右手に持った青ちゃんに魔王が突っ込んでいった。
そして次の瞬間には魔王が空高くを舞っていた。
うわぁ、ないわー。
隣で吸血っ子とメラも口と目を限界まで開けて、空高くに放り投げられた魔王を見る。
『あいつ、本当にアリエルさんより弱いの？』
吸血っ子の問いに対して頷いて返す。
青ちゃんのステータスは一部を除いて私より低いから間違いない。
攻撃力とＭＰとＳＰの三つだけが私より高い。
特に攻撃力に関しては倍近く離れている。
それでも魔王には届いていないのだから、魔王のステータスはバグってる。
なのに、そんな魔王と互角にやり合えるのが青ちゃんなんだよねぇ。

本当にどうなってるんだかねぇ。
空間機動で青ちゃんに襲い掛かるが、青ちゃんは全ての攻撃を最小限の動きで避けている。
ステータス的に青ちゃんと同格のはずの私は魔王に瞬殺されているというのに、この差はなんなのか。
メラは先ほどから必死に青ちゃん動きを見ているが、まともに見ることはできないだろうに。
青ちゃんの速度が遅いと言っても3万は超えている以上、今の吸血っ子とメラには目で追えるはずがない。
といっても、見えたところで青ちゃんがやってることを真似できるとは思ないんだけどねぇ。
魔王も可哀想にねぇ。
唯一青ちゃんとまともに戦える相手ということで摸擬戦を強制させられて。
え？私？
私は絶対に青ちゃんとは戦わないって決めてるんだよ！
並列意思を殺しまわる青ちゃんがどれだけ怖かったと思ってるの？
怠惰のスキルがあっても絶対に戦いたくない！
そんなことを考えていると、魔王の頭から首を青ちゃんが持っていた神珍鉄が覆う。
魔王は慌てて暴食で顔を覆っている神珍鉄を食べるが、青ちゃんの左拳が顎を強打する。
そして流れるような動作で左肘で魔王の鳩尾を突き。
続けて左の裏拳で魔王の鳩尾を殴り、魔王を吹き飛ばす。
魔王は吹っ飛びはしたがダメージは入ってないようだ。
ないわー、あの魔王に三コンボ決めたよ。
絶対に勝てるわけないじゃん!?
いいか、私は絶対に青ちゃんとは戦わないからな！
例え摸擬戦でも青ちゃんと戦わないからな！
初めて青ちゃんに会った日に決めてるんだよ！

青ちゃんは絶対に敵に回さないって決めてるんだよ！
私はなぁ、死にたくないんだよ！
「青ちゃん、本当に何者なの？」
「何者って？私はただのスライムですよ」
「そういうこと聞いてるんじゃないんだけどなぁ」
魔王の問いに関しては私も気になる。
青ちゃんはどう考えても普通ではない。
それなのに前世では普通の女の子だった。
「いやだなぁ。ただのどこにでもいる普通の女の子ですよ」
「青ちゃんみたいなのが何人もいるわけないでしょ!?」
「みたいなのは、失礼じゃないですかぁ」
「ごめんなさい。殺さないでください」
「まあ、そんことはいいじゃないですか。それよりも続けましょう」
「そんなことって」
圧倒的な強者であるはずの魔王が簡単に頭を下げたことに青ちゃんが呆れて肩を竦める。
元体担当と融合したせいか、魔王までが青ちゃんを異常に怖がっている。
まあ、エルロー大迷宮に居た頃に青ちゃんへの恐怖は刻み込まれているからねぇ。
結局、魔王と青ちゃんの摸擬戦は魔王の勝利で終わった。
魔王が最終的にステータスに任せてごり押した結果である。
やっぱり、魔王もやばいわぁ。
摸擬戦の後、青ちゃんに対して叡智を使って鑑定を掛ける。
物理系のステータスが大体千以上上がってる。
このペースだと、数年で魔王と同格のステータスになりそうだわ。
今のステータスで互角なのにまだ異常な成長を続けるというのか!?
Dの奴、なんでバグスキルを青ちゃんに渡したんだよ!?
私も頑張らないと全ステータスで青ちゃんに負けちゃう。
けどなぁ、傲慢の成長補正だけで青ちゃんの成長スピードから逃げ

切れるかなぁ？

荒野の落とし穴

「はい、あー」
「「「「あー」」」」
「はい、いー」
「「「「いー」」」」
何もない荒野に人形達とソフィアの声が響き渡る。
サリエーラ国の首都でソフィアとメラが故国を捨てることを決断してからおよそ一年が経った。
今私達はサリエーラ国の北にある小国家群、その中にある広大な荒野にいる。
荒野の空には鳥と爬虫類の中間みたいな竜と龍が飛んでいる。
アリエルさんが大声で通るだけだからと伝えたことで、龍の群れに襲われることなく荒野を通れている。
鳥みたいで美味しそうなのもいるけど、アリエルさんに止められてるからねぇ。
一、二匹食べても怒られない気がするのだけど、ダメなのかなぁ？
「はい、うー」
「「「「うー」」」」
アリエルさんに続いて声を出している人形達とソフィアに視線を向ける。
ソフィアはすでに赤ん坊とは言えないくらいに成長しているが、念話で話し続けていたために舌足らずになってた。
そして人形達は私と白ちゃんで作った疑似声帯を埋め込んだことで発声出来るようになった。
しかし、発声できるようになっただけでしっかりと話すことが出来るわけじゃない。
だから、ソフィアと一緒に人形達も発声練習をしている。
そういえば、私人化した時に発声練習何てしてないな。
そもそも人化したとは言え、中身はスライムなのに声帯なんてあるのかな？

どうでもいいことを考えながらメラに視線を向ける。
メラは虫の息で死にそうな顔しているが、それでも必死に歩いている。
一歩歩くごとに岩盤上の硬い地面に足跡を残しながら必死に歩いている。
一年以上の間、私が死ぬギリギリまで追いつめ続けているため、メラのステータスはかなり上がっている。
今のメラなら竜にも勝てるでしょうねぇ。
いやぁ、一年でそれなりに強くなってくれて私は嬉しいよ。
まあ、私がアリエルさんと全力戦えば余裕で超える程度の成長だけどねぇ。
本気で修行した時は一年で万単位でステータスが上がってたしねぇ。
私とメラじゃ転生者である以前に、チートな成長補正がないから仕方ないんだけどねぇ。
ここ最近私が一番気になっているのはソフィアの妬心のスキル。
メラが他の子と仲良くしてると目が据わってくる。
白ちゃん曰く、ヤンデレらしいソフィア。
私がメラの修行でメラの体に触れている時なんか、すごい目を向けて来る。
よく目にそれだけの感情を込められるものだよ。
私の目なんてどんなに頑張っても感情何て込められないのにねぇ。
どうでもいいことは置いておいて、ソフィアの妬心は七大罪系スキルらしい。
七大罪系スキルは精神に影響及ぼす危険なものらしい。
白ちゃん二つ持ってるけど、そこのところどうなんでしょうかねぇ。
そもそも支配者スキル五つ持ってる時点でチートだよねぇ。
私なんて悟りの影響で他の支配者スキル取れないのに。
私としては嫉妬のスキルが精神にどれだけの影響を与える分からないが、取れるものは取った方がいいと思う。

そもそもメラの惨状を見て嫉妬する方がおかしいと思うが、そこは考えないでおこう。
あら？この反応は・・・・・・
ソフィアのスキルについて考えていたせいで、注意が遅れてメラが落ちていく。
どうやら足元に空洞があったせいで地面が薄くなっていたようだ。
白ちゃんがメラが落ちた穴に近づいたことで直接穴の中の様子が見えた。
メラは無傷なのが見える。
この程度の高さから落ちて怪我するような優しい鍛え方はしてないので当然の結果かぁ。
それよりも。
私達が穴を覗き込んでいると、メラに巨大な蟻が近づいて来た。
空洞の正体は蟻型の魔物の巣だったようだ。
蟻は雑魚だし、メラでも余裕で殲滅できるけど。
レベル上げはステータス向上系のスキルを上げてからにした方が良いよねぇ。
なら、あいつらは私が殲滅しようかなぁ。
蟻の殲滅を決めて私が白ちゃんの背中から降りようとすると、アエルが穴に飛び込んでいった。
アエルは人形達の中でも率先して動く行動派で、人形達のリーダー的存在。
率先して動いて、ちゃっかり美味しいところを持っていくこともある。
アエルが飛び込んだ後に、リエルとフィエルが飛び込む。
サエルはそれを見送ってちょっとオロオロとしてから飛び込んでいく。
サエルはアエルとは正反対で、人形達の末っ子的存在でおどおどした性格をしている。
あんな格下に躊躇するのは少し心配だけどねぇ。
まあ、可愛いから良いかなぁ。

人形達が突撃したことであっという間に蟻の殲滅が終わる。
正直、メラで余裕の相手に人形達が出たのだから蟻が蹂躙される以外ありえないのだけどねぇ。
白ちゃんが蟻の死体を回収するために下に降りたので、私も蟻を空納にしまいながらメラに声を掛ける。
「メラ、まだステータス向上系のスキルレベルが低いから本格的なレベル上げはまだ先」
「分かりました」
人形達に蟻を殲滅されたことで剣を抜いた意味がなくなり呆然としていたメラは私の言葉で納得したようで剣をしまう。
「災難だったね。怪我はない？」
「はい、大丈夫です」
「よかったよかった。じゃあ、上に戻ろっか」
メラがアリエルさんが垂らした糸につかまり登ろうとするのを見てると白ちゃんが蟻の巣の奥に進んでいく。
あら？どうしたんだろう？
蟻の巣の奥に何かあるのかな？
「うん？白ちゃーん？どこ行くのー？」
アリエルさんの呼びかけを無視して進んでいく。
やっぱり、奥に何かあるのねぇ。
アリエルさん達は互いに顔を見合わせ、不思議そうに首を傾げる。
しかし、白ちゃんが止まらないと慌てて追いかけて来る。
「へいへーい？白ちゃん、聞こえてますか？どうしてそっち行くのかな？」
白ちゃんはアリエルさんの言葉を無視して土魔法を使い真下へ続く穴を開ける。
そして何の説明もないまま穴に飛び込む。
穴は下の通路に繋がっていたようで、そこにいた蟻を邪眼で瞬殺して空納にしまっていく。
こんな蟻を回収するために来たわけではなさそうだしねぇ。
一体、何が気になっているのだろうか？

「青ちゃん、白ちゃん止めてよぉ」
「黙ってついて来る」
「はい」
白ちゃんを止めてくれとアリエルさんから助けを求められるが、即答で断る。
すると、アリエルさんは諦めたようで肩を落として落ち込む。
メラがアリエルさんを励ましているが、気にせずに白ちゃんは進んでいく。
最終的に女王蟻の元まで来て殲滅する。
「何してんのさ、白ちゃん。むやみやたらに生態系を破壊するのはよくないって思うな」
「思うだけなら変わらないので黙ってください」
「青ちゃん、酷くない!?」
後を追って来たアリエルさんの呆れ気味の苦言を一蹴して白ちゃんの様子を見る。
「ほら、帰るよ」
「まだですよ」
「ええ?」
帰ろうとする魔王に白ちゃんの代わりに答えてあげると、うんざりしたような声が帰って来た。
他の面々は白ちゃんの行動にうんざり、というより怪訝な顔をしている。
多分、白ちゃんの目的はこの下にある。
さて、面白いものが見つかるといいなぁ。
白ちゃんがさらに掘り進めたことで、漸く私にも白ちゃんが何を見つけたのか分かった。
そして私と同じで探知がカンストしてる魔王も気づいたようだ。
「白ちゃん、これって」
魔王の緊迫感満載で真剣な面持ちの呟きに、他の皆もただ事ではない空気を感じ取ったみたい。
これは、面白いものが出て来たねぇ。

流石は白ちゃん、面白いことが向こうから寄ってくるみたいだよ。
私が心の中で喜んでいると、目的の場所に到着したようだ。
かなり深くまで掘り進めたようだし、私でも途中まで気づかなかったほどだ。
いくら探知がカンストしても見つからなかったもの。
「え？」
それを見た瞬間、ソフィアが思わずといった感じで口を開いた。
まあ、仕方ないことだと思う。
私達はこれが何か知っているのだからねぇ。
この世界の文明の技術ではありえない立派な金属の扉。
アリエルさんから聞いた文明崩壊前の遺跡。

古代遺跡って楽しいねぇ

文明崩壊前の遺跡の金属扉の前で私達は立ち止まった。
白ちゃん達は金属扉にどうしたらいいか分からずに固まっている。
そんな白ちゃん達を置いてアリエルさんが金属の扉に近づいていく。
そして金属の扉を無理矢理こじ開けてしまった。
うわぁ、すっごい力技。
まあ、アリエルさんはこんな遺跡放っておけ何でしょうねぇ。
扉を壊された遺跡が、ビーッ、ビーッっと警報を鳴らし始める。
そんな警報も気にせずにアリエルさんが遺跡の中に入っていく。
「みんな、何が起きてもいいように身構えておいて」
「アリエルさん、これって」
「うん。古代文明の遺跡。まさか、こんなものが残ってるなんて思わなかったけど、調査しないといけない。何が出てくるかわからないから、警戒しておいて」
アリエルさんは私を見ながら言ってくる。
言われなくてもちゃんと白ちゃんから降りるつもりでしたよ。
私が白ちゃんの背中から降りるのを見てアリエルさんが遺跡の中に視線を向ける。
遺跡の中に入る前に、私は顔を覆ている布を取り空納にしまう。
アリエルさんが先頭に立って進み。
その後ろに私がついて行く。
そして私の後ろにソフィアとメラ、人形達が続く。
白ちゃんも仕方なくといった様子で最後尾について来る。
さて、何が出て来るかなぁ。
私の希望に答えてか、壁が音を立てて開いて細長い筒が出て来る。
どう見ても銃口なそれらは、私達に照準を定める。
しかし、アリエルさんが両手の指から糸を出して一瞬で全て壊してしまう。
恐ろしく早い糸裁きで、しっかりと見えたのは私と白ちゃんくらい

だろう。
アリエルさんが一瞬で壊してしまった転がっている銃口に視線を向ける。
この程度だとアリエルさんが全部潰しちゃいそうだねぇ。
私が転がっている銃口をつまらなさそうに見ていると、後ろから音が聞こえて来た。
どうやら白ちゃんが地面に落ちた銃口を拾っていじっていたら暴発したらしい。
「何してんのさ？」
アリエルさんが呆れた目で白ちゃんを見ながら問いかける。
ソフィアは銃弾を受けても平然としている白ちゃんに驚いている。
そんな彼女達を置いておいて白ちゃんに近づいて銃弾が当たったであろう額を撫でる。
「白ちゃん、大丈夫」
「大丈夫」
白ちゃんが恥ずかしそうに呟いて視線を逸らす。
うん、可愛い可愛い。
それにしてもしっかりと、銃弾は出るようだねぇ。
遺跡の防衛システムがしっかりと生きているということを確認してソフィア達の前に戻る。
まだ、奥に進むようだし、ソフィアとメラは自分で身を守ることが出来ないだろうからねぇ。
メラはまだまだ鍛えないといけないんだから死なれたら困る。
しばらく、廊下を奥に進むと、行き止まりに到着した。
行き止まりは、天井や左右の壁、床に微妙な隙間があり違和感がすごい。
「いや、まさかねぇ。そんな馬鹿な設計にはなってないよねぇ」
思わず声に出してしまったが、仕方がない。
この廊下の長さと地上までの距離。
この空間から予想できる仕組みが一つしか思いつかないのだから。
どこの馬鹿が考えたのか知らないが、非効率この上ない設計に頭を

抱えてしまう。
「青ちゃん、どうしたの？」
「これ、エレベーターですよ」
「え？」
私の言葉に全員が驚いたような顔で視線向けて来る。
アリエルさんは思い当たることがあるのか、確認するために壁をぶん殴り穴を開ける。
そして穴の縁を掴み力任せにこじ開ける。
アリエルさんがこじ開けた穴を覗いてみると、小さな部屋があった。
そして私の予想通りに天井にはエレベーターのような扉がついていた。
「これは古代文明の時代にちょっと流行った隠しエレベーターでさ。普段はこうやって地下深くに埋もれてるんだけど、出入りする際は持ち上がって地上に繋がるようになってんの。で、地下にある秘密基地に繋がる」
アリエルさんがこのエレベーターについて説明してくれる。
予想通り過ぎて頭が痛くなってきた。
誰よ、この無駄な仕組み考えた馬鹿は？
「青ちゃん、よく分かったねぇ。この知ってたの？」
「知るわけないじゃないですか。構造的に他に思いつかなかったんですよ」
「構造ってそんなに分かりやすいかな？」
「この構造考えた馬鹿が誰なのか知りませんが、底抜けの馬鹿なのは確実ですねぇ。正直、自分の考えを否定したくなったのは初めてですよ」
私が頭を抱えて盛大にため息をつくと、アリエルさんが苦笑して説明を続ける。
「まあ、このエレベーター持ち上がる時に、一時的に土をドロドロにする機能があって。それがメッチャ無駄にエネルギー無駄にするバカみたいな機能だから間違ってないけどね。なんて言っても考えたの

がポティマスだからねー」
「なるほど、ポティマスは相当の馬鹿なんですねぇ。私の予想を超えて来るとはすごい馬鹿ですよ。ええ、今までに出会ったことのない馬鹿さです。どうやら、私はポティマスのことを過小評価していたようです。彼は世界一の馬鹿と名乗ってもいいほどの馬鹿ですよ。私が保証します」
「青ちゃん、すっごい言うねー」
私のポティマスに対する評価にアリエルさんだけでなく全員が呆れたような視線を向けて来る。
どうしたのだろうか？
私は思ったことをそのまま言っただけなのに。
私にここまで言わせるなんて相当の馬鹿であることは確実だよ。
私が全員の視線に不思議そうに首を傾げて返すと、目を逸らされた。
「と、取り合えず、奥に進もうか」
アリエルさんがそういうと、こじ開けた穴の反対側の壁も同じようにこじ開ける。
そして壁の先には扉があり、それをアリエルさんが力技でこじ開けて中に入る。
相変わらず鳴り響いている警報がうるさいが、廊下に入るがすぐに突き当りになっている。
突き当りは壁ではなく、一面が両開きのスライド式の扉のようだ。
また、アリエルさんがこじ開けるのかなぁ。
そんなことを思っていると、扉がひとりでにスライドして開いた。
扉が勝手に開いたことには驚いた。
そして扉の先には無数の無機質な目が待ち構えていた。
無数のロボットが私達に銃口を突きつけている。
数多いなぁ。
どうでもいい感想を思い浮かべていると、無数の銃口が一斉に光を放つ。
無数の光の弾丸をアリエルさんが両手の指から出した糸で払いの

ける。
それで大半の光の弾丸が払われるが、いくらか流れ弾がこちらに向かって飛んでくる。
流れ弾は人形達が武器で払いのける。
流石、魔王とその配下だねぇ。
アリエルさん達のスペックを眺めていると、白ちゃんがソフィアの頭にチョップを落とした。
そしてソフィアに氷の壁を出すようにいう。
「防壁は私が作るよ」
空納から取り出した神珍鉄でロボットとソフィア達の間に分厚い壁を作る。
ソフィアが魔法で氷の壁を作るより、圧倒的に物理防御は高い。
私が神珍鉄の壁を作ると、アリエルさんがロボットの最前列に突っ込んでいった。
正面からアリエルさんがロボットを蹂躙していく傍らで、撃ちもらしたロボットを人形達が処理していく。
隠し腕を解放して、六本の腕でそれぞれの武器を振るう人形達。
アエルはロボットを淡々と処理していく。
それに対してサエルは見ていて危なっかしい感じで処理していく。
戦っている最中いっぱいいっぱいになってるのが見ていてよく分かる。
サエル、頑張れー。
他の人形達と大して変わらなにので心配は特にしてないが、心の中で応援しておく。
リエルは天然ボケの不思議ちゃんで、たまにドジするのでハラハラする。
フィエルは猪突猛進のお調子者なので何も考えずに突っ込むので危なっかしい。
アエル以外に不安しかないのはかんがえないようにしよう。
旅の途中もほとんど子守り気分だったなぁ。
特にフィエルはよく白ちゃんの背中に乗っている私の膝の上に

乗ってくる。
白ちゃんが気にして無いみたいだから、私も気にして無いが少し白ちゃんに申し訳ない気分になる。
フィエルは遠慮なく乗ってくるし、リエルは脈絡なく乗ってくる。
サエルはチラチラこっちを見て乗せてくださいアピールをしてくるので、膝を叩いて許可を出している。
正直、見た目は女の子だが、皮膚の下は神珍鉄で覆われた人形なので触り心地があまり良くない。
それでも愛でる分には可愛いので良しとしている。
特にサエルは控えめで可愛いので、お気に入りである。
後ろから抱きしめてやると、恥ずかしそうに俯くのでよく頭を撫でてやっている。
基本的には白ちゃんに触り過ぎて注意された後に、サエルを抱きしめて撫でている。
アエル一度だけしか乗ってこないので、妹達の世話を私に押し付けるためにやったのだろう。
白ちゃんに注意された時に愛でれるものが出来たので気にしていない。
ん？背後からも来たみたいねぇ。
背後の廊下から出て来た二体のロボットに視線を向ける。
対処しようか考えていると、メラが剣を抜いてロボットに肉薄する。
そしてロボットが光の弾丸を撃つ前に銃口を剣で逸らす。
もう一体のロボットがメラに銃口を向けると、ソフィアが銃身を氷の魔法で凍らせる。
銃口が塞がれて、発射するエネルギーが内部で爆発したのか、ロボットが自爆する。
うわぁ、くそみたいな設計してるなぁ。
銃口が詰まった時の安全装置くらい付けとこうよぉ。
ロボットの設計に呆れていると、メラがソフィアの真似をして銃口を凍らせる。

先ほどと同じようにロボットが自爆した。
本当にポティマスはどうしようもない馬鹿だねぇ。
自分の技術に酔ってるから、こういう欠陥が出て来るんだよ。
ロボットの設計に呆れながら視線を正面に戻す。
アリエルさん達によってロボットがほぼ殲滅されていた。
ロボットがほとんど殲滅されたからか、広間の奥の扉が開いて何かが姿を現した。
私は誰も気づいてないそれを見て、私はそれに近づいていく。
扉から出て来た戦車のような見た目のそれは、砲塔を近くにいたサエルに向けるのを見て一瞬で最高速度に至る。
ロボットの殲滅を終えたところのサエルを右腕で抱き寄せ、左手で戦車が放った光の砲弾を受け止める。
思った以上に威力が高いなぁ。
砲弾を受け止めた左手が潰され大変なことになるが、スライムである私には関係がない。
左手をスライム状に戻して光の砲弾を包み込んで砲弾を砕いて取り込む。
そして左手を人の手に戻す。
一瞬の出来事だったので、白ちゃんとアリエルさん以外には私が砲弾を握り潰したように見えただろう。
「サエル、大丈夫？」
とっさに抱き寄せたサエルが無事なのを確認する。
サエルはオロオロしながらも私の問いに頷いて返した。
「じゃあ、ソフィア達の場所まで下がってて」
サエルは私の言葉を聞いてソフィア達の元まで下がっていく。
それを横目で見送り、私は戦車に歩いて近づく。
私が近づく間に戦車は私に光の砲弾を撃ち込んでくるが、全て握り潰して取り込んでいく。
空納から大鎌を取り出して右手に持つ。
「消えなさい」
大鎌の魔力を解放した一撃で戦車をスパンッと叩き斬る。

大鎌で斬られた戦車は音もたてずに塵になっていく。
あれ？腐食攻撃って死を司る属性じゃなかったけ？
どうして生物じゃない戦車に効いてるんだろう？
まあ、いいか。
私は大鎌を空納にしまってアリエルさん達の方を向く。
そして視界に白ちゃんが入る。
あれ？白ちゃん、何もしてなくない？

ＵＦＯ出現!?

戦車を塵に変えてアリエルさん達に振り返る。
「これは、また・・・・・・」
アリエルさんが塵になった戦車の残骸を見て顔を引きつらせている。
人形達の表情も心なしか引きつり気味だ。
「どうかしました。アリエルさん?」
「な、なんでもないよ。青ちゃん」
私がアリエルさんに問いかけると、アリエルさんは私から視線を逸らす。
ん?どうしたんだろう?
アリエルさんの背後、廊下からソフィアが顔をのぞかせる。
キョロキョロ辺りを見回し、危険がないことを確認してから広間に入ってくる。
さらに後ろからサエルとメラが続いて入ってくる。
サエルは怪我こそしなかったが、先ほどの戦車の砲弾を受けていれば無事では済まなかっただろう。
サエルが他の人形より弱いわけではない。
そんなサエルでも危なかったとなれば、ここは意外と危険な場所のようねぇ。
「これから、どうします?」
「うーん。思った以上にここはやばそうだねー。サエルも危なかったし、ソフィアちゃんとメラゾフィスくんは地上に戻った方がいいかも」
「そうですねぇ。サエル達も危ないでしょうし、メラ達と一緒に地上に戻った方がいいでしょう」
「そうだねー」
私とアリエルさんの意見に反対する者はいなかった。
私がアリエルさん達の傍まで来ると、地面が揺れ始めた。
揺れが大きく、メラやソフィアは立っていられずに床に手をついて

座り込んでいる。
人形達もバランスを崩してフラフラしている。
さらに、警報の音量も一段階上がり、照明が赤く点滅を繰り返す。
「なんか、やばげ？」
「どう考えてもやばいでしょうねぇ」
「前言撤回。みんなで逃げるよ！」
アリエルさんがメラとソフィアを脇に抱え、廊下に向かって駆け出す。
その後を人形達がふらつきながら追いかけていく。
あのペースだと危ないかなぁ。
「白ちゃん、二人お願いねぇ」
「了解、青ちゃん」
白ちゃんにお願いし、サエルとアエルを両脇に抱えてアリエルさんの後を追う。
白ちゃんはリエルとフィエルを抱えて私を追い抜いていく。
やっぱり、私が一番遅いよねぇ。
まあ、人形達に走らせるよりは速いけどさぁ。
ステータスでも平均速度3万を超えている私より圧倒的に二人を見ながらも最高速で走る。
エレベーターを越えて長い廊下を走っていると、大きな揺れと一緒に背後から轟音が響いた。
私が背後を振り返ると、物凄い勢いでこっちに迫ってくる炎が見えた。
あれに飲まれるとやばいよねぇ。
迫りくる炎よりも速く長い廊下を駆け抜け、破壊された扉を潜り抜ける。
白ちゃんやアリエルさんが来た道の穴を上がっている間に、私は走り始めた時から構築していた転移魔法を発動させる。
遺跡内では妨害される恐れもあったので、遺跡から出た瞬間に発動させた。
私はアリエルさん達より早く地上に戻る。

「危ない危ない。空間魔法が使えなかったら飲まれてたかもねぇ」
地面に立っていると危ない気がしたので、空間機動で空中に避難する。
私が空中に避難すると、穴からアリエルさんが出て来た。
「あれ？青ちゃん？なんで？」
「遺跡を出た直後に転移しただけですよ。私はアリエルさんや白ちゃんほど速くないんでねぇ」
「ああ、なるほどねー」
私の言葉にアリエルさんが納得していると、白ちゃんも穴から出て来た。
白ちゃんが穴から出て来た勢いで空中を飛んでいく。
次の瞬間に地面が爆発して火柱が上がり、白ちゃんの鼻先数センチをかすめる。
危ないねぇ。
しかし、目の前で上がった火柱とは比べられない大きな特大の火柱が上がった。
その火柱に私達全員が驚いて固まってしまう。
その特大の火柱の中を何かが空に向かって飛んでいく。
その何かが上昇していくのを見送り、火柱が沈静化する。
そして火柱の跡地からゆっくりとそれが姿を現す。
全長がキロメートル単位でありそうな、超巨大な円盤型の飛行物体。
それが悠然と空を飛んでいる。
ああ、本物の馬鹿は何を考えるか分からない。
「ありえない」
すぐ近くにいたアリエルさんの呟きが、呆然としている私達の総意だろう。
私達が呆然として超巨大ＵＦＯを眺めていると、バッサバッサという羽音が聞こえてくる。
『オウ、ジーザス！こいつぁーどういう了見だー？蜘蛛の？』
でかいプテラノドンのような外見の風龍がアリエルさんに詰め

寄って来た。
この荒野の支配者である龍、その中でも一番強い個体。
『何もしねえってんで通るの許してたが、話がちげーじゃんよう！どういうこった説明しくされ！』
「うるさい、食べられたくなかったら、黙ってなさい！」
『ひっ!?』
三下口調で騒ぐ風龍を睨んで怒鳴る。
風龍は顔を隠してない私の目を直に覗き込んで短い悲鳴を上げる。
おっと、顔隠してなかった。
空洞のような目で見られたら怖いわよねぇ。
私が顔を白い布で隠して、周りを見る。
風龍だけでなく、白ちゃん達も私を見て顔を引きつらせている。
「どうしたの？この風龍美味しくなさそう？」
『俺に手を出せばあのお方が黙っちゃいねーぜ！』
「アリエルさんが責任取るから関係ないわね。喋ったから食べていいわよねぇ」
『ひっ!?』
「青ちゃん、勝手に私のせいにしないでくれない。それと食べたらだめだよ」
「一匹くらい良いじゃないですか。火龍と地龍は食べたことあるんですけど、風龍はないんですよねぇ」
私が風龍に一歩近づくと、風龍はアリエルさんの後ろに隠れるように移動してしまった。
アリエルさんに視線を向けると、首を横に振ってだめだと言ってくる。
食べれると思ったのに。
白ちゃん達全員が私を呆れた顔で見て来るので、私は小さくため息をついて諦める。
私が諦めたのを確認してアリエルさんが風龍に話しかける。
「ちょっと私達だけの手じゃ負えない気がするから、ギュリエを呼んできてくんない？」

『え、いいのか？あの方にかかれば蜘蛛のと言えどワンパンＫＯだぜ？』
「良いからはよ呼べ。あれが目に入んないの？」
アリエルさんが超巨大ＵＦＯを指さしながら風龍を急かす。
『見えてるに決まってんだろー？ていうかあれなんだって聞いてんねや！なんだよあれ？』
「私が聞きたいわ！あれこの荒野の下に埋まってたんだよ!?なんであんなのが地下にあって気が付かなかったのさ!?」
『え？』
風龍が口を開けて間抜けな顔になる。
この風龍、無能かな？
「いいか。お前のちっぽけな脳みそでも分かるように簡単に説明してやる。システム稼働前の時代の遺跡がこの荒野の地下に眠ってるのを私らはたまたま発見して、その調査をした。そしたら出てきたのがあれだ。わかった？」
『わかんねー！』
風龍は子供が駄々をこねるように、空中でもんどりうって全身で混乱してますって表現している。
無能確定だね。
「わかんなくてもいいからさっさとギュリエ呼べ！」
流石にイラっとしたのか、アリエルさんが風龍を軽く小突く。
勢い的にはぺしっという感じの軽いどつきだったんだけど、アリエルさんのステータスでやられた風龍は見事に墜落していった。
「・・・・・・」
アリエルさんは墜落していく風龍にしばらく視線を向け、キリっとした表情でＵＦＯに向き直った。
どうやらなかったことにするつもりらしい。
「無かったことにするなら私が食べたのに」
墜落していく風龍を見ながら呟いた私の言葉もアリエルさんは無視した。
私もため息をついて視線をＵＦＯに向ける。

流石にあれを落とすのは私達の手に負えない。
「あの、アリエルさん。どうするんですか？」
ソフィアがアリエルさんに抱えられたまま問いかける。
「どうしようか。ちょっとさすがにあれを落とすのは私でもきつい気がする。大人しくギュリエの到着を待つのがいいかも」
アリエルさんも弱気な発言をしているし、本当に私達の手に負えそうにない。
そもそもアリエルさんが無理ならシステム内の力ではどうしようもない。
腕の中でゴソゴソとアエルが動く。
視線を下げれば私の腕の中から脱出しようともがいていた。
サエルはＵＦＯをぽけーっと眺めたまま固まっている。
アエルには悪いが離すわけにはいかない。
「しばらくじっとしててね」
抜け出せないように腕の拘束を強くしながら声を掛ける。
アエルが抗議するように上目遣いで見上げて来るが、離すわけにはいかない。
ＵＦＯからこっちに何かが向かって来ている以上、人形達を解放するのは危険だからねぇ。
さっきの戦車と大差のない大きさの戦闘機が、遠目に虫の大群に見える多さで飛んでくる。
「撤退！」
アリエルさんが叫ぶと同時に私は戦闘機から遠ざかるように空中を駆け出す。
流石に私とアリエルさんと白ちゃんでも、あの数で責めてこられたら無理。
戦車に腐食攻撃が通じたことを考えると、私のブレスなら一撃で一部を消し飛ばせるだろうけど。
あんなにたくさんいると、あんまり意味がないでしょうしねぇ。
「イヤー、参った」
『オウ。やべーわ。あれやべーわ。やべーって』

戦闘機の群れを振り切った私達は、荒野の一角に着地してようやく一息ついた。
風龍も何とかついてきて無事だったようだ。
「で、ギュリエは呼んだの？」
『あ』
逃げるのに夢中で呼んでなかったみたい。
風龍が気まずげな表情でそっと視線を逸らした。
私は風龍の首を掴んでアリエルさんに問いかける。
「アリエルさん、食べていいですか？いいですよね？」
「落ち着こうか、青ちゃん。こいつにはまだギュリエ呼ぶ仕事が残ってるから！」
風龍の首を握りしめて揺さぶると、アリエルさんが私を止めようとしてくる。
「大丈夫ですよ。龍が死ねばギュリギュリにも伝わるようですから、様子見に来ますよ。こいつに呼ばせるより早くて、こいつを食べれる。良い提案でしょ」
「ああ、確かに。それならいいかな」
『蜘蛛の！助けて！今すぐ呼ぶから食べないでください！マジお願いします！』
「君が死ねば来るから、呼ばなくても大丈夫だよ。君は私が美味しく食べるから、君の死も無駄にならない」
『俺美味しくないから食べないでください！すぐに呼びますから、マジお願いします！』
「青ちゃん、こういってるしやめよっか」
「・・・・・・」
風龍のＨＰがかなり減ったのを見てアリエルさんが止めに入る。
私が不満そうな顔をアリエルさんに向けるが、布で顔が隠れているので見えていない。
それでも不満なことは伝わるほど、不満げな私に苦笑しながらもだめだと続ける。
仕方なく私はＨＰが大分減った風龍を地面に投げ捨てて、空納から

先ほどの蟻を取り出して食べる。
龍全種食べたかったのになぁ。

ＵＦＯ撃墜作戦

風龍を食べれなかったことで、私は空納から蟻を出して食べる。
ソフィアは白ちゃんにギュリギュリが誰なのか聞いている。
白ちゃんは普段まともに話さないのに、なぜか、白ちゃんに問いかけている。
普段は私に聞いて来るのに、どうしたんだろう？
私が蟻を食べてるからかな？
ソフィアの行動に首を傾げるが、聞いてこない理由があるのだろうと問いかけずに蟻を食べる。
なぜか、人形達も私に近づいて来ないし、白ちゃんも私に助けを求めてこないので大丈夫なのだろう。
ソフィア達の話を聞き流して、超巨大ＵＦＯの方に視線を向ける。
蟻を食べながら、超巨大ＵＦＯについて考え始める。
あのＵＦＯ、どれだけのＭＡエネルギーを使ってるんだろう。
戦車でさえ、私の体を壊せるほどの威力があったよねぇ。
ステータスだけでなくスキルがあるからダメージはほとんど入らなかったけど、危険なことに変わりわないわよねぇ。
平均ステータスが万を超える相手にダメージを与えられるってことは、人形達以上のエネルギーを保有してるのは間違いなさそう。
なら、あのＵＦＯは戦車よりはるかに多いエネルギーが使われているわよねぇ。
それにあれだけ多くの戦闘機を飛ばすエネルギーもあるわけだから、合計するとかなりの量になるのは間違いなさそうだねぇ。
ん？空間の揺らぎ？けど、ギュリギュリじゃなさそうだけど、誰だろう？
私や白ちゃんよりも拙い術式での転移の反応。
こんな荒野、しかもあんなものが出現している場所に好き好んでくるような奴はいないだろう。
そんな奴がいるとしたらただの自殺志願者か命知らずの大馬鹿のみだ。

さて、誰が転移してくるのかなぁ。
私達が空間の揺らぎに視線を向けると、空間を渡って二人の男が出て来た。
一人は空間転移を実行したと思われる、顔を布で隠したいかにも怪しい風体の男。
もう一人は、豪華な法衣っぽい服を着た老人。
明らかに怪しい二人。
目的によっては殺した方がいいかな。
まあ、私の目的の邪魔になるようなことはないと思うけどねぇ。
「失礼。非常事態と見て目の前に突然現れた非礼を謝りましょう」
お爺さんが場を和ませるかのような穏やかな笑みを浮かべながら謝罪する。
好々爺然としたその笑みを浮かべているが、こんな場所で浮かべている時点で普通ではない。
まともな精神の爺さんではないみたいねぇ。
実力も大したことなさそうだし、本当に精神のおかしい爺さんか。
「ダスティン。神言教の教皇がこの忙しい時に何の用？」
アリエルさんの知り合いだったんだ。
神言教の教皇とはまた随分と偉い人が出てきたものだねぇ。
「忙しい時だからこそ馳せ参じたのですよ。思うところはあるかもしれませんが、今はあれをどうにかするために一時休戦しませんか？」
「で？確かに今見たまんまやばい状況だけど。今さらあんたがしゃしゃり出てきて何ができるの？あれを相手にさあ」
アリエルさんが遠くの空に浮かぶＵＦＯを指さしながら言う。
確かに、精神がおかしかろうが、ただの人間にあれをどうにかする手段など無いだろう。
そもそも一国を余裕で滅ぼせる戦力である私、白ちゃん、アリエルさんの三人が揃っても厳しいのだ。
私達どころか人形でさえまともに対処できない人間に何ができるというのだろうか？
「私に出来ることでしたらなんでも。あれを放置しておくことはでき

ないでしょう」
「え？今なんでもって言った？」
「ええ」
何でもねぇ。
「なら、私のレベル上げに十万単位の人が欲しいんだけど出来る？」
「!?」
私の言葉に教皇は目を見開いて黙り込んでしまった。
何でもと言ったから提案したのにその反応はどうなんだろう。
「レベル上げって、十や二十上げても変わらないと思うんだけど？」
「そんなことも無いですよ。二十くらい上がればアリエルさんと同格か少し下くらいにはなれると思いますよ」
「え？」
アリエルさんの問いに答えると、アリエルさんの顔が引きつる。
どうしたのだろうか？
事実を伝えただけなんだけれど。
白ちゃんを除いて全員が驚き目を見開いて私を見ている。
本当にどうしたのだろう？
「いやいやいや、そんな訳ないでしょ！二十レベルで私に追いつけるなんていくら何でもおかしいでしょ!?」
「可能ですよ。けど、今の私がレベルを上げようとすると、たくさん殺す必要があるんですけどねぇ」
私の言葉にアリエルさんは白ちゃんに本当か確認するために視線を向ける。
白ちゃんは私の悟りの支配者について知っているので、アリエルさんに頷いて返す。
私のことをよく知っている白ちゃんが頷いて返したことで本当のことだと理解したようだ。
アリエルさんが私に視線を戻す。
「もし、三十レベル上げたらどうなるの？」
「どうでしょう。全ステータスがカンストするんじゃないですか？」
「・・・・・・・」

最近はレベルがほとんど上がらないので何とも言えないが、ステータスの伸び方から考えておそらくカンストするだろう。
アルティメット・スライムになってからレベルアップのボーナスが異常に増えてきている。
どういう計算で増えているのか分からないが、この最近のレベルアップのボーナスから考えれば間違いないだろう。
「ダスティン。用意しないでね。絶対に用意しないでね」
「言われなくとも、十万単位の人の命を捧げさせるなど、無理です」
「やっぱり、無理なんだぁ」
「分かっていたのですか？」
「何となくですけどねぇ。まあ、あんまり人を殺すとうるさい人がいるので、やりませんから安心してください」
「ありがとうございます」
礼を言う相手が私なのはどうしてだろう。
普通は、私に人を殺させない人に対して言うべきじゃないかなぁ。
「あれは私が対処すべき案件で、貴様らが憂慮すべき事柄ではない」
私達が話していると、ギュリギュリが転移してきたようだ。
「あなたに任せられるなら苦労しないんだけどねぇ」
「どういう意味だ？」
「どこかの部外者から余計な干渉があるかもってことですよ」
私の言葉に白ちゃんとギュリギュリは気づいたようだが、他の人達は首を傾げている。
もしくは勘違いしているでしょうねぇ。
まあ、やってくるとしたらギュリギュリが手伝えない状況に追い込むくらいかなぁ。
つまり、あのＵＦＯを私達の力で落とす必要が出てくると言うことになる。
干渉してくれれば、私達でもギリギリ落とせることの証明だろう。
流石に不可能なことを押し付けて楽しみを減らすような真似はしないだろうからねぇ。
私達が外部からの干渉について考えていると、空間の揺らぎを感知

した。
その揺らぎに私達が視線を向けると、耳の長いエルフと思われる男が出て来る。
「役者はそろっているようだな」
現れた男に対して、この場にいる私以外の全員が殺気を向ける。
すごい嫌われようだねぇ。
アリエルさん達の態度から察するに、こいつがポティマスかな。
「そういきり立つな。今回は手助けに来たのだ」
殺気を浴びても、ポティマスは平然としている。
「残念ながら、あれはギュリエディストディエスだけではどうにもできん。我ら全員が力を合わせる必要がある。大変遺憾なことであるがな」
ポティマスがあの邪神の性格を知っているわけがないから、違う理由でギュリギュリが手出し出来ないのかな？
私が知る限り最強の魔物、原初の蜘蛛にして魔王。
人族最大宗教のトップ、神言教教皇。
この世界の管理者にして神。
そして古代機械技術を持つエルフの族長。
そうそうたる面子が、そろったものだねぇ。
彼らのせいで雰囲気が最悪、ピリピリした空気が漂う。
その空気に耐えかねたのか、ソフィアや人形達は早々に離れたところに避難する。
アリエルさんに捕まり私と白ちゃんはアリエルさんの傍にいる。
私はどっちでも良かったから良いが、白ちゃんは嫌々参加しているために私の後ろに隠れている。
そして何かしていないと落ち着かないのか、先ほどから私の髪をいじっている。
「で？ギュリエだけじゃどうにもできないってどういうこと？ていうか、なんであんたがここにいんのさ？あれか？私に殺されにノコノコ出てきたの？」
「アリエルさん、今はどうでもいいこと言わないでください。時間の

無駄です。ポティマス、知っていることがあるなら情報の共有を」
「ふ。どうやら付き人の方が優秀なようだな」
ポティマスが皮肉気な笑みを浮かべてアリエルさんに馬鹿にするような視線を送る。
「面倒なので煽らないでください。あなたが死んで戻ってくるまでの時間が無駄です」
「ふ。それもそうだな。これを見ろ」
ポティマスが懐から手のひらに乗るくらいのボールっぽいものを取り出す。
ボールの中心には丸い穴が開いていて、そこから光が漏れ出し、何もない空中に立体映像が映し出される。
映し出された映像はあのＵＦＯ。
「これは？」
ギュリギュリが困惑したように尋ねる。
「あのＵＦＯの設計図でしょうね。それで、あれの危険度と管理者にも対処できない理由は？」
「どうして貴様がそれを持っている？」
私の問いを遮るように教皇がどうでもいいことをポティマスに問いかける。
はあ、色々事情があるのだろうが、邪魔だなぁ。
「教皇、そんな分かり切った問いは後にしてください。あれの情報を聞くのが先でしょう。あれに暴れられて困るからここに来たんですよね。いつ暴れるか分からないのですから、時間の無駄は後にしてください」
「す、すまない」
「ふ。では、説明しよう」
教皇に言いながら他の面子にも時間の無駄になるようなことはしないように忠告する。
ポティマスは先ほどアリエルさんに向けたのと同じ笑みを教皇に向けた後に、ＵＦＯについての説明を始める。
「あれは開発コードＧフリート。あれは放置しておくと、この星を壊

しかねない」
「それはGフリートに搭載されている兵器によるものですか」
「Gフリート自体にそこまでの破壊性能はない。問題なのは、Gフリートに搭載されているであろう爆弾だ」
ポティマスが手に持った立体映像を投影するボールを撫でる。
すると、表示されていた立体映像が切り替わり、球体を映し出す。
ポティマスが今持っている立体映像装置と大差のない、小さなボール。
「GMA爆弾。MAエネルギーを取り込み、その量によって破壊力が増減する」
ポティマスが爆弾の説明を簡潔にする。
MAエネルギーという単語にみんなが反応した。
「GMA爆弾はいくつあるか分かりますか?それと最悪の場合の威力も分かりますか?」
「個数に関しては一つは確実にあると考えていい。威力に関しては、シミュレーションの結果ではおそらくこの大陸が吹き飛ぶくらいで被害は抑えられる」
「なるほど。では、あれがGMA爆弾をすぐに落とす可能性は?」
「GMA爆弾はGフリートの予備燃料でもある。緊急の場合でなければ落とすことはないだろう。Gフリートが能動的にGMA爆弾を落とす場合、爆発に巻き込まれないように大気圏外のはるか上空に移動するように設計されている。それがないということは、能動的にGMA爆弾を落とそうとしてないということだ」
なるほど、一応考えられて設計されているようだ。
予備燃料を兵器として使う緊急の場合ねぇ。
だから、ギュリギュリだと対処出来ないわけねぇ。
「真なる龍が近づく以外でGMA爆弾を落とす条件はありますか」
「龍と相対した時以外だと、Gフリートが撃墜された時だな」
私とポティマスの会話に周りがついて来れてないようだが、気にせずに続ける。
「Gフリートについては分かりました。では、あれが出てくる前に空

に昇って行ったものは何ですか？」
「話が早くて助かる」
「あまり時間はなさそうですからね」
ポティマスが立体映像装置を操作して映像を切り替える。
次に出てきたのはタコっぽい多脚の機械。
「あれはGメテオ。月と月の間にある小惑星を牽引してきて、この星に落とすという戦略破壊兵器だ」
「そういうことですか。ギュリギュリ、貴方はこの兵器を対処して来てください」
「Gメテオの対処はするが、Gフリートを処理してからではだめなのか？」
「GMA爆弾がある以上やめておいた方がいいでしょう。GMA爆弾でギュリギュリがどうこうなるとは思いませんが、下手に落とされて星のMAエネルギーを吸われるのは問題でしょう」
私の言葉にギュリギュリは反論できずに黙る。
ギュリギュリが黙ったのを確認して私は続ける。
「それに、私達で潜入して爆弾を処理すれば、後は問題なく対処できるでしょう」
「分かった」
ギュリギュリが納得したのを確認してから私はポティマスに最後の質問をする。
「それで、Gフリートの軍勢は今どうしてますか？」
ここに来る前に逃げて来た戦闘機の群れ、あれだけとも思えない以上確認は必要だでしょう。
私達を追ってきていないということは違う場所を襲っている可能性もあるしねぇ。
ポティマスが立体映像装置を操作して映像を切り替える。
映像はどこかのライブ映像のようだ。
「うわ」
思わずと言った感じでアリエルさんが声を漏らす。
映し出された映像には、地上に続々とロボットを排出するUFOの

姿だった。
地上ギリギリまで高度を落としたＵＦＯが、ハッチを開けて地上への通路を伸ばし、そこからロボットが出て来ている。
その中には戦車の姿もあり、ロボットの数は少なくとも数千、下手すれば万単位でいそうだ。
外に出たロボットは隊列を組んで前進している。
「見ての通り、Ｇフリートの軍勢は進軍を開始している。進行方向、そして現在の速度から換算すると、半日後には人里に到着するな」
ああ、やっぱりかぁ。

ＵＦＯの中に入るぞ!?

私は知りたい情報を知り、ＵＦＯに潜入する班に選ばれたので白ちゃんと一緒にその場から離れる。
ロボットの軍勢をどうするかなどの話し合いは四人に丸投げになるが、知ったことではない。
あのロボットの軍勢が相手だと、あの子達は力不足だしねぇ。
あの子達で一番強い個体であるレッサーアストラル・キングスライムでもアリエルさんのクイーンタラテクトより、弱いのだ。
人形達よりは強いが、一体だけでは全然頼れない。
戦力としては微妙なところなので、まだ温存しておくべきでしょうねぇ。
会合が終わってから私達はそれぞれの準備を済ませていた。
まず、メラやソフィアをエルロー大迷宮に避難させた。
流石に、二人を戦闘に参加させるわけにはいかないし、適当な町に置いておくのも危険だからだ。
ポティマスが爆弾の処理でＵＦＯに潜入するからといって、その間に二人を狙ってこないとも限らない。
なので、エルロー大迷宮の下層にある私の古巣であの子達と白ちゃんの眷属に任せている。
現状、エルロー大迷宮であの護衛を突破出来る魔物はいない。
二人をさらうためにエルフ達がエルロー大迷宮を突破してくるのも難しいだろう。
あの古巣なら快適に過ごせるでしょう。
龍並みに強い魔物の群れに囲まれていることを除けばだけどねぇ。
その後は、人形達の攻撃力の強化。
地下の遺跡で最初に出て来たロボット程度なら問題なく蹴散らせるが、戦車となれば話は違う。
攻撃力だけでも万を超える戦車の防御力が低いとは思えない。
私の大鎌が異常だっただけで、人形達が簡単に壊せるとは思えない。

人形達の持つ武器も業物ではあるが、剣ではあの装甲を突破するのは難しい。
金属の装甲を剣で斬ろうなんて簡単ではない。
なら、ぶっ叩いて壊せばいいでしょ。
それが私と白ちゃんが出した結論だった。
そこで私の神金生成で作る神金が十全に使われる。
打撃力として必要な質量は神重鉛を中に仕込み重くする。
そして神重鉛を神鉄鋼で包み、柄も神鉄鋼で作る。
ポティマスの魔法の一切を無力化する結界を張ってくるロボットも居るかもしれないとのことだったが、問題ないだろう。
神金は魔力で重さが変わったりするが、魔術ではなく金属そのものの性質だから、魔法を消されても消えることはないだろう。
そもそも神鉄鋼は魔力を込めてなくても異常に硬いし大丈夫でしょう。
仮に魔力を込めたことによる効力が消えたとしても軽くなるだけで、強度は変わらないから問題ないしょ。
人形達は使いなれない武器のためか、重さを調整しながら素振りをして感触を確かめている。
本番までには慣れてくれるでしょう。
そしてアリエルさんはクイーンタラテクトを四体召喚していた。
あのマザーと同格の存在が四体もいるのだ。
アリエルさんの軍勢がここまでとは流石に思っていなかった。
「さすがに今回は出し惜しみしてられないからね。最高戦力総出で行くよ」
私は戦力を温存してるので、アリエルさんから視線を逸らす。
クイーンタラテクト以外に風龍率いる龍、竜の群れも居る。
ここに居る戦力が人族を襲おうものならあっという間に人族は滅びているだろうねぇ。
教皇が軍を連れてくるために戻ったが、本当に必要なのかと思うのは私だけじゃないはずだ。
そんなことを考えていると、教皇が三万の軍を率いて戻って来た。

その後に教皇が行っていた演説によると、大規模転移を行った術者は死んだらしい。
戦力としては役に立つか分からに軍だけど、士気が異常に高い。
普通はこんな怪獣大戦争でもするのかって戦力を前にすれば、自分たちの必要性を疑うものだろう。
全滅もあり得そうなこの状況で士気が落ちないのはすごい。
あの教皇、人心をよく理解してるねぇ。
仮にも神言教の教皇なだけのことはあるねぇ。
「どうやら、私が最後だったようだな」
そして最後にポティマスが機械兵を連れて戻って来た。
数は歩兵が二千くらいで、そこまで多くない。
「これで揃ったね」
ああ、これで漸くＵＦＯに突撃することが出来る。
「じゃあ、私と白ちゃん、青ちゃん、あとついででポティマスがあれに突撃するってことでＯＫ？」
「ああ」
白ちゃんは乗り気じゃないみたいだけど、アリエルさんに頷いて返す。
私もアリエルさんに頷いて返し、次の言葉を待つ。
「で、どうやって侵入するの？」
「これを使って外壁に穴を開ける」
ポティマスが指さしたのは、バズーカにしか見えない筒。
「一回使い捨ての砲だ。が、威力は保証する。これならばＧフリートの外壁にも穴を開けられるはずだ」
「で？これ誰が持っていくの？」
「アリエルかそこの白、もしくは青とかいうのに任せる。このボディでは持ち運ぶことはできるだろうが、照準を定めるのには少々パワー不足なのでな」
ああ、これ明らかに罠だねぇ。
わざわざ、照準を定めることの出来ない体で来たってことは、私達を殺す気満々だねぇ。

まあ、私がやった方がいいねぇ。
「じゃあ、私がやります」
ポティマスからバズーカを受け取り、空納にしまう。
私がバズーカを空納に入れていると、白ちゃんが近くにいた風龍の背中に乗っていた。
それを見てアリエルさんとポティマスも違う龍の背中に乗る。
私は白ちゃんに手招きされたので、白ちゃんが乗っている風龍の背中に乗るために近づいたら逃げられた。
「なんで逃げるの？」
『た、食べないでください！お願いします！』
「大人しく、私達をＵＦＯまで運ばないと食べるよ？」
『はい！喜んで運ばせていただきます！』
そんなに私が怖いのかな？
先ほどまで、白ちゃんに対して文句を言って振り落とそうとしていたのに、急に大人しくなった。
まあ、大人しいなら困らないので風龍に乗っている白ちゃんの背中に乗る。
地上のことは残る者達に丸投げしてＵＦＯを目指して飛び立つ。
さあ、楽しみましょうか。
魔法を封じる結界が張られてもいいように顔を隠している布を取る。
空を飛んでＵＦＯを目指しているため、当然のように戦闘機が襲い掛かってくる。
まあ、移動を風龍に任せているので、私と白ちゃんが迎撃している。
正確には、私が戦闘機の攻撃を全て握り潰し、腕を伸ばして届く範囲の戦闘機を全て握り潰し、貫き落としていく。
白ちゃんは風龍と一緒に風魔法で戦闘機を撃墜している。
元から存在しているものを操る魔法なら効くんだねぇ。
戦闘機に張られている結界の弱点が分かったが、私は全て物理攻撃で叩き落しているのであまり関係がない。
私達だけを見ればかなり優勢に見えるだろうが、実際はそうでもな

い。
その証拠に私達は未だに戦闘機を振り切れていない。
今のところ五分五分だけど、長期戦になればこっちが不利になるねぇ。
かなり撃墜したのに戦闘機が減っているように思えないし。
私が全力で暴れれば一掃できるけど、足場が不安だし、龍が邪魔になる。
それに、あんまり手の内は見せたくないしねぇ。
『青の姐さん』
「姐さん？」
予想外の呼び方に思わず聞き返してしまった。
『例の物を取り出しておいてください』
何か風龍が役目だのなんだのいいことを言って特攻をかけようとしている。
しかし、風龍が特攻をする前にアリエルさんが戦闘機を足場にして跳びまわり、一瞬のうちに大量の戦闘機を撃墜していく。
折角、風龍が良いこと言ってたのに、可哀想だねぇ。
そして、アリエルさんのステータスの暴力怖いなぁ。
アリエルさんが戦闘機を大量に撃墜したことで、かなり優勢になった。
戦闘機はアリエルさんを警戒して近づかなくなったために、先ほどのように一気に撃墜出来なくもなったが、それでもかなり優勢だ。
周囲の様子を探り、ＵＦＯが何か準備しているのを確認して全ての龍に念話を送る。
『総員全力回避！』
私の念話に従って回避した龍もそれなりにいたが、それでも被害は大きい。
空が一瞬だけ光で埋め尽くされたと思うほどの極太の光線が戦闘機を巻き込んで龍達を飲み込む。
光線が消えた後には何も残っていなかった。
ポティマスの奴、危険な武装の情報は共有しとこうよなぁ。

『青いの』
心の中で文句を言った張本人から念話が飛んできた。
『敵主砲に向けて私が預けたものを使え。それで破壊できるはずだ』
『分かった』
『おう。じゃあ、あの主砲に向けて飛べばいいんだな？』
『いい。邪魔だから少し離れてて』
『は？』
私の予想外の言葉に風龍が間抜けな声で念話を送ってくる。
白ちゃんも首を傾げているが、気にせずに私は空間機動で主砲に向かって跳ぶ。
結界で消されるかもしれないが、戦闘機の表面だけにしか張れないようなら少しの間なら大丈夫なはずだ。
ＵＦＯに近づいて自由落下を始めたのを確認してバズーカをＵＦＯの主砲目掛けて撃つ。
バズーカから放たれた光線がＵＦＯの主砲とその奥の壁を破壊するのを確認して私の上半身はバズーカの持ち手から漏れ出した光に飲まれる。
光に全身が飲まれる前に、残った下半身の体積が急激に膨張し逆にバズーカの光を飲み込む。
球状のスライムの体を縮めながら自由落下していくと、風龍の背中に乗った白ちゃんに受け止められた。
「青ちゃん、大丈夫？」
『大丈夫だよ』
白ちゃんに念話で返事をしながら人化する。
人化してすぐに空納から服を取り出そうとしたが、その手を止める。
あれ？和服が消えてない。
まさか・・・・・・
和服が消えなかった理由に思い当たることがあったが、気にしている状況ではないので鑑定は後回しにする。
どうせ、どこかの邪神が何かしたのだろうと思考を終わらせて白

ちゃんに視線を向ける。
「もう全快してるから大丈夫だよ」
『!?』
私の言葉が信じられなかったのか白ちゃんに鑑定をされるが、私の言葉が本当だと分かると変な目で見られる。
正直な話、予想通りだったので何の問題もない。
けど、白ちゃんに心配かけちゃったなぁ。
『大丈夫なのか?』
『大丈夫だから、さっさとあそこに向かって』
風龍にバズーカで開けた穴を指さして言う。
漸く、ＵＦＯの中に入れるねぇ。

目的達成!?

漸く、私達がＵＦＯの中に入ると、先に乗り込んでいたポティマスが佇んでいた。
「ふむ。生き延びたか」
そんなことを言って来たが、正直どうでもいいので無視してＵＦＯの中を見回す。
今のところ侵入者である私達に対処する部隊は出て来てないようだ。
それでも、これだけ派手に壁をぶっ壊して侵入しているわけだし、出て来るのも時間の問題か。
ＵＦＯ内に結界の効果がないからスキルも問題なく使える。
問題はどれだけのロボットを残しているか。
アリエルさんが居るから余程ふざけたロボットが出てこない限り問題ない。
地上の部隊を見た限りでは、戦車クラスが量産型では一番だろうから、問題ない。
さて、そろそろ終わったかなぁ。
私が視線を白ちゃん達に戻すと、白ちゃんとアリエルさんがポティマスを踏みつけていた。
先ほどまで私がバズーカに巻き込まれて怒って大鎌で襲い掛かっていたが、今はアリエルさんによって地面にめり込んでいる、ポティマス。
そして今は動けないポティマスを白ちゃんが踏みつけている。
「青ちゃんも踏んどく？」
「私は良いですよ。白ちゃんが代わりに踏んでますし」
「遠慮しなくていいんだよ」
「いえ、遠慮してるわけじゃないですよ」
「そう。いいなら、いいけど」
アリエルさんの提案を断り、未だにポティマスを踏みつけている白ちゃんに視線を向ける。

アリエルさんは私が断ったのが意外だったようだが、そもそもこんなのに興味が無い。
バズーカの仕組みも予想通りだったし、どうせこの後も何かしてくるのは分かっている。
そんなことより、私が驚いたのはいつの間にか改造されていた和服の方だ。
あの邪神の気まぐれな行動の方が気になってしょうがない。
全く、私の最高傑作を何度も改造しないで欲しいものだねぇ。
最高傑作を改造されたことに落ち込みながらも、性能が上がったことは嬉しい。
何とも言えない感情がこみあげて来るが、今は感情を殺そう。
そんなことを考えていると、白ちゃんがポティマスの尻に足を突き刺していた。
そしてポティマスはサイボーグの体に立派な尻穴が出来る。
アリエルさんはそれを見て爆笑し、龍達は完全に引いている。
ポティマスは屈辱からかなり怒っている。
「ねぇ、どうでもいいから、早く進もうよ」
「どうでもいいだと!?」
「時間がそんなにないんだから、どうでもいいことでもめないでくれる」
「ぐっ！確かに、今はその時ではない。隙あらば貴様らの命を狙いはするが、優先順位は事態の解決の方が上だ」
「なら、さっさと行きますよ。アリエルさんも、笑ってないで進みますよ」
「そうだね、じゃあ進みますか。と言っても、どうやらその前に歓迎会が開かれるぽいけど」
「見たいですねぇ」
アリエルさんが奥を睨みつける。
私もアリエルさんと同じように視線を奥に向ける。
そこから侵入者を迎撃するための部隊が出て来た。
ロボットの数は多いが、ＵＦＯに潜入した私達が強すぎるせいで暇

だ。
私が腕を伸ばして薙ぎ払うだけで、かなりの数が減る。
そこにアリエルさんと白ちゃん、ついでにポティマスも居る。
壊してもどんどん出て来るので、ほとんど流れ作業になっている。
白ちゃんに関しては大鎌に糸を括り付けて鎖鎌にして遊んでいる。
はあ、私も遊ぼっと。
流れ作業が続いたせいで、飽きてしまった。
空納から大鎌を取り出し、白ちゃんと同じように鎖鎌をしてロボットを壊す。
暇を潰していると、白ちゃんが大鎌から黒い靄を出して薙ぎ払った。
黒い霧に薙ぎ払われたロボットと戦車は塵になって消えていく。
もしかして、腐食属性って結界で無力化されないのか？
だとしたら、私のブレスで一掃出来なくもないのか。
まあ、下手にブレスを撃って爆弾が爆発したら困るからやめておこう。
先ほどの攻撃に驚いたアリエルさんとポティマスが白ちゃんに視線を向けるが、動揺しないようにポーカーフェイスを保っていた。
さっきのは偶然だったわけねぇ。
まあ、一緒に作った私でもあんな効果知らないし、当然か。
白ちゃんが頑張ってポーカーフェイスをしていると、ロボットが追加される。
どうやらまだまだいるらしい。
「白ちゃんが本気をみせてるのに、私がいつまでも温存してるっていうのは割に合わないかな」
アリエルさんが物凄いスピードで新手のロボットや戦車に近づいて一瞬でスクラップにしていく。
力によるごり押しであっという間にロボットを殲滅する。
ポティマスを警戒して余力を残していたのだろうけど、さっさと本気を出して欲しかった。
まあ、本気を出してない私が言えたことではないんだけどねぇ。

「追加はなさそうだな。行くぞ」
追加のロボットが来ないのを確認して、ポティマスがさっさと歩きだす。
私達もその背中を追っていく。
そこから先はポティマスの案内で進み、出て来たロボットや戦車をアリエルさんが瞬殺する。
なので、私と白ちゃんはほとんど何もしなくて良くなった。
それでもＵＦＯが無駄に大きいせいで移動に時間がかかったが、目的の場所に到着した。
扉の先に爆弾があり、ポティマスが爆弾をロックする。
その間に私達が防衛システムに対処することを決めてポティマスが扉を開く。
扉の先は殺風景な円形の部屋で、中心にごてごてとした感じの柱がある。
「はあ、最悪」
「馬鹿な」
ポティマスが驚いているということは状況を理解したようだねぇ。
予想していた中で一番最悪なパターンだ。
ごてごてしたものが、展開されて無数の銃口になる。
そして立ち上がり、歪な柱が歪なロボットに変わった。
ポティマスは歪なロボットに心当たりがあるのか何か呟いてアリエルさんに説明している。
正直、あのロボットが何なのかなんて興味が無い。
私達にかかればロボットを倒すことは難しくないだろうが、今回は訳が違う。
あの歪なロボットの中に爆弾がある以上、下手な手出しが出来ない。
ポティマスが状況を説明し、最悪な状況だと言うことをアリエルさんと白ちゃんも理解したようだ。
「作戦ターイム！」
歪なロボットが攻撃して来ないのをいいことに、堂々と目の前で作

戦会議を始める。
作戦会議を始めたは良いもののアリエルさんもポティマスも良い案が無いようで黙り込む。
そして白ちゃんが少し不自然な動きをしたので視線を向けると、スマホを手に持って耳に当てていた。
どうやら、あの邪神が干渉して来たみたいねぇ。
だとしたら、ギュリギュリは助けに来ないね。
それにしても白ちゃんをあまり虐めないでくれるかなぁ。
会話が終わったら慰めてあげよう。
白ちゃんの持っていたスマホが消えたのを確認して私は白ちゃんに近づく。
「白ちゃん、大丈夫？」
私が白ちゃんに問いかけると、何を思ったのか白ちゃんが抱き着いて来た。
そんなに怖かったのかな？
よしよし、もう大丈夫だよぉ。
心の中で適当なことを言いつつ白ちゃんを抱きしめて頭を撫でてあげる。
白ちゃんが落ち着くまで優しく頭を撫で続ける。
全く、Dは余計なことばかりしてぇ。
本当に許せないねぇ。
「そろそろその茶番を終わらせたらどうだ？」
冷ややかな目で私達のことを見て来るポティマスを睨みつける。
一体何が茶番だって？
そんなに塵にされたいのかな？
ポティマスが余計なことを言ったせいで白ちゃんが離れてしまった。
よし、後で塵にしよう。
「さて、白ちゃんが落ち着いたところで、作戦会議を再解しようか」
作戦会議なんて言っているが、作戦何て一つしかないだろうに。
「先に言っておくけど、ギュリギュリは助けに来ないですよ」

「どういうことだ？詳しく説明しろ」
「ギュリギュリにはどうしようもない奴からの干渉を受けただけ」
「ギュリギュリは大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ。助けにこれないだけです」
あの邪神も言うことを聞いているうちは殺したりしないだろう。
まあ、ギュリギュリが余計なことをすれば殺されるかもしれないけどねぇ。
「そんなことより、ポティマス。あれをハッキングして無力化してください。その間の護衛は私達でやります」
「分かった。ただし、ハッキングにはそれなりに時間がかかる。その間、ボディとコードを守れ」
私の言葉にポティマスはハッキング用のコードを部屋の中に伸ばしていく。
「白ちゃんと青ちゃんはポティマスを守ってて。私はコードを守るから」
アリエルさんは部屋の中に伸びて行ったコードを見ながら言う。
そして歪なロボットは部屋の中に入って来たコードに対して攻撃を仕掛けるが、一瞬で部屋の中に入っていったアリエルさんが暴食で全ての攻撃を捕食する。
うわー、やっぱり、暴食チートだなぁ。
いいなぁ、チートスキル。
私なんて成長チートしかないってのに。
コードだけでなくこちらにも攻撃が飛んでくるが、私が腕を伸ばして握り潰し。
私が防ぎきれなかったものを白ちゃんが扉を盾にして気力付与と魔力付与で強化して防ぐ。
コードが歪なロボットに繋がると、アリエルさんが糸で拘束する。
作戦会議をしていたが、予想外に呆気なく終わった。
後は、そろそろポティマスが裏切るころだろう。
「白ちゃん！青ちゃん！」
アリエルさんの叫び声が聞こえたが、それよりも先に違和感に襲わ

れた。
以前に白ちゃんに聞いたポティマスが魔法を無力化する結界に取り込まれたようだ。
予想通り、裏切ったねぇ。
ステータスが下がったせいで普段より、体が重く感じる。
背後でポティマスが動くのを感じ、白ちゃんをかばおうとした。
しかし、私より先にアリエルさんが白ちゃんを突き飛ばし、私も一緒に突き飛ばして光線に貫かれる。
全く、アリエルさんはお人好しだねぇ。
白ちゃんとは因縁があるだろうに、わざわざかばうなんて。
私なら白ちゃんを助けられるって分からなかったのかなぁ。
はあ、嫌になるなぁ。
心の中でため息をつきながら倒れたアリエルさんを見る。
私達をかばったことで窮地に立たされているアリエルさん。
歪なロボットとポティマスがアリエルさんに銃口を向ける。
白ちゃんがアリエルさんをかばうために動き出そうとしている。
全くもって嫌だなぁ。
借りを作るなんて、初めてだ。
馬鹿だよねぇ、アリエルさん。
かばったて見捨てられる可能性の方が高いのに。
まあ、恩を売ろうって、下心のある行動なら見捨てたかなぁ。
命がけで助けてくれたんだ。
私も久しぶりに本気を出そうかな。
無駄を一切排除し、気配を完全に消した動きでポティマスの背後に回り込む。
動けないアリエルさんを撃とうとしているポティマスの両腕両足を一瞬で砕き、頭を掴んで歪なロボットにぶん投げる。
私の行動にポティマスだけでなく、アリエルさんと白ちゃんも驚いているが気にせずに地面を蹴る。
ポティマスは歪なロボットの攻撃を受けて体を砕かれる。
それにより、違和感が消える。

結界が解けたようねぇ。
結界が解けたのを確認し、神龍力と魔神法を発動させて歪なロボットを壁まで吹き飛ばす。
壁に叩きつけられた歪なロボットを大鎌で斬り裂いて塵にする。
その塵の中に二つの丸い物体を見つける。
みーつけった。
私は背後から白ちゃんが近づいてきているのを気にしつつ塵の中にある丸い物体を一つ手に取る。
私が手に取ったからか、白ちゃんも落ちていたもう一つを手に取る。
持ち上げてから爆弾だと言うことに気づいたようだ。
爆発しないのに気付いて胸をなでおろす。
「やってくれたな」
「それはこっちのセリフだってーの」
「いけると思ったのだがな。ままならないものだ」
「ざんねんでしたー！私達の友情パワーの前には敵わんのだよ！」
友情パワーねぇ。
まあ、歪なロボットの流れ弾から白ちゃんがアリエルさんを守ってたみたいだし、間違ってはないのかな？
「まあ、それ以前の問題でしたけどねぇ」
「え？」
「どういうことだ？」
「気付いてなかったんですか？」
私の言葉に全員が私に視線を向ける。
白ちゃんも不思議そうに首を傾げている。
「ここに来るまでのほぼ全てが、私の予想通りですよ」
私の言葉に全員が目を見開いて私のことを見る。
気づく機会ならいくらでもあっただろうに。
「いつからだ。いつからがお前の予想通りだというんだ」
「あなたにＧＭＡ爆弾とＵＦＯの話を聞いた時からですよ。細かい内容を除けば大体が予想通りです。唯一、予想外だったのは、アリエル

さんにかばわれたことくらいですね」
「なら、貴様は私があのタイミングで裏切ることも分かっていたというのか!?」
「ええ、白ちゃんをかばって反撃であなたを壊そうとしてたんですがねぇ」
「侵入する時のあの砲も分かっていて使ったのか?」
「そうだと言ってるでしょう。ちなみに余剰エネルギーはしっかり吸収させてもらいました」
「!?」
ポティマスの質問に対する私の言葉に全員が何も言えずに目を見開く。
白ちゃんもアリエルさんも私がエネルギーを吸収できるなんて知らなかったのだろうしねぇ。
まあ、私がエネルギーを吸収できると分かったのは地下の遺跡でサエルを助けた時だから知らなくて当然か。
あの時、砲弾を砕いて取り込んだ時にエネルギーを吸収できるか試して成功した。
エネルギーが吸収できると分かってなかったら、わざわざロボットの銃弾や砲弾を握り潰したりしない。
「最初から私はこれが目的だったんですよ」
私は手に持ったＧＭＡ爆弾を見せながら続ける。
「しかし、これを安全に回収するのは面倒そうだったので、あなたを利用したわけです。今回、あなたの目的は爆弾のロックとＵＦＯの鹵獲でしょう」
「なぜそれを!?」
「馬鹿ですねぇ。あなたは最初から私の手のひらの上で踊ってただけってことですよ。予定通り動いてくれてありがとうございます」
「!?」
首だけになったポティマスを見下し、馬鹿にするような顔で言ってやる。
余程悔しいのか、白ちゃんに尻に穴を開けられた時と同じように怒

りの表情を浮かべている。
どんなに悔しかろうが、ただ踊らされた馬鹿である真実は変わらない。
私の表情にアリエルさんが少し引きながら問いかけて来る。
「えっと、青ちゃんはそれをどうする気なの？」
どうする気っと言われても答えに悩むよねぇ。
アリエルさんの問いに何と答えようか悩んでいると、私と白ちゃんが持っている爆弾が発光し始めた。
「まさか、爆発する！」
「Ｇフリートが遠隔操作でロックを解除しようとしている。それどころか航行のためのエネルギーを注ぎ込んでいる。自爆するつもりだ」
「ふふ、アリエルさん。どうする気の答えがこれです」
「え？」
アリエルさんの問いへの答えとして私は爆弾を飲み込んだ。
今までと同じように爆弾のエネルギーを吸収する。
隣で、白ちゃんがてんぱり過ぎて爆弾を食べていた。
私が食べたから真似したのかな？
白ちゃんがエネルギーを吸収できるか分からないが、白ちゃんならやるだろうと信じてエネルギーの吸収に集中する。
今までとは違い膨大なエネルギーを一気に吸収することになる。
吸収しきる前に爆発されたら流石に困るからねぇ。
《熟練度が一定に達しました。スキル『神性領域拡張ＬＶ９』が『神性領域拡張ＬＶ１０』になりました。》
《条件を満たしました。神化を開始します》
メッセージが聞こえた直後に、私の体を激痛が襲う。
痛覚無効を無視した痛みに襲われる。
痛みに耐えられなかったら死ぬということが本能的に分かった。
同時に、膨大なエネルギーが体内を満たしているのを理解出来た。
このエネルギーが馴染めば、私は神になれる。
痛みに耐えるだけなんて、簡単だねぇ。
体内のエネルギーが私と繋がっている大鎌と和服にも流れていく。

それだけでなく、遠くに離れた何かにも流れていくが洩れるのを止める。
少し流れて行ったが、少しくらいなら大丈夫だでしょう。
大鎌と和服にはかなり流れてしまったが、今は良しとしておこう。
『緊急措置をしましょう』
Ｄの声。
緊急措置ってことは予想外だったのか。
また、あいつを喜ばせる結果になったわけかぁ。
《スキルを還元します》
《ステータスを還元します》
《称号を還元します》
《スキルポイントを還元します》
《経験値を還元します》
《Ｄ謹製『神の基本講座』をインストールします》
《神化を終了します。これ以降システムサポートを一切受けられません。ご利用ありがとうございました》

神の領域へ至った者達

「本当にあなた達は面白い」
綺麗だけど感情を感じられない平坦な声が、すぐ近くから聞こえた。
その声を誰が発したのかはすぐに分かった。
だから、私は心を空っぽにして何も考えずに寝たふりをする。
「まさかあそこで食べるなんて行動に出るとは。流石の私にも予測不可能でしたよ」
相変わらず、全く感情を感じられない平坦な声で話し続ける。
どうしてここに居るのか、その気になれば予測出来ただろうにっと思うことをせず、何も考えずに聞き流す。
「あのままだと爆発する恐れもありましたので、一時的に私のところに避難させました。爆発せずに無事力をものにしたようなので、杞憂でしたが」
話の内容だけは理解して、一切反応しない。
変に反応すれば喜ばせるだけだと、知っているからこそ何も反応しない。
声は白ちゃんの疑問に答えているようだ。
「スライムさん、無視し続けるのは酷くないですか？」
・・・・・・・・・・・・・・・
白ちゃんへの話が終わったのか、私に話しかけて来る。
当然、何の反応も示さず無視を続ける。
「まあ、スライムさんには説明する必要はありませんね」
どうやら私には何の説明もしないようだ。
ひたすらに無視を続けていると、いきなり背後から抱き着かれた。
「スライムさんが無視を続けている間に好きなだけ体を触らせてもらいますね」
無視をやめたところでやめるつもりはないでしょうに。
邪神の言葉に少し呆れた感情を出してしまったが、すぐに消す。
いつも見せつけるように触っている仕返しなのか、未だに体を撫で

まわすのを無視し続ける。
服の中にまで手を入れて来るが、無視無視。
ある程度、触られていると何か思いついたように邪神が話し始める。
「そうそう、忘れていました。ようこそ、神の領域へ。歓迎しますよ、葵さん、名無しの蜘蛛」
祝うのを忘れていた上に、私の体を触りながら言っても祝われている気がしない。
それにその言い方は白ちゃんに気付かせる気なのか。
「いつまでも前世の名前や名無しのままでは不便でしょうし、名前を付けてあげましょう。神化祝いの、私からのささやかなプレゼントです」
なんの確認もなしに勝手に決めようとする、邪神にまた呆れてしまう。
「青織と白織。スライムさんの名前が青織で、蜘蛛さんの名前が白織です。我ながら良い名前だと思いますよ」
自分で言うことではないでしょうに。
邪神の言葉に対して先ほどから呆れを隠しきない。
むしろ、呆れを隠すことをやめた。
「そうそう。青織さん、楽しい時間をあげたのですから、私のことも楽しませてくださいね」
よく言うわねぇ。
前世であなたがしたことを忘れたの？
後、触るのやめてから言うべきでしょ。
好き勝手言う邪神への文句だったが、そこで意識が途切れる。

目が覚めると、私は白い壁に囲まれていた。
これって繭？
私が繭を破ろうと力を込めるが、破ることが出来ない。
繭がかなり丈夫なせいで破ることが出来ずにいると、外から繭が破かれた。

繭を破いたのはアリエルさんだったようだ。
「青ちゃん？」
「そうですが、どうかしましたか？」
驚いているアリエルさんに問い返しながら、私は繭の外に出る。
そしてアリエルさんから返事が返ってくるまでの間に繭の中に視線を向ける。
繭の中に大鎌があったので、あれで破ることも出来たんだ。
いや、そもそもなんで私は繭を破れなかった？
私の力はアリエルさんと大して変わらないはず、それに神化した私の方が力が強いはずだ。
ああ、ステータスもスキルも全て使えなくなったんだ。
まさか、サポートを受けないとステータスの強化すら満足に出来ないとは。
弱体化したことを知り、ため息をつく。
それでもすぐに現状を受け入れて繭の中から大鎌を取り出す。
「青ちゃん。その目、どうしたの？」
「目？何か変わってますか？」
「瞳が少し変わってるよ」
アリエルさんの言葉に目を確認しようにもスキルが使えないせいで鏡も出せない。
ちょうど繭から取り出して持っていた大鎌の刃に目を移して見てみる。
虹彩の色は前と変わっていないが、瞳孔が出来ていた。
猫のような縦長の瞳孔で、水色に光っている。
元から人間とは思えない目をしていたが、完全に人外の目になってしまっている。
これは、隠して置かないとだめだねぇ。
しかし、隠そうにも今まで顔を隠していた布は空納の中。
スキルが使えない以上、顔を隠すことが出来ない。
そんなことを考えていると、アリエルさんは私が入っていた繭の隣にあるもう一つの繭を破っていた。

アリエルさんが破った繭から白ちゃんが出て来て盛大にコケる。
「白ちゃん！大丈夫？」
私は顔面から地面に倒れた白ちゃんに駆け寄る。
白ちゃんは足が人間の足になっていた。
そして白ちゃんの瞳も変わっていて、瞳の中に小さな瞳が四つ重なっている。
どうやら、神化して人型になったことで蜘蛛の目と人の目が一緒になったみたいだ。
後、なぜか知らないが全裸。
私は和服来てたんだけどねぇ。
ああ、これ私と繋がってるから大鎌と同じ扱いなのかな？
「ほら、立てる？」
私は白ちゃんの体を支えながら起き上がらせる。
スキルが使えない以上、私も白ちゃんに服を作ってあげることが出来ないので服はどうしようもない。
そんなことを考えていると、ギュリギュリが現れる。
「目を覚ましたか」
「ギュリエ！今はちょっとダメ！あっち向いてて！」
アリエルさんが慌ててギュリギュリに後ろを向かせる。
私はギュリギュリに白ちゃんの体を見られないように、白ちゃんを抱き寄せて和服で隠す。
「私は女性の体を見ても何も感じんが？」
「そっちがよくてもこっちがだめなの！デリカシーないんだから！だからサリエル様にも振り向いてもらえないんだよ！」
アリエルさんの辛辣な一言に、ギュリギュリがダメージを受けているが、今はどうでもいい。
「とりあえず服着て」
「アリエルさん、今私達スキル使えないみたいです」
「え？」
私の言葉にアリエルさんと白ちゃんは驚いている。
白ちゃんは私に言われて試したようで、本当にスキルを使えないこ

とを理解したようだ。
白ちゃんはスキルが使えないと分かると、茫然自失状態になってしまった。
取り合えず、白ちゃんに服を着せるために私が支えながらテントに連れて行く。
テントで白ちゃんは着せ替え人形にされて遊ばれていた。
私はアリエルさんに顔を隠すための布を作って貰う。
私の方から透けて見えるように作って貰ったので、問題なく見える。
これでよし。
私は白ちゃんが着せ替えられたりするのを見ながらアリエルさんの話を聞く。
途中でポティマスのことなどを話していたが、あんな小物のことなどどうでもいい。
あの後何があったのかが気になっていたので、それ以外の話はほとんど聞き流していた。
アリエルさんの話では地上でもかなりの被害が出ていたようだ。
主に神言教の兵士が、だけどねぇ。
人形達とクイーンタラテクトはかなり活躍していたようだ。
アエルが白ちゃんと私に褒めてオーラを出しながら頭を突き出してきた。
白ちゃんと私で順番に撫でてやると、リエル達も撫でてもらうために近づいて来る。
アエルを撫でた後にサエルが私に、フィエルが白ちゃんに撫でて貰いに来た。
なぜか、ソフィアも撫でて貰いに来たのは謎だ。
君は私達と同じ転生者でしょう？
ソフィアとメラの迎えに行ったのは、ギュリギュリらしい。
そしてＵＦＯの事件からかなり日が経っているらしく。
私と白ちゃんが繭状態で帰って来たために、荒野で野宿をすることになったらしい。

それは大変だったねぇ。
どうやら、みんなに心配を掛けたようだねぇ。
アリエルさんは目の前で私達が消えたせいでかなり心配してたようだ。
そして白ちゃんの化粧が終わると、アエルが鏡を見せる。
そこで自分の瞳の状態に気づいたようだ。
「そろそろいいか？」
ギュリギュリの問いを聞いて、アリエルさんがテントの入り口を開け、ギュリギュリとメラを中に入れる。
そこからギュリギュリが私達の状態を説明してくれる。
まあ、私は分かってるから別にいいんだけどねぇ。
「そこの、二人はあの騒動の折、ＧＭＡ爆弾をその身に取り込み、そのエネルギーを吸収したことによって進化した。神へと至る進化、神化をな」
そもそも、それが私の目的だったんだけどねぇ。
「それによって二人は生物の枠を超え、私と同じ神へと至った。しかし、その結果システムの適用範囲から外れ、スキルが使えなくなったのだ。それだけでなく、ステータスも反映されていないはずだ」
「ということは？」
「今の二人はエネルギーが無駄に多いだけの一般人だな」
「まあ、補助無しで魔術を使えるようになるまではこのままってことねぇ」
まあ、一般人ってのも面白そうだし私は良いんだけどねぇ。
あの邪神からしてみればつまらないでしょうけど、今まで楽しませてあげてたんだから少しくらい退屈すればいいのよ。
「まあ、なっちゃったもんは仕方ないね。二人が力を取り戻すまでは私らがフォローしよう」
「お世話になります」
これから守ってくれるアリエルさんに頭を下げる。
誰かに守られるなんて初めてかもしれない。
いや、この世界では白ちゃんとお互いに守り合い生きて来たんだっ

たねぇ。
けど、一方的に守られるのは初めてかぁ。
誰かに守られるということを新鮮に思っていると、サエルが近づいて来る。
まるで、私が守るとでもいうかのように私の傍に立つ。
守ってくれるのは嬉しいけど、もうちょっと胸を張っていて欲しい。
あまり自信なさげな態度でいられると、こっちまで不安になる。
まあ、サエルの性格も力も分かっているので心配はしてないけど。
珍しく率先して動いたサエルによろしくと声を掛けて頭を撫でてやる。
私達を見て他の人形が白ちゃんに我先にと近づいていき、白ちゃんに頭を突き出していた。
君らは頭を撫でられたいだけだじゃないよねぇ？

弱ってからの日々

私と白ちゃんが神になってから二年が経った。
二年前の事件で膨大なエネルギーを取り込んだことにより、神になったまでは良かった。
しかし、神になったことでシステムから除外されたことにより、ステータスやスキルが使えなくなった。
私も白ちゃんもシステムの補助無しでは魔術が使えないために大幅に弱体化した。
「ひゅー、ひゅー」
その弱体化が原因で現在白ちゃんは私の膝の上で虫の息になってる。
前世の体のスペックを基に今の私達のスペックは出来ているようで、白ちゃんが地球基準でも虚弱だ。
ただ歩いているだけで倒れてしまうほどに体力が落ちていた。
今は歩いているわけではなく馬車に乗っていて、馬車酔いで白ちゃんがダウンしている。
「白ちゃん大丈夫、じゃないね。もうちょっとの辛抱だよー。宿屋はすぐそこだ」
「だって、もう少し頑張ってねぇ」
「わかった」
アリエルさんの励ましに合わせて私も白ちゃんを励ます。
白ちゃんは死にそうになりながらも返事をしてくれる。
私が白ちゃんの様子を見ていると、フェイルが近づいて来る。
フェイルが白ちゃんの頬を指先で突っつき始めたので、私がフィエルを止める。
「今はそっとしておいてあげて」
私が止めると、フェイルは大人しく突っつくのを止めた。
しかし、今度は白ちゃんの頭を撫で始める。
撫でるというよりは、頭を掴んで回すと言った方が正しいかなぁ。
「やめようか、フェイル」

フェイルに頭を撫でるのを慌ててやめさせる。
そんな撫で方をすると白ちゃんが大変なことになってしまう。
私がフェイルを止めると、アエルがフェイルの頭にチョップを叩きこむ。
フェイルはなぜ叩かれたのか分かってないようだ。
白ちゃんのことを心配してるんだろうけど、お願いだから大人しくしていて欲しい。
正直、私は白ちゃんのお世話で手一杯なので、人形達の面倒を見る余裕はないしねぇ。
私の隣で座ったままこちらをチラチラと見ているサエルに視線を向ける。
サエルは自発的に動くことはないが、私が弱体化してからは基本的に私を守るようにずっと隣にいる。
基本的にアリエルさんが居るため、サエルに守られるようなことは一度もなかったけどねぇ。
もう一人のリエルは、何を考えているか分からない顔で虚空を見つめている。
アエルにはフィエルとリエルの面倒をしっかりと見てもらいたいものだねぇ。
ソフィアは最初の頃は白ちゃんのことを心配していたが、最近は完全に放置している。
メラは最初の頃、率先して白ちゃんの看病をしようとしていたが、私が居れば問題ないので断っている。
メラ的には恩返しのつもりなのだろうけど、必要ないので仕方ない。
私としてはメラを鍛えることが出来なくなったのは残念だけどねぇ。
今は私がやっていたことをアリエルさんに代わりにやって貰っている。
ソフィアを守れるくらいに強くするって約束もあるからねぇ。
メラは見た目が唯一まともな大人の男なので、街に入る時は矢面に

立つことが多い。
白ちゃんが人型になったため、私達は全員街の中に入るようになった。
人形達も私と白ちゃんが改造したことで、人にしか見えないので問題なく街の中に入れる。
問題は私と白ちゃんの目が見られたら人じゃないとバレるので目をいつも隠している。
私は布で顔を隠しているが、白ちゃんはフードを目深にかぶり、街の中ではいつも目を閉じている。
おかげで、私も白ちゃんもどこかの令嬢と思われているらしい。
まあ、私は和服のせいでもあるんだろうけどねぇ。
明らかに、一般人ではないって分かるだろうし。
この二年で色々あったが、私と白ちゃんが弱体化したことによる一番の問題は荷物だ。
私と白ちゃんが旅に必要な荷物を空納に全部入れていたので、荷物を持たずに旅を出来ていた。
私と白ちゃん以外に空間魔法を使える人はいないので、空納に入れていた荷物を持ち運ばなければならなくなった。
私と白ちゃんの魔法能力がかなり高かったため、空納の容量もかなり大きかった。
それを人力で運ぶことも出来なくはないが、巨大なリュックを背負うことになるので馬車を買うことになった。
私達の空納に入っていた荷物はギュリギュリが取り出してくれた。
まあ、取り出された空納の中身に唖然としたけどねぇ。
私の非常食として詰め込まれていた大量の魔物の死体。
私や白ちゃんと人形達が暇つぶしに作った大量の服。
野営道具一式、大量の調理器具と調味料。
挙げればきりがないくらい。
その中で一番問題だったのが、私が修行時に付けていた大量の神重鉛。
私が修行に使っていたこともあり、持ち上げられるのがアリエルさ

ん一人だった。
人形達でも神重鉛の腕輪は一つも持ち上げられなかった。
それが何個もあるので、流石のアリエルさんも全部を持つことは無理だった。
かなりの魔力を込められた神重鉛を放置していくのは流石に出来ないし、魔力を抜けるのは込めた私だけ、私は神になったことで魔力を抜けなくなった。
仕方ないので、ギュリギュリに処分を頼むことになった。
今度からは空納の整理もしないとだめだねぇ。
まあ、今は使えないんだけど。
「白ちゃん、青ちゃん、宿屋着いたよー」
アリエルさんの言葉を聞いて私は白ちゃんに視線を向ける。
「白ちゃん、一人で歩ける？」
「むりー」
「そう。なら、いつも通りね」
「お願い」
白ちゃんに確認を取り、私は白ちゃんをお姫様抱っこする。
馬車酔いしている白ちゃんを揺らさないように気を付けながら運ぶ。
私より運ぶのに適した人はいるが、今まで白ちゃんの背中に乗せて貰っていたのだ。
白ちゃんが動けない時くらい、私が運ばないとだめでしょう。
白ちゃんを宿のベッドに降ろすと、そのまま寝てしまった。
私も夕食を食べ、白ちゃんの隣のベッドで寝る。
次の日、目が覚めると私と白ちゃん、サエルを残してみんなお出かけ中のようだ。
白ちゃんはまだ寝ているようだったので、白ちゃんのベッドに座って日の光を遮る。
寝ている白ちゃんの頭を撫でていると、白ちゃんも目が覚めたようだ。
起きた白ちゃんを部屋に備え付けられている鏡台の前に立たせる。

「サエル、白ちゃんの服選んできて」
人形達は白ちゃんの身だしなみをいじるのが好きらしいので服選びを任せる。
本当は私の身だしなみもいじりたいようだが、私は化粧はしないし、服もずっと同じ和服なのでいじれる機会がない。
どうしてもいじりたそうな時は髪をいじらせてあげている。
サエルが服を持ってくるまでの間に、私は白ちゃんの髪をすいて三つ編みにする。
サエルが半袖ミニスカの露出が高い服を持ってくる。
サエルは意外と大胆な服を着せたがる。
私もサエルに任せたらこんな服着せられるのかなぁ。
流石に、こんな露出の多い服は着たくない。
白ちゃんは文句を言わないが、諦めてるだけで思うところはあるのだろう。
サエルが白ちゃんに服を着せて、日焼け止め効果のある化粧水を肌に塗る。
白ちゃんの身だしなみを整えると、白ちゃんはローブを取り出して着こむ。
白ちゃんがフードを目深にかぶったのを確認して遅めの朝食を取るために宿の食堂に向かう。
食堂では二人の男が酒を飲んで談笑していた。
そして私達に視線を向けて怪訝な顔をする。
面倒な予感がするけど、お腹空いたしいいか。
二人の男の横を通り過ぎようとすると、男の一人がわざとらしくよろける。
そして私の顔を覆っている布を取ろうと、手を伸ばしてきた。
「おおっと！・え？・」
男は間抜けな声を出しながら自分達のテーブルの上に落ちる。
白ちゃん達は驚いたようだが、気にせずに私は白ちゃんの手を掴んで進む。
「おい！・待てよ！・」

無視して進もうとする私達に手を伸ばしてくるもう一人の男も同じように手首を掴んでもう一人の男の上に投げる。
白ちゃんも男達も私が何をしたのか分かってないようで、かなり驚いている。
サエルも大人の男を片手でぶん投げる私に驚いているようだ。
まあ、ステータスが無くてもこのくらいは出来る。
そうでなければ、数万もステータスに差があるアリエルさんと摸擬戦なんて出来ないでしょ。
問題があるとすれば、ステータスで守れてるこいつらにダメージを入れるのは簡単ではない。
これ以上絡んでくるならサエルに殺させよう。
男達がまた絡んで来ようとする前に、食堂の奥からおばちゃんが出て来て男達を止めた。
もしおばちゃんが出てこなければ、二人は死んでただろう。
おばちゃんは冒険者がどうの、オーガがどうのと言っていたが興味が無かったのでほとんど聞き流した。
「さ!ご飯食べに来たんだろ?騒がせた詫びに安くしとくよ!」
男達に絡まれたのも無駄ではなかったねぇ。
二回ぶん投げただけで安くしてくれるなんていい人だ。

いろいろ面倒そうだ

現在、私の隣で白ちゃんが苦戦している。
私が手を貸そうとしても自力で何とかすると、諦めずに頑張っている。
「ふ、ぐぅ！」
「お嬢ちゃん、そんな無理して食べなくてもいいんだよ？お腹いっぱいなら残したっていいからさ」
「白ちゃん、食べ物は残さない主義ですから」
「そうは言ってもねぇ。小一時間もそうやって粘ったって、食べれないものは食べれないって」
「そうだよ、白ちゃん。残りは私が食べてあげるから、もうやめておきなって」
私とおばちゃんの言葉に白ちゃんは目の前の美味しそうな料理をじっと見つめる。
この宿の料理は質より量を優先しているが、味もいい感じで普通に美味しい。
しかし、飽食のスキルがなくなったせいで、白ちゃんの食べれる量がかなり少なくなった。
そのため、白ちゃんは出された料理を食べきれずに苦しんでいる。
「うっ！」
「ほら、これ以上無理したら吐いちゃうよ」
食べ過ぎで吐きそうな白ちゃんの背中を優しく撫でる。
「うぅ」
「ちょ!?お嬢ちゃん泣かないでおくれよ！ほら、大丈夫だから、ね？」
食べきれないことが相当悔しいようで、ついに泣き出してしまった。
そして食べることを諦めたようで、私の方に皿を寄せる。
すでに冷めている料理をパクパクと食べる。
うぅ、隣の白ちゃんからの視線が・・・・・・
スキルほどではないが、前世で大食いと言われるような量を食べれ

る私に白ちゃんが羨ましそうな視線を向けて来る。
涙目で羨ましそうに見て来る白ちゃんの視線に耐えながら、料理を平らげる。
そしてお皿をおばちゃんに渡して白ちゃんとサエルと一緒に食堂を出る。
正直に言えば、全然満腹というわけではない。
次の食事の時間まで空腹をしのげる程度には食べたので問題はない。
問題があるとすれば、白ちゃんの前でこれ以上大量に食べたら本気で泣かれる可能性があることだ。
腹五分目なんて言えない、絶対に。
その日の夕方、アリエルさんが難しい顔をしながら帰って来た。
ソフィアも殺気立っているから、何かあったみたいね。
「よくない知らせが二つ」
部屋にメンバーが全員集合したところで、アリエルさんが口を開いた。
普段飄々としているアリエルさんが難しい顔をしているし、かなり面倒なことになってそうだな。
「まず一つ目。どうも何日間かこの街に足止めくらいそうな感じ」
アリエルさんの話によれば、これから向かう予定だった魔の山脈に行く街道でオーガが出るらしい。
そのオーガが冒険者を何人も返り討ちにしているため、街道が閉鎖されているらしく。
なので、閉鎖が解除されるまではこの街に滞在するそうだ。
そして問題はもう一つの方のよう。
なんでもエルフに襲われたらしい。
おかげで数日の間警戒して過ごさないといけなくなった。
まあ、どうせ何もして来ないだろうけどねぇ。
その日の夜、全員が寝静まった時間。
私が一人で部屋の窓から月を見ていると、手元にスマホが現れた。
「もしもし、お久しぶりですねぇ」

『はい、お久しぶりです』
予想通りの人物の声に私は少し口角をあげて問いかける。
「どうしたんですか？何も用事はないでしょう？」
『青織さんが未だに何の行動も起こさないので、催促の電話です』
「そんなこと言われてもねぇ。力を取り戻せてないしねぇ」
見えているか分からないけど、肩を竦めながら返す。
『よく言いますね。その気になればすぐに力を取り戻せたんじゃないですか？』
「私のこと買い被り過ぎじゃない。そんなすぐに取り戻せるなら、こんなに苦労してないわよ」
『あなたがいつ苦労したって言うんですか？苦労してるのは、白織さんの方であなたは一度も苦労してないじゃないですか。むしろ、弱体化した現状を楽しんでいますよね』
「あら、バレてる」
適当なことを言っていると、簡単にバレたようだ。
まあ、仕方ないねぇ。
「流石、姫色ね。いえ、今はDって呼んだ方がいいのかな？」
『呼びやすい方でいいですよ』
「じゃあ、Dって呼ぶことにするわ。姫色って呼んでると後々面倒なことになりそうだし」
『それより、話を逸らさないでもらえますか？』
「逸らす気はないわよ。たまたま逸れただけ」
そもそもDを相手に話を逸らせるとは思ってない。
逸らしたら逸らしたで、かなり面倒なことになりそうだしねぇ。
『それでいつになったら私を楽しませてくれるんですか？』
「何言ってるの？今も楽しんで見てるんでしょ」
Dのことだから、弱体化した白ちゃんが苦労してるのを見て楽しんでいるのだろう。
そして、そんな白ちゃんを慰めてる私のことも見て楽しんでいるはずだ。
『確かに楽しんでいますが、二年も続けば飽きるというものです』

「なら、もう少し我慢して待ってたらいいんじゃない？私達以外にも面白いことやってくれる転生者が居るかもしれないわよ」
『私はあなたに期待してるんですよ。私の期待を裏切るんですか？』
「先に裏切ったのはあなたでしょ、D」
Dの問いを鼻で笑い、肩を竦めて平坦な声で返す。
やられたことをやり返して居るだけ、私は悪くないですよ。
口角を吊り上げて笑う私に、Dは相変わらず感情の感じられない平坦な声で返してくる。
『それを言われると困りますね。しかし、偶然とは言え、あなたの願いを叶えてあげたのですから、あのことは水に流して私を楽しませてくれても良いじゃありませんか』
「嫌に決まってるでしょ。けど、願いを叶えて貰った恩もありますから、その時が来たら楽しませてあげますよ」
『その時っていつですか？』
「私の気が向いた時ですよ」
『仕方ありません。その時が来るのを待っています』
「意外と素直なのねぇ」
面白そうならなんでもするDが何もして来ないなんて意外だ。
いや、どんなことをしても無駄だって分かってるから何も言わないのかな。
『ええ、私にあなたを従わせる手段はありませんから、嫌だと言われたら諦めるしかないのです』
「まあ、それはお互い様ですがねぇ」
『そうですね』
Dが私を従わせられないように、私もDをどうにもできない。
『あなたが楽しませてくれるまで、私は白織さんで楽しむことにします』
「はあ、あんまり白ちゃんを虐めないでねぇ」
『分かっています。それでは、また電話しますね』
「そう、またね」
私の返事を聞いてスマホが手から消える。

スマホが消えた後、スマホを持っていた手を少し見つめる。
はあ、私も早く寝よ。

悟りの正体

ソフィアやアリエルさんがエルフの襲撃を受けてから宿屋で暇している間、アリエルさんのスキル講座が開催されていた。

スキル講座と言っても、アリエルさんがソフィアに対して行っているだけで、私と白ちゃんはほとんど聞いているだけで暇なことに変わりはない。

そもそも私達は神になったことでスキルが使えなくなったから、今更講座を受けても意味がない。

アリエルさんはソフィアの妬心のスキルレベルを上げないように講座しているみたいね。

アリエルさん曰く、七大罪系や七美徳系のスキルの危険性を説明していた。

けど、やばいって言ってる傲慢は白ちゃんが持ってたけど問題なさそうだったけどなぁ。

傲慢の危険性は所有者の限界を考慮せずに無理矢理成長させ続けることだから、成長についていけば問題ないのね。

これに関しては白ちゃんがすごいと考えた方がいいのかな？

でも、傲慢より遥かに高い成長率の悟りは相当危険なスキルってことになるんじゃ？

そんな危険なスキルを私に付けたのかDは……

けど、Dの性格からして急成長して破裂させるよりも、ゆっくりと苦労する姿を見て楽しむと思うんだけど、私に成長を補助するようなスキルを付けた理由ってなんだろ？

私が神になれる確信があったから短時間で神になれるように強制成長させた？

けど、私が神になったからといってDが楽しめる訳じゃないし、短時間で神にする必要はないはず……

となると、悟りのスキルを付けないといけない理由があった。

スキルの内容的に私に支配者スキルを取得させたくなかったから？

アリエルさんの話だと、支配者スキルは精神汚染があるらしいけど、Dが私の精神汚染を心配するとは思えないのよねぇ。
むしろ、精神汚染される私を見て楽しむと思うんだけど……
悟りを付けた理由として考えられる可能性が、Dの性格と合わない。
つまり、私が知らない要因があるわけね。

アリエルさんのスキル講座が行われた日の夜、全員が寝静まった後にスマホを持つような形にした手を見ながら呼びかける。
「D」
『はい。こんばんは、青織さん』
「こんばんは」
まるで最初から持っていたかのように自然に手に収まったスマホを耳にあてながら返す。
『青織さんから声を掛けてくれるなんて珍しいですね。私に何か聞きたい事があるんですか?』
「私が何を聞きたいか分かっているんでしょ」
『ええ、分かっていますよ。悟りのスキルについてですよね』
「今日少し考えたけど、あのスキルって何だったの?傲慢と同じ成長系ならかなり危険なスキルじゃない?」
『はい。青織さん以外だと確実に破裂しますね。それはもう盛大にパーンと』
「私以外、ねぇ……」
スキルに詳しいアリエルさんが悟りについて何も言わなかったから、もしかしたらと思ったけど。
「私に合わせて作ったスキルってこと?」
『はい。青織さん専用のスキルです』
「余計に分からないわねぇ。あなたが私に成長系スキルを渡す理由が分からない。それもチートクラスの成長系を」
『それは簡単ですよ。悟りの本来の効果は成長チートではないからです』

「え？」
悟りが成長チートじゃないってことは、スキルの説明が嘘ってことね。
私専用のスキルってことだし、説明通りの効果じゃなくても良いってことか。
『システム上は説明通りの効果はあるので、説明が間違っているわけではないですよ』
「システムの裏では全然違うのね」
『はい。詳しく説明しますね』
「よろしく」
『まず、青織さんは転生時のスキルポイントついて疑問に思ったことはありますか？』
スキルポイントに疑問って言われてもねぇ。
私が会ったことある転生者ってソフィアと白ちゃんだけだしなぁ。
「そういえば、ソフィアに比べて私のスキルポイントかなり少なかったのは、気になったかな」
『そうです。青織さんのスキルポイントは他の転生者に比べてかなり少なくしてあります』
「意図的に少なくしたのね」
『正確には、少なくする必要があったが正しいですね』
「スキルポイントをわざわざ少なくする必要って何なの？」
『青織さんの成長遅くするためですよ』
成長を遅らせようとしてたってことは、悟りはかなり特殊なスキルってことよね。
『そして悟りは青織さんの成長を制御するためのスキルです』
「制御？」
『はい。最初はゆっくりで徐々に早くなるように、成長をコントロールさせてもらいました』
「言うほど、ゆっくりでもなかったと思うけど？」
『本当にそうですか？』
「？」

どういうことだろう？
Ｄが言うほど成長が遅かったとは思えないけど、実際はそうじゃないのかな？
比較対象が白ちゃんくらいしかいないから、分からないだけかな？
『最初から悟りのスキルと称号を持っていたにしては、遅いと思いませんか？』
「あっ」
『青織さんなら気づくと思いましたが、比較対象が少なかったためか気づきませんでしたね』
「確かに、称号で進化やレベルアップボーナスが上昇していってるにしては、遅かったのか、な……？」
『まあ、成長速度を制限するだけなので、頑張れば十分に早く成長はします』
「なるほど、確かに最初の頃かなり大変だったな」
確かに、Ｄの言う通り過酷な環境で成長系のチートスキルと称号を持ってるわりには遅かったかな。
まあ、そんなことは実際はどうでもいいんだけどね。
「どうして、そんなスキルを私に付けたの？」
『あなたに何の制限もつけずに転生させるわけにはいかなかったんですよ』
「私と他の転生者に大した差なんてないでしょうに」
『あまり適当なことを言わないでください。あなたと他の転生者では天と地よりも大きな差がありますよ』
「他の転生者、そんなに弱いの？」
『他の転生者達は、普通ですよ。あなた一人だけが、異常だったんですよ』
異常って言うけど、人間をやめていたわけじゃないから、そんなに異常ではなかったと思うけど。
『平穏な地球で育ったただの人間でありながら、神話級の魔物に匹敵する魂を持っている方がおかしいんですよ』
「私の魂、そんなに強かったんだ」

『正直、何の制限も付けずに他の転生者と同じように転生させても良かったのですが』
　ん？制限を付けなくても良かったの？
『その場合、一年くらいで星に存在しているあらゆる生き物を食い尽くして神に至りそうだったんですよね』
「……」
『私としては、突如現れた絶望と死の権化のような魔物に蹂躙されていく現地人がもがき苦しむ姿を見るのも楽しそうではあったんですがね』
「流石、世界最悪邪神ね」
『あなたが、星を蹂躙することは否定しないんですね』
「まあ、やらないとは言い切れないからね」
　実際にやったかどうかは分からないけど、絶対にしないとは言い切れないのは確かね。
『ただ、そうなった場合、他の転生者は生まれて間もない頃に全滅していたでしょうから、流石にそれは可哀想だなっと思いましたので、制限を付けて他の転生者達と同じように頑張ってもらうことにしたんですよ』
「何が可哀想だな、よ。折角転生させたのに、何の面白みも無く死なれるのがつまらなかっただけでしょう」
『何にせよ。青織さんに制限を付けた方が、色々面白そうだなっと思ったからというのが、悟りを付けた理由になります』
「ふ～ん」
　まあ、Dらしい理由ね。
　私の無双に現地人が絶望する姿を見て楽しむくらいしかないより、私も含めてたくさんの人がもがき苦しむ方が楽しめるってことでしょ。
　まあ、私としてもそんなのつまらないから、制限を付けたことに関しては良いかな。
「ねえ、一つ気になることがあるんだけど」
『何ですか？』

「どうして悟りなんて名前にしたの？」
『私としてはあなたらしい名前だと思いますよ』
「私らしいねぇ。まあ、あなたが言うならそうなんでしょうね」
聞きたい事も聞けたし、今日はもう寝ようかな。
「じゃあ、そろそろ寝るわ」
『はい、それではまたいつでも声を掛けてくださいね』
「気が向いたらね」
私の返事を聞いたのか聞かなかったのか分からないが、スマホが手の中から消える。